

安政五年三月九日

一八二

久我殿・坊城 傳奏兩卿參侍、

一左府公・内府公・左大將殿・二條大納言殿等御參、

三月九日、乙酉、晴、當番議 奏加勢中山大納言殿、其餘惣參、傳奏兩卿參侍、

一關白殿・右大臣殿兩度・兵部卿宮・内大臣殿・左大將殿・二條大納言殿兩度、等御參、

〔璞記〕

○一條忠孝日記  
宮内省圖書寮所藏本

近衛忠熙三  
條實萬不參  
輔熙齊敬ノ  
兩人忠熙實  
萬宅ニ赴ケ

三月九日、乙酉、昨夜議奏中ヨリ申渡ニ付、今日午半刻出門、○中參朝、御詰殿上人ヲ以時候伺、今日御用召ニ付參上御機嫌相伺之事、左府・内府不參、右府・予・二條亞相等參賀、御拜廊下邊ニテ殿下面會、所意無腹藏申上候様ニト被申、面々申述之事、後右府・二條、左府・内府宅へ罷被越後參朝、殿下へ返答被申述也、予・二條無所意旨申述事、後言上相濟旨、議奏德大寺亞相被申述、勝手ニ退朝被申告、皆々退出亥半刻也、是墨夷一件難決着致之儀云々、

〔後勤槐記〕

○廣橋光成日記  
孝明天皇紀所載

三月六日、殿下、叡慮御傳書認事、

九日、殿下御命、凡御答御治定、左大臣・右大臣・内大臣・左大將・二條無子細、尙明日迄ニ、

久我・坊城等示談之上、一應可覽、其上今一應叡覽候上、太閤へ勅問之旨被命、

〔德大寺公純日記〕

○臨時帝室編  
修局所藏本

九條關白ノ  
命ニテ勅答  
案ヲ作リ諸  
卿ノ廻覽ニ  
付ス

三月七日、晴、

一異船一件ニ付、御返答振有示談、

一入夜召 御前、万殿・公純、

一攝家一同參集、有示談事、

一亥半許退出、小林刑部少輔來、有示談事、

○欄外記事

一坊城不參、

一中山亞相、加勢被 仰出丁、

一入夜召 御前、

八日、晴、

一當番、參 朝如例、

一關白殿參入、有示談事、

九日、

退出、丑刻計、

一從太閤殿、以小林有示給事、勅書一件ニテ也、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國  
大學所藏本

安政五年三月九日

一八三

異船一件勅  
答ニ就キ談  
合アリ

事記外欄

夜半退出



三月八日、甲申、晴、巳斜參内、當番之、今日、雖請取藏人権弁へ相傳今日墨夷事件ニ付、左・内兩府、左大將殿・二條大納言等參上、○中略、

關白以下參内朝議アリ  
三條實萬催促ヲ受ケ參内ス

午後正親町・六條等亭向、傳聞今日墨夷一件ニ付、殿下・三公・左大將殿・二條大納言・九條大納言等參内之事、兼被召之処、左・内兩府不參、依之右府・二條大納言等、兩相丞之亭向被催促、仍内府參上、於左府者不參云々、

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕

○伯耆藩本實願所藏本

三月八日、甲申、晴、今日左・内兩府、左大將殿・二條大納言等參上、

九日、乙酉、晴、今日殿下御參、三公・左大將殿・二條大納言・九條大納言等、依召參上、然處、左・内兩府不參、依之、右府・二條大納言等行向兩相府被催促、内府參上、左府不參云々、所意囂々、事不果云々、

〔野宮家文書〕

○子爵野宮定毅所藏本

三月九日、關東に再應御沙汰書案文、於役所、公純卿・正房卿被爲見候、被問所存、參合定功任一同ニアラズ、人心居合方之儀と、如何様とも、於關東御引請被遊候との事、及言上候處、人心居合之處

關東へノ御沙汰書案ニ就キ意見ヲ訊ネラル

ハ先以 御安心被遊候得共、

神宮始、御代々に被爲對候と、何とも恐多、東照宮已來之御制度を御變革被爲在候儀と、天下之人望如何と 思召候間、再應被惱

叡慮候ニ付此上何とも 御返答之被遊方無之候、〔朱書〕此上考可在關東御勘考事、併只々深御勘考被爲在度御事と此

段分る被 仰進候事、

〔朱書〕右朱書ハ、殿下御命添削云々、

別紙

一 兵庫開港被盡論判候上之儀と候へ共、何分畿内之儀、甚御不安心被 思召候間、再三論判有之、被除候様之事、

一 京都御警衛之儀、於關東被仰付候趣と候へ共、先達るも御談申候通、何分御手薄之御事候間、堅固御警衛出來候様之事、

一 鎖國之變革と於てハ、於京師後、御改革被遊品々被爲在候間、猶又可被仰進候事、

右文面、甚手ぬるく候間、今少嚴重ニ被書取可然哉、若難被改候ハ、セめて本行之方可然、添削之方彌意味薄候哉、且、別紙三ヶ條とも、無益之事候、唯今不被仰立とも宜儀之、兵庫差甚差支、旁、別紙無之方可然之旨、所存申答了、

安政五年三月九日

一八五

關白ノ添削

文面手ヌルシ改作ヲ要ス



〔川路聖謨都日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

九日 晴 瓦屋霜白一〇備中守殿へ出る。禁裏附茂兩卿よ呼よ來る。勅答比御日限ありともひたるよ。手間とせ候得共。等閑よせよハあらは与之。御挨拶之。一同再ひあくび一と。退散せむ。

〔右大臣鷹司輔熙書翰〕

○子爵東坊城徳長所藏本

○三月八日武家傳奏東坊城聰長宛

何分こも、備中に仰被遣御返答フリ、カト立ヌ様と存候、實こく貴卿御心中察申入候、今日御尋申入候義ハ、偏こく密々ト希入候也、

彌御安康之條、珍重こ存候、過日者、内密一紙被送忝存候、鳥渡御報も可申入乍、人口も候故、差扣申候、扱かぞら御返答如何と日夜存上居候、然處、昨日二公被參候由、定めし御評議と存、二家に内々尋こ遣し候處、他事の由、今日ハ粗、御治定もあらせられ候哉之由傳聞、如何の御様子哉、内々承度存候儘、實にく重大事の場合、何とらく公武の御中にかゝらぬ様、御警衛向相整候様と存上候、太閤こも、此比の時勢相考候故、何分叡慮を立申度由、此比之御時宜ハ、當時之次第故、一向伺不申候へとも、打拂の様と、夫と

太閤モ叡慮ヲ立テント欲ス

速ニ勅裁案ヲ決セラレタシ

無仰被遣候もいさゝの所存無之候へ共、左様こ成ハ、何時戰爭こ及候も難計、其邊の御警衛專一こ仰被遣、御不和こ不成様の所置のこ、御心痛の御様子こ候、其上先日より余本との日數、何とらく、御早々兩端之内、御治定あらせられ候事、天下の御爲と存候、貴卿も彼是と御痛歎、御心中恐察申入候、下官も當時ハ、言語出入無道、誠こく歎息之外無他、併かぞらゝ種々存上、諫争の道絶候共、叡慮を奉安度心魂ハ、いさゝの屈し不申候儘、何とらく、密々、今日の荒増承度存候、書外數々申入度義も候へとも、疑心の世上、最要のこ申入候也、謹言、

三月八日夜、

内々御直披

輔熙

几下

〔右大臣鷹司輔熙書翰〕

○九條尚忠文書所藏

○三月九日關白九條尚忠宛

過刻御一紙返上候、尙明日こても表向從傳奏承候事と被命候也、彌御安康之條奉賀候、過刻者、度々拜面畏入存候、日々御繁用嘸々御草臥と恐察申候、折角御保養專一こ存候、扱、内密拜借候書附、早速太閤へ入覽候處、加様之仰こ相成候得者、實

内密拜借ノ書附太閤一



安政五年三月九日

一八八

こ々々毛頭所存無之、恐悦ニ存候、跡ニ例文、大樹公に御あのみと相加候へハ、尙更々々モ  
ソツト御いや様の處書あらハし候ても御宜哉、實ニ此場ニ到り候迄、御配慮之段恐察申入  
候、何も右之儀、御安心之爲早々申入候、必々々々御報ニ不及候也、恐々謹言、  
正躰無亂書、失敬御仁宥可給候也、

三月九日夜

關白殿下

輔熙

内々

〔議奏加勢中山忠能達〕

○子爵野宮定親所藏本  
野宮家文書所藏

○三月十日現任納言參議一同へ

三月十日、入夜廻覽、

今度之一條不容易、奉

神宮始、御代々に被爲對候る迄、可有如何哉、深被惱 叡慮候、至此期候るも、人心之居  
合、國家之重事ニ候間、三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候、今一應被下 台命、各  
所存被爲書取、入 叡覽候様、御沙汰之趣及言上候處、 叡慮之趣御尤之御事ニ被 思召  
候得とも、人心居合之儀も、如何様とも關東ニ御引請可被遊との事及言上候處、人心居

幕府へノ勅  
裁案ヲ現任  
一同ニ廻示  
ス

合之處ハ、先以 御安心被遊候得とも、神宮始 御代々に被爲對候るも、何とも恐多、東  
照宮已來之御制度を御變革被爲在候儀も、天下之人望如何と 思召、再應被惱 叡慮候  
間、何とも御返答之被遊方無之候、此上も、於關東可有御勘考様、御頼被遊候事、  
別紙之通、關東に 御沙汰之由、武傳被示候、仍申入候也、

三月十日

忠能

右、現任一同廻覽、

〔權大納言中山忠能權中納言正親町三條實愛奉答書〕

○野宮家  
文書所藏

○三月十一日武家傳奏へ

天下之人望、且於 神慮も如何と 思食、彌被惱 叡慮候間、旁以何事共、再三被 仰立度  
思召ニ候得共、於關東、迪も御取計方無之儀ニ候ハ、左右之御返答不被遊候、此趣於關  
東、深御熟察、厚御勘考可有之様、被遊度候事、

御一紙、恐入候得共、奥之処、右之様相成候ハ、諸人氣合、聊歸伏可有之処、

忠能  
實愛

(墨夷一條書留)

安政五年三月九日

一八九

御沙汰書案  
ノ後半變改  
ヲ請フ



〔權中納言三條西季知參議野宮定功奉答書〕○野宮家  
文書所藏

○三月十一日武家傳奏へ

三月十一日、兩卿方被申立書附、被附武傳に、  
○伏見宮侍 御牧家諸留

今度之一條不容易、奉

神宮始、御代々に被爲對候る爲、可有如何哉、深被惱 叡慮候、至此期候ると、人心之居合、國家之重事に候間、三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候、今一應殿下 台命、各所存被爲書取、入 叡覽候様、御沙汰候趣被 仰入候處、 叡慮之趣御尤之御事に被思召候得とも、人心居合之儀を、如何様とも關東の御引請可被遊との事及言上候處、人心居合之處へ、先以御安心被遊候得とも、

右 勅答之趣、頗齟齬とも候哉、纔に一兩月之間に、人心居合候と申場とも難至哉、且、

神宮始 御代々に被爲對候ると、何とも恐多、 東照宮已來之御制度を御變革被爲在候儀者、天下之人望如何と 思召、再應被惱 叡慮候、且大樹公に於ても、右等之儀、深被恐思召候譯のるへ無之哉、如何に候間、旁以何とも御返答被遊うべく候、此上若於關東、再應深御勘考有之候様、御沙汰に候事、

御沙汰書案  
ノ後半變改  
ヲ請フ

右様之御書取のるへ如何可有之哉、愚存越樽恐入候へ共、申上候事、

（三條西、中納言）

季

定

（野宮、參議）  
伏見宮侍御牧家諸  
留墨夷一條書留

知 功

〔權大納言中山忠能等十三人連署奉答書〕○野宮家  
文書所藏

○三月十二日武家傳奏へ

三月十二日、現任人々被申立書取、  
○伏見宮侍 御牧家諸留

今度之一條不容易、奉

神宮始、御代々に被爲對候る爲、可有如何哉、深被惱 叡慮候、至此期候ると、人心之居合、國家之重事に候間、三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候、今一應被下 台命、各所存被爲書取、入 叡覽候様御沙汰之趣及言上候處、 叡慮之趣御尤之御事に被 思召候得とも、人心居合之儀を、如何様とも關東の御引請可被遊との事及言上候處、人心居合之處へ、先以 御安心被遊候得とも、 神宮始 御代々に被爲對候ると、何とも恐多、 東照宮已來之御制度を、御變革被爲在候儀者、

神慮之程如何、且往々闔國人心之歸向に指響、永世之御安全可被爲保哉、其邊深被惱 叡



安政五年三月九日

一九二

慮候得之、今更何共御返答不被遊、猶於關東、被安 叡慮候様、厚 御勘考可有之と 思食候事、

御末文之処、人心居合と、天下之人望と、若哉同意ニ無之哉、且

叡慮御安し、薄く相聞へ候哉、御頼と被爲在候も如何哉、恐入候得共、愚存共申上候事、

三月十二日

御沙汰書案  
ノ後半變改  
ヲ請フ  
中山忠能等  
十三人連署  
上書ス

忠 能

家 (大炊御門、權大納言)

忠 (廣禮、同)

公 (四辻、權中納言)

實 (正親町三條、同)

實 (正親町、同)

季 (三條西、同)

隆 (八條、參議)

資 (日野、同)

重 (庭田、同)

通 (中院、同)

信 禮 績 愛 德 知 祐 宗 胤 富

實 (備本、同)

麗 功

右十三人、○野宮

(甘藷等、權中納言) (陸奥、同) (冷泉、參議)

(伏見宮侍御牧家諸留)

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

惣參内

三月十日、丙戌、晴、午後曇天、當番議奏大藏卿殿、其外惣參、久我殿、坊城殿不參、傳奏衆參侍、

一右大臣殿御參、○中略、

十一日、丁亥、雨、議 奏當番加勢正親町三條中納言殿、自餘惣參、久我殿、坊城殿等不參、傳奏廣橋前大

納言殿參侍、

一殿下・右府公・内府公等御參、

〔後勤槐記〕○廣橋光成日記

孝明天皇紀所載

三月十日、巳半刻參内、關東へ被仰遣候叡慮書附草出來、從議奏受取、午刻後退出、參殿下

叡慮書草入御覽、少々思召之處被命尚清書候テ、太閤へ可有 勅問被命、歸參内、清書萬里

小路筆出來退出、參太閤、 叡慮書 勅問無御所意、次參殿下、太閤 勅問濟申入御返答、

其由及言上、近衛亞相以下へ爲見可被下被命、歸參内、太閤御請以左馬權頭言上、大炊御門

安政五年三月九日

一九三

關東へノ勅  
裁案ヲ太閤  
以下現任諸  
卿ニ廻示ス



東坊城廳長  
不同意

以下大中納言・參議等現任、從中山・正親町三條藏人頭胤保へ申渡、翌日、從長順朝臣、返上申半刻退出歸家、東坊城廳長同役

入來、內示、不同意、

〔璞記〕○一條忠香日記  
宮内省圖書寮所藏本

三月十日、丙戌、近衛忠房亞相君ヨリ、愚息實良へ封中來、一覽後明日午刻迄ニ、傳奏衆へ差出候、承知之旨申入候儀申來之事、是亞國一件御返答書、粗御內定之事也、廻り留ニ付傳奏へ返上之事、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編  
修局所藏本

三月十日、晴、

- 一 參 朝巳斜、
- 一 殿下參入、不參、小林來、有示談事、
- 一 退出亥刻許、御返答一件、有示談事、
- 一 陽明家行向、有示談事、
- 一 十一日、雨下、
- 一 右府亭行向、有示談事、
- 一 殿下參入、○中

一 亥刻許退出、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國  
大學所藏本

關東へノ御  
沙汰書ノ件  
ニ就キ廻狀  
來ル

三月十日、丙戌、晴、午後參帥宮、申入有子細、墨夷一件、甘露寺亭向、酉刻許參内、宿候加番、謁德大寺亞相、昨日之御時宜及尋問所意粉亂、事不被果云々、子刻許從日野黃門廻文到來、墨夷之事、關東へ御沙汰書被爲見之趣、別記宰相中將へ傳達了、今日煤拂了、六條三品被來、墨夷一件被申上所存ニ付被示談、

十一日、丁亥、雨、午後花山院前内府來臨、墨夷之件々被尋問了、（家屋）

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕○橋本實麗日記  
伯翁橋本實麗所藏本

三月十日、丙戌、晴、午後參帥宮、墨夷一件ニ付被建白之由にて、今ニ延引之間、愚意申述了、宿爲加番參内、謁德大寺亞相、昨日時宜及尋問之處、不甘心候事共之、  
今度關東に御沙汰之趣御治定、從武傳現任一同廻覽有之旨被囑、亥刻過、從日野黃門廻文到來、讀左、

今度之一條不容易、奉

神宮始、御代々に被爲對候多、○中

十一日、丁亥、雨、巳刻許、四辻黃門被來、諷之、昨夜從武傳被傳候書取、末文如何敷之間、



所存被申立候由、所意無之哉被尋問、於所存毎々申上有之候事故、一同之事候ハ、兎モ角モ、先所存無之旨、相答了、

〔野宮家文書〕

○子爵野宮定數所藏本

三月十一日、昨夜廻覽御沙汰書之案、甚不得其意候間、參 内、謁德大寺亞相申所存之處、無斟酌書取可差出旨被答、小時、三條西中納言參 内、同被述所存、同意候間、〔上二掲〕連名一紙書整、屬武傳廣橋前亞相、

○三條西季知・野宮定功連署ノ奉答書ハ、上二掲アルヲ以テ之ヲ略ス。

中山大納言・三條中納言、同被出所存書、

〔菅葉〕

○五條爲定日記宮内省圖書寮所藏本

三月十一日、丁亥、雨、新中納言季知來、今度關東に御返答書、現任人々に爲見給之由、内々一覽、互ニ所歎息也、

今度之一條、不容易、奉 神宮始、御代々に被爲對候も、○中

十二日、戊子、陰、○中

今日、現任人々亦連名、以一紙被申立云々、

〔長谷家記〕

○孝明天皇紀所載

三月十一日、入夜正親町三條面會、過日從關東奉答ニ付、御返答現任一同へ御沙汰有之、其趣、

今度之一條不容易、奉神宮始御代々へ被爲對候テモ、○中

右御沙汰、殿下始夫々一同御同意御治定、來十四日、堀田備中守ヲ被召、於宮中被申渡之由、今夕治定、於彼卿モ歎息如何可致哉ト心痛之趣、予モ聞之、扱々歎歎次第、此御返答ニ相成テハ、關東之心任ニ可致、左候ハ、可及大亂歎、若諸大名閉口居之節ハ、終可至被髮左衽之境界、實天下之安危、國家之榮辱、在此一舉、併如此御決定之上ハ、致方無之哉、尙同志之兩卿へ申談、勘考決定可申答了、

〔中山忠能手記〕

○宮内省圖書寮所藏本中山忠能履歷資料所載

三月十一日、粗御治定之處、同十二日現任十三人、以一紙有申旨、

〔雅俗日簿〕

○山科言成日記宮内省圖書寮所藏本

三月十一日、陰晴不定、○中

一岩倉侍從入來面謁、其儀異國伺、日本預國政臣下在志輩、兩役之内江所意申出追々有之間、予在所存ハ可申出哉、經門前之間、以深切申云々、件儀、不可說彼朝臣、於予由緒無之人之、如俗諺似以木括鼻、不可說人之、後聞、廿人許及參 内、申所存人有之云々、

勅答書案ヲ見テ歎息ス

三條西野宮連署ノ奉答書ヲ上ル

外交措置ヲ關東ニ委任セバ天下大ニ亂レン

岩倉具視山科言成ヲ訪フ



〔平田職修日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

三月十三日、○中略、

一去月、堀田參 内後、殿下・大閣以下度々御參 内御評義有之候而、參議以上 勅問有之、各所意言上之処、事兩條ニ相成、三家以下諸大名赤心

叡覽可有之與、關東江申參候処、此比關東方御返答有之由、此節殿下以下度々御參 内御評義由承候、併シ世上之取沙汰計ニ而睨與義不存也、仍堀田者在京儘也、

〔左大臣近衛忠熙書翰〕

○九條尚忠文書所藏

○三月十日關白九條尚忠宛

追々春暖ニ相成候、彌御安全之御事恭賀候、誠ニ昨日ハ、一件御評議ニ付被 召候處、折惡敷一昨夜方頭痛強、不參御斷申入候處、保養之上、少々ニあるも快方候ハ、可參旨被 仰下、何卒々々、推る參 内ト精々保養致候得共、夕景ニ至、吐逆も在之、大難澁之次第、其故推るも難參、如何之御模様哉ト心配之處ニ、右府（謂、權大納言）・二條等御使ニある實ニ恐入候、御書取も拜見、至極之御趣意ト昨夜申上候通ニ候、彌御治定哉ニ拜承先安心候、然ル處、今夕從右府使（良典）ニ小林筑前守來、面會致度旨ニ候得共、斷申候得者、是非共直ニ申度由、無據面會候、大閣御趣意之儀ニ付來候様、昨日御不參如何ナカラ、少々ニても快氣候ハ、參候様段々申候

忠熙病アリ朝議ニ列セズ

鷹司家ノ使者來リ出席ヲ促ス

大閣ノ所存表裏アリ

故、今日ハ存外頭痛もカロク相成候故、不成心候得共行向候事ニ候、禁中之処も實恐入候、且御不審も被爲在候半ト甚痛心候儘、内々子細申上置候、御舎之儀偏ニ希々入存候、扱此子細ハ大閣之趣意變候事ニある、明日右府ヨリ尊公ニ被申入候由、夫ニ付是迄之御時宜之邊尋ニある、誠ニ々々困り々々入候次第ニ候得共、趣意者先々御心配之方ニハ無之候、中々出頭之様子ハ無之候、實ハ御向ヒヨリ歸宅掛一寸參上も致度存候得共、青門モ被歸候故、右早速注進候様ニ相成候ハ恐レ在之候間、不能其儀、歸宅致候得共、今日忠熙參候儀も心不成、且大閣之所存之所も表裏ニ相成候事故、明日右府被參被申候ハ、御不審ト存候儘、極密々々右之儀御心得ニ申入候、上之處も如何ト心配候、明日ハ御參ニ被爲在候哉、何分右之段申上置候得ハ、右府御面會御都合も可有之ト、極秘ニ申入候、今晚も申入度存候得共、使ヲ出候も夜分目立候半ト心配候儘、認置、明朝日野右衛門督願（英定）之儀も有之候儘、序ニ任セ極密々々ニある申入候、恐々謹言、

三月十日夜認置、

吳々も極密々々、早々御投火希入候也、

關 白 殿 極密 几 下

忠 熙

〔關白九條尚忠書翰〕

○公卿集津忠重所藏本 安政雜集所藏

安政五年三月九日



安政五年三月九日

1100

○三月十二日左大臣近衛忠熙宛

内密御返報

左大臣殿

玉机下

尙忠

吳々モ、猶其内ニ得拜顔、万々可申入候事、大略如此候事、

堂上勝手ノ  
申出心痛ニ  
堪へズ  
太閤ノ變心  
主上モ御不  
審

昨烏者、御細書忝承候、日々春暖、雨氣朦々敷存候、彌以御安厚令賀候、抑過日ハ、折惡敷少々御不快氣ニ而不得拜謁、段々御面倒之事共御談合申入、自右府委曲令承知候、此頃之堂上向人氣立種々心之儘被申出、甚以心痛御推察希候、且又御丁寧示給候御趣意、且太閤之變心、夫ニ附而モ右府ヨリ愚拙迄噂有之様子、段々御心配給候段、深心得ニモ相成忝承候、則昨日於省中右府公ト得拜肩、太閤ヨリ之趣意書一昏被爲見候、是迄与ハ大相違之變心、善惡之心底不分明存候、尤一昨日右府モ參内、御前江被召、委細太閤之趣意柄言上之趣、於上モ聊御不審之様子、乍併強キ所之筋合ニ而御宜旨、内々御噂モ被爲有候御事、乍併餘リ申上方強過而、又々昨日者

上ニモ御意惑ニ伺ヒ、此度之御書取采キ方ニ而甚御決心之所モ難成趣ニ者、彼是与御評議モ被爲有候得共、終ニハ矢張其儘之御定ニモ成行、實ニ心配、愚昧故恐入候已ニ存候、且又

三條内府心配之趣ニ而、菅卿之身躰之義、定而御聞与存候、是等之儀モ此節之處ニ而ハ宜様ニモ聞人半分、亦不得心之人モ半分ニ而、行末ハ定テ又太閤之所存通相成可申哉、騒々敷時節到來与歎息致居申候、誠色々認申、都而御内々御頼申入候、早々拜答ニモ御座候処、昨日參内、退出後大草臥、延引失敬之段、海恕可給存候、仍如此候也、恐々謹言、

三月十二日

拜酬

尙忠

内々用事

〔尊融入道親王書翰〕

○九條尙忠  
文書所載

○三月十一日關白九條尙忠宛

一春雨ニ而朦々敷候、彌御安康恐悦ニ存候、併御所勞之由御左右承度存候、扱昨日一寸推參儀伺候處、御所勞ニ而御斷何も承候、併今日者御參朝之由故、尊融も今日者、おして致伺公、得拜顔候覺悟之處、先日より乍少々微邪ニ候處、今朝ハ發熱、右故恐入候得共、今日參朝之儀御斷申入候、先日暇乞ニ川左入來、歸寺ならハ面會いとし度旨、口上、則歸寺いたし居候故、面會いとし候、其内ニ尊融ハ捨身、彼者役ヲハナレ、行末之咄シ打和をなし申候、ヶ條定約書通被聞召候上者、何年程ニ而回復期可有や、相咄シ見込承候處、彼レ申候ニ者

安政五年三月九日

1101

尊融親王病  
ニヨリ參朝  
スルヲ得ズ  
川路聖謨來  
談



一兩年ニハ  
戰トナラン

安政五年三月九日

二〇二

見込無是由咄シ申候、又武家輩富候工風相咄し候へ者、是モ同様咄シ申候、いつモ一兩年  
ニモ戦争可相成トノウハサ御座候、先ツハ此外ニモ御咄し申入度儀モ候得共、拜顔ならて  
は申入兼候故、何レ其内得 拜顔、彼よりの咄し申入候、先者荒々用事計申入候也、恐々  
謹言、

三月十一日

關 白 殿

尊 融

〔橋本實麗日記〕○東京帝國  
大學所藏本

三月十二日、戊子、陰晴不定、○中  
略

午剋斗、從源相公羽林、唯今可參 〔金田重胤〕 朝被示、直參内、墨夷一件之、今度關東へ御沙汰之趣、如  
何敷所依有之、一同憤發、○中  
略、委細別記、

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕○橋本實麗手記  
伯備橋本實麗所藏本

三月十二日、戊子、晴、午剋斗、從源相公羽林、唯今可參 内被示、直參、御返答書取各不承知

ニ付申立之事頗囂々、依之現任輩書取改作、附于武傳、廣橋前亞相  
落手、○中  
略 書取續左、

今度一條、不容易奉 神宮始、○中  
略

右連署、但、現任之中、日野黃門、〔實守〕甘露寺黃門、冷泉相公等、依所勞不參、無加署、醍醐黃門、〔忠實〕

實麗等關白  
ノ邸ニ赴ク

衆意相違之間、不申示、右連署之輩、當番或御用等之外十人、參殿下、御返答書取一紙〔愚存書〕  
加附武傳置候間、宜御勘考有度旨、以諸大夫申入置了、

〔野宮家文書〕○子爵野宮  
定親所藏本

三月十二日、御沙汰書文舛、諸臣不感服、依之現任公卿并三番所、前官公卿散三位殿上人

等、有志輩多〔推參〕參集合談、其所意區々之處、終相和、現任二卿一通、〔十三卿ノ誤方〕○中  
略、書整、屬武傳、廣橋被落

手、其後、現任一同〔忠能卿・實愛卿等御  
用資卿・當番之外〕、同伴、參關白殿、一昨日廻覽之一紙文舛如何ニ候間、所存

一紙唯今武傳へ差出置候、猶宜御勘考候様、以諸大夫〔信濃小路  
民部少輔〕、申入置退出、

幕府、勘定吟味役勝田次郎〔充○後  
伊賀守〕ニ命ジ、江戸ニ於テ箱館・蝦夷地ノ事務

ヲ執ラシム。尋デ〔十二日〕海防掛ヲ兼ネシム。

〔松平忠固日記〕○子爵松平  
榮一所藏本

三月九日、○中  
略

一自分計、部屋前溜ニ出坐、

御勘定吟味役

勝 田 次 郎

勝田次郎ニ  
命シ江戸ニ  
於テ箱館蝦  
夷地ノ事務  
ヲ執ラシム

現任一同關  
白ノ邸ニ赴  
キ勅裁案ノ  
變更ヲ請フ

箱館表并蝦夷地之御用、當地ニ取扱可申候、

安政五年三月九日

二〇三



安政五年三月九日

〔松平忠固日記〕○子爵謙澤榮一所藏本

三月十一日、○中略、

一自分計、新部屋前溜に出入、

御勘定吟味役

勝田次郎

勝田次郎ヲシテ海防掛ヲ兼ネシム

海岸防禦筋之御用可相勤候、

右、申渡之、

〔柳營實記〕○内閣記録課所藏本

三月十一日、御勘定吟味役勝田次郎、海岸防禦筋之御用可相勤旨被仰付、

盛岡藩士ノ箱館立待臺場ヲ成ル者、外國船退去ノ際ニ於ケル注進方法ヲ改メシコトヲ箱館奉行村垣範正淡路守ニ請フ。是日、之ヲ聽ス。

○三月箱館奉行村垣範正宛

書面、南部美濃守家來立待御臺場勤番之もの、異船退帆注進之儀ニ付、伺之趣、別段差支之筋も無之候間、伺之通被仰渡可然、依之御附札取調、此段相伺申候、

午三月 〔朱印〕九日、御小印、即日澤出善平に相渡ス、

○井上茂輔

○安間純之進

鈴木尙太郎○

村上愛助

向山榮五郎○

三田喜六○

梨本彌五郎○

松岡徳次郎○

小嶋源兵衛○

應接掛

○淡路守

盛岡藩ノ立待臺場ヲ成ルモノノ外船退去ノ際ノ注進方法ヲ改メシコトヲ請フ

澗内方異船退帆之砌、立待御臺場勤番之もの方御注進之儀、是迄に颯去候遠近に不拘、夜に帆影見隠候節を、其旨御注進申上、猶又翌朝に至り、右船彌帆影相見不申旨、御注進仕來候得共、御差支無御座候ハ、以來左之通相改申度奉存候、

一遠沖迄颯去候船、夜に帆影見隠候ハ、早速其旨御注進申上、翌朝に至り、別段相變儀無之節を御注進相扣積事、

一程近く漂居、或は汐繫等罷在候内、夜に入候節を、御注進扣置、翌日に至り、颯去帆影見

二〇五

安政五年三月九日



安政五年三月十日

二〇六

隠こ至候處こゝ、御注進申上候積、若又夜中颯去候ハ、翌早朝見切候上、前同斷御注進申上候事、

右之通相心得如何可有御座哉、御内慮奉伺候事、

三月

南部美濃守家來

澤出善平

○指令

書面、伺之通可被心得候、

十日丙戌 蘭國領事「クルチウス」Curtius 江戸ニ到リ、真福寺芝愛岩下ニ入ル。

〔長崎奉行岡部長常上申書〕○伯耆堀田正恒所藏本  
堀田正睦外國掛中書類所載

○三月十日老中松平忠固ハ

和蘭領事官并筆者蘭人共、今十日八半時過、愛宕下真福寺に着仕候旨、詰合支配向之者より申越候間、此段申上候、以上、

三月十日

岡部駿河守

松伊賀守様

〔長崎奉行岡部長常上申書〕○堀田正睦外國掛中書類所載

○三月十日老中ハ

〔和蘭領事官横文字差出候こ付申上候書付

岡部駿河守

和蘭領事官并筆者蘭人、當御地參着仕候こ付、領事官々別紙横文字一通、私迄差出候付、則和解相添御含迄差上申候、尤書面之趣ハ、追々談判仕候上、可申上奉存候、以上、

三月

岡部駿河守

〔蘭國領事「クルチウス」書翰〕○堀田正睦外國掛中書類所載

○三月十日長崎奉行岡部長常宛

御當地に到着仕候義こ付申上候横文字和解

御在府

長崎御奉行

岡部駿河守様

於江戸、千八百五十八年第四月二十三日、三月十日、

一私儀、今日御當地に到着仕候義、高官之御方様に、速こ御申上被下度、御願申上候、  
一大君に、私儀

安政五年三月十日

二〇七

盛岡藩ノ請ヲ聽ス

「クルチウス」一行江戸ニ着シ真福寺ニ入ル

蘭國領事ヨリ横文字書翰來ル

「クルチウス」書翰和解

大君ニ謁見シタシ



安政五年三月十日

二〇八

用件及傳習  
等ノ件ニ就  
キ談ジタシ

御目見被 仰付被下候ハ、難有奉存候、尙和蘭政府ニおいても、右之段承り候ハ、別  
る難有可奉存候、

一江戸滞在中、御互種々肝要之儀并傳習等之儀ニ付、申上度奉存候、

一右ニ付、速ニ御取掛被下候ハ、難有奉存候、  
右恭敬申上候、

於日本和蘭領事官

イ・ハ・ドンクル・キユルシユス

右之通、和解差上申候、以上、

午三月

榎原量一郎印

稻部禎次郎印

〔長崎奉行支配調役中山誠一郎等上申書〕

○東京帝國大學所藏本  
和蘭應接書所載

○三月十日眞福寺日蘭應接ノ件

三月十日應接

中山誠一郎

嶋田音次郎

旅宿支關前  
ノ國旗  
應接ノ際目  
付ノ陪席チ  
欲セズ  
長崎奉行ニ  
面會ノ時期

米國總領事  
ニ書翰ヲ贈  
ラントス  
米國通辯官  
面會ヲ求ム

一亞墨利加旅宿之通、玄關前に、旗相建度旨申立候間、追る沙汰ニ可及旨、申聞置候事、

一駿河守様に、※申上度義有之、書取差出候間、早々御差出被下度旨、申聞候事、

一長崎表方附添參り候者、部屋々々一覽いゝ候處、余り手狭ニ付、今少し手廣之處に、被  
差置候様いゝ度旨、申聞候事、

一應接之節、御目付方立會無之様致し度、亞墨利加ハ、如何様之御取扱ニ有之候哉之旨、申  
立候間、追る取調可及沙汰旨、申聞置候事、

一駿河守様に御逢之儀、從是可罷出歟、いつ頃罷出可然哉之旨、申立候間、追る可及沙汰  
旨、申聞候事、

一役々相詰候人數承知いゝ度旨、申立候間、夫々申聞候處、右様大勢ニ及申間敷旨、申  
立候事、

一亞墨利加官吏に、夕刻迄一封差出度、相届候様いゝ度旨、申聞候事、

一亞墨利加通辯官、明日其方に參り度旨申立差支無之哉相尋候處、差支無之旨、申立候支、  
右之通御座候、

三月十日

〔老中達〕○堀田正睦外國  
掛中書類所載

安政五年三月十日

二〇九



安政五年三月十日

一一〇

○三月十一日大目付等

〔朱書〕三月十一日、達濟、〇堀田正勝外

三月十一日、〇中伊賀守殿御渡御書付、〇安政

三月十一日、〇中伊賀守殿御渡、〇高麗

三月十一日、伊賀守殿御渡候御書付、〇近世

三月十一日、阿蘭陀加比丹御扱振之義ニ付、伊賀守殿御渡御書付、〇御書

三月十一日、松平伊賀守殿御渡候御書付寫、〇高麗

三月十一日、大目付池田播磨守殿方、左之御觸書御留守居到來、〇津山

大目付田村伊豫守方、松平伊賀守申渡、諸向ニ相達候よしニ、御城附共ニ爲心得爲見申候書付寫、〇御城書

大目付

御目付

和蘭陀甲比丹爲參上、昨十日着致し候、右甲比丹之、領事官之官職も有之候儀ニ付、旁相當之御取扱有之、前々より之御扱振御改相成候儀も候間、此段爲心得相達、可然向々ニ可被達候事、

三月十一日

〔安政年錄 高麗環雜記 近世秘稿 柳營實記〕

〔大目付回達〕

〇侯御池田仲博所藏本 公儀御觸書所藏

○三月十一日鳥取藩等江戸留守居へ

三月十一日、大御目付中御達書、阿州様方到來ニ付、津山様衆ニ致順達候、

松平伊賀守殿御渡候御書付寫壹通相達候之間、〔上二載〕被得其意、無遲滯早々順達、留方池田播磨

守方ニ可被相返候、以上、

三月十一日

大目付

松平越前守殿

松平阿波守殿

松平薩摩守殿

松平三河守殿

御

松平兵部大輔殿

右留守居

〔見聞雜錄〕

〇維新史料編纂會所藏本

三月十一日、阿蘭陀甲比丹、爲參上、昨十日着イタシ候旨、御書付出ル、旅館愛宕下青松寺、

〔江戸町觸〕

〇維新史料編纂會所藏本 伏見宮侍御牧家諸留所藏

三月八日、江戸町觸、〇伏見宮侍 御牧家諸留

安政五年三月十日

一一一

蘭國領事着  
府并取扱方  
ノ件



蘭國領事出  
府ニ就キ沿  
道取締ノ件

安政五年三月十日

二二二

近々和蘭領事官出府ニ付、通行之町々自身番屋に、町役人共相詰、見へ掛り二三町前より、往來見物人相拂、横小路木戸有之所へ、建切、木戸無之所も、竹矢來仕付、人留致し、通行相濟、貳町余も過候ゑ、程合見計、往來相通、若急用向等有之候者へ、參り先承り届相通可申候、尤板圍等其儘差置、往還道繕ニ不及、見苦敷儀と無之様、掃除致可申候、都る喧嘩口論等と勿論、往還混雜不致様、相制可申候、

一町々棧敷を懸、或高き所へ上り見物致候義と、堅不相成候、

一町中商(イ中)ひ物之儀と、平日之通差出置不苦候、

一逗留中火之元等之儀、別入念可申、尤名主・月行事共、晝夜繁々相廻り心付可申候、

右之通、町々(イ中)不洩様可觸知者也、

午二月八日

(沿海紀聞)

〔江戸町觸〕○帝國圖書館所藏本  
外國事件書所載

三月九日、町觸寫、○外國  
事件書

三月九日、江戸町觸、○伏見宮侍  
御牧家諸

戊午三月九日、○續通  
信全覽

明十日、和蘭領事官出府、品川海晏寺門前高輪町、芝口通、宇田川町々左に、三島町、増上

蘭國領事出  
府道順ノ件

寺裏門前通、左に青松寺前通、愛宕下眞福寺に到着ニ付、兼町觸之趣堅相守、通行中都る不取締之儀無之様、嚴重ニ可相心得候、

右之通、道筋并最寄町々、不洩様可觸知との也、

午三月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、急度相心得、名主支配限最寄町々にも、不洩様心附、早々可申通候、

(伏見宮侍御牧家諸  
續通信全覽)

〔川越藩日帳〕○伯耆松平  
直之所藏本

三月九日、晴天、

一御小人目付栗嶋彦八郎御留守居に罷越、明十日、和蘭領事官江戸着之趣、左之通り御目付鶴殿民部少輔殿方御達被成候旨、右ニ付、心得方之義承り合候所、昨年亞墨利加使節江戸着之節之振りゑる可然旨申聞候旨、申出之、

明十日、和蘭領事官江戸着ニ付、通行道筋平常之通ゑる掃除いとし、乞食等相拂、諸事不作法無之様、相心得可申事、

一道筋屋敷々々方見計、辻番所等に固之者差出置、往來混雜之義も有之候ハ、取締出役之者方申達之次第、制方致可申事、

安政五年三月十日

二二三

蘭國領事出  
府ニ就キ心  
得方ノ件



安政五年三月十日

二一四

一道筋之義者、品川々高輪町芝口通り、宇田川町より左に三島町、増上寺裏門前通り右に青松寺前通り、愛宕下旅宿真福寺に着之積る候、右之通、可被相心得候事、

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕○公露徳川朝順所藏本 御城書抜書拾遺所載

○三月九日開藩飯田總藏宛

飯田總藏様

横山甚左衛門

和蘭陀領事官、今日愛宕下真福寺に到着之振こ、昨日御運ヒ申上候処、川支るゝ、明日到着之趣に御座候間此段申上候、以上、

三月九日

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

三月十日、

和蘭人着府

一阿蘭陀人參府、愛宕下真福寺に着之、

〔盛岡藩士山崎忠吉江府詰合私録〕○維新史料編纂會所藏本

三月十一日、終日雨、○中略、

阿蘭陀人、昨日此許着、愛宕下真福寺止宿之よし、

○附録

〔長崎奉行岡部長常上申書〕○長崎縣廳所藏本 和蘭領事官參府御用留所載

○二月老中へ

書而御目付に被仰渡候旨被仰渡、奉承知候、二月廿五日 岡部駿河守

柳之間御縁類に御用向爲取扱候儀に付申上候書付

岡部駿河守

私支配向之者、領事官參府に付る之御用向多端之處、認物有之候場所無之差支候に付、此節右御用中、柳之間御縁類に御用爲取扱申度候間、御目付に被仰渡可被下候、尤御用之節に、相渡候心得に御座候、以上、

午二月

岡部駿河守

越中國新川郡常願寺川氾濫、被害多シ。四月二十六日、マタ、氾濫ス。

〔上條組裁許記録〕○私立米澤圖書館所藏本

當十日、常願寺川出水に、利田前百間丁場等切損致入川候由等、御注進有之候に付、明後日定檢地田伏殿等御出役、夫々御普請方被仰付候旨に、右百間丁場之義へ、御郡方手合普請手入方々も、御見圖り御指圖可有之、此段承知罷在候様、今日御改作所よて、木村殿に被仰談候間、左様御承知可被成候、

一竹藤用意方、無油斷御勢子可被成候、近年上組々持藪、取直り候向等在竹御用之義も可

安政五年三月十日

二一五

常願寺川出水



安政五年三月十日

二一六

被仰談候間、岩城様こる割こ付、申談方等不指支様御懸引有之度候、當時在竹敷志らべ帳者無御座候得共、先つ見込を以御割こ付方御辨可然候、近日私共歸村之上、一兩年先キ出來竹志らべ帳等を以、尙更詮義仕候義も可有御座奉存候、右當用迄、早々如斯こ御座候、以上、

三月十二日

神保助三郎

結城甚助

岩城七郎兵衛様

石割彌五郎様

常願寺川當日、出水變損之様子、追る早注進之趣こ付、今日御役所私共此表御用向壹人詰よて御辨被下候義こ相願、且又御改作所早速御出役之義願上候間、左様御承知、一兩日中こ御奉行所御指向、御見分不指支様、夫々御手配可被成候、餘者御面上可申述、當用迄早々如此御座候、以上、

午三月十四日

在府

伊東彦四郎

神保助三郎  
結城甚助

岩城七郎兵衛様

新堀兵三郎様

天正寺十次郎様

石割彌五郎様

大村平兵衛様

〔越中國新川郡〕上條組記録〔〇私立米澤圖書館所藏本〕  
〔表紙〕  
安政五年三月

三月十日山抜いゝし常願寺川々白岩川筋清水堂村領に入川仕川筋御田地變地泥石砂置こ相成候村々書記申帳

上條組

草高

一四百八拾六石

免四ツ七步

清水堂村

安政五年三月十日

二一七

常願寺川氾  
濫被害調書



安政五年三月十日

内 百五拾石高程

元祿三年新開高

一拾六石五斗

但、皆泥石砂置ニ相成申候、

天保十年新開高

一六石七斗

但、皆泥石砂置ニ相成申候、

嘉永元年新開高

一七石

但、右同斷、

安政二年新開請高五拾石程之内出來高

一三拾五石

但、右同斷、

草高

泥石砂置

定免

同 村 領

極高

柳 寺 村 領

極高

落常 願 寺 開川

請高

伊池柳 勢田 寺 屋館 村村 領

一三拾石

免五ッ

内 貳拾石高程

草高

一貳百拾壹石

免五ッ

内 拾貳石高程

草高

一三百三拾四石

免三ッ八步

内 七石五斗高程

同

一四百拾五石

免四ッ八步

内 貳石高程

安政五年三月十日

泥石砂置

上 川 原 村

金 廣 村

泥石砂置

高 堂 村

泥石砂置

石 正 村

泥石砂置



安政五年三月十日

文政二年新開高

極高

一三拾八石六斗

同 村 領

但、皆泥石砂置ニ相成申候、

文政元年新開高

極高

一貳石五斗

同 村 領

但、右同斷、

享保十二年請高新開百石之内出來高

請高

一三拾石三斗

池石 田正 館村 領

内 拾六石高程

泥石砂置

草高

西 光 寺 村

一百八石

同 村 領

免四ッ

内 壹石三斗高程

泥石砂置

文政二年新開高

極高

一三石三斗

同 村 領

但、皆泥石砂置ニ相成申候、

享保十三年請高新開四百五拾石之内出來高

請高

一百拾石

池池西 田田光 町館寺 村村 領

内 三拾石高程

泥石砂置

草高

一百八拾七石

池 田 館 村

免四ッ

内 九石三斗高程

泥石砂置

文政二年新開高

極高

一七石三斗

同 村 領

但、皆泥石砂置ニ相成申候、

嘉永四年新開高

極高

一五石九斗

同 村 領

但、右同斷、

安政五年三月十日



安政五年三月十日

草高

一三七七石

内 免四ツ

六石六斗高程

同

一貳百五拾六石

内 免四ツ八步

七石高程

同

一貳百四拾貳石

内 免四ツ八步

拾五石高程

同

一四石五斗

一免下三ツ八步

二二三

池田町村

泥石砂置

平塚村

泥石砂置

曲淵村

泥石砂置

組高帳入

平曲 塚淵 村領

泥石砂置

北馬場村

同

一三百拾五石

内 免四ツ五步

拾貳石高程

草高

一貳百五拾石

内 免四ツ八步

四石壹斗高程

同

一貳百六拾貳石五斗

内 免貳ツ五步

拾七石高程

同

但、飛地丸泥石砂置、

泥石砂置

下段村

二二三

中馬場村

泥石砂置

泥石砂置

安政五年三月十日



安政五年三月十日

一貳百貳拾七石

免四ツ

内 三石高程

泥石砂置

金尾村

二二四

常願寺川氾濫被害調書

〔越中國新川郡高野組記録〕  
〔表紙〕  
○私立米澤圖書館所藏本

常願寺川三月十日八ツ半時頃俄泥洪水ニ御田地泥置等ニ相成手帳

高野組

草高

免四ツ三步

一五百九石

新堀村

内 五拾石程

泥置

草高

免三ツ九步

一百貳拾五石

常願寺村

内 六拾貳石五斗程

泥置

極高新開、御圖免貳ツ八步  
一六拾貳石壹斗五升

同村領

内 拾六石程

右同斷、

草高

免四ツ貳步

一五百五拾七石

高野開發村

内 三拾三石程

右同斷、

極高新開、御圖免三ツ壹步

一六拾五石五斗

同村領

内 拾貳石五斗程

右同斷、

草高

免四ツ

一拾六石五斗

田添村

内 七石程 入川仕候、

草高

免三ツ、但、高帳入

一拾八石五斗

同村領

但、皆岸崩、

極高新開、御圖免三ツ壹步

一拾六石五斗

同村領

安政五年三月十日

二二五



安政五年三月十日

二二六

但、右同斷、

同 同三ツ壹步

一四拾壹石八斗

但、右同斷、

家數

一拾三軒

内 拾貳軒

草高

免四ツ

一貳百三拾石

内 貳拾七石八斗程

九拾貳石八斗

極高新開、御圖免三ツ九步

一四石

但、岸崩ニ相成申候、

家數

泥附家

同

村

淺

生

村

岸崩

泥置

同

村

領

一貳拾五軒

内 六軒

壹軒

拾四軒

草高

免三ツ八步

一百五拾六石五斗

内 三拾石程

百石程

家數

一拾貳軒

内 三軒

七軒

極高新開、御圖免貳ツ九步

一七石

但、石砂置ニ相成申候、

安政五年三月十日

泥押ニ有潰家

同

村

同半潰

泥附家

下

鉾

木

村

岸崩

泥置

同

村

流失家

泥付家

芝

打

場

開

二二七



安政五年三月十日

草高

一貳拾貳石五斗

但、岸崩、

極高新開、御圖免三ツ四步

一四石四斗

右同斷、

嘉永元年新開高、同六步

一三石七斗

右同斷、

同

同四步

一壹石五斗

右同斷、

家數

一壹軒

草高

免五ツ

泥押こる半潰 同

免貳ツ貳步

石田新村

二二八

同村領

同村領

同村領

同村

稻荷村

岸崩 泥置

家數

一四軒

内 貳軒

壹軒

壹軒

一貳ツ

草高

一百七拾六石

内 四拾石程

七拾貳石程

家數

一六軒

安政五年三月十日

流失 半潰 泥入 納屋泥入

同村

免四ツ三步、同壹ツ五步引免

上國重村

岸崩 泥置

同村

二二九



安政五年三月十日

内 壹軒

四軒

草高

一貳百四拾六石

内 貳拾三石六斗程

六拾五石貳斗五升程

惣家數

一拾九軒

内 四軒

七軒

草高

一三百三拾貳石

内 拾九石程

百貳拾壹石程

草高

泥押こる半潰

泥入

免四ツ三步、内九步引免

下國重村

岸崩

泥置

惣家數

一拾九軒

内 四軒

七軒

草高

一三百三拾貳石

内 拾九石程

百貳拾壹石程

草高

同村

泥押こる半潰

泥入

免五ツ三步

竹内村

岸崩

泥置

免四ツ三步、但、高帳入

一五石五斗

但、泥置、

家數

一貳拾八軒

内 貳軒

貳軒

三軒

八軒

草高

一四拾七石

内 貳拾石程

極高新開、御圖免三ツ

一三拾石

但、泥置、

草高

安政五年三月十日

免三ツ五步

同村領

同村

流失家

泥押こる潰家

同半潰家

泥附

免四ツ八步

小嶋村

泥置

同村領



安政五年三月十日

一八拾四石  
内 拾石程

泥入

番頭名村

草高

免三ッ六步

一八拾八石五斗  
内 五石八斗程

右同斷、

入部町村

定免新開高、一免下り貳ッ七步

一貳拾三石

入二入部江杉町村村領

内 拾石四斗程

右同斷、

草高

免三ッ五步

入江村

一六拾四石  
内 貳拾五石八斗程

泥置

橋場新村

草高

免九步

一拾八石  
内 拾貳石五斗程

右同斷、

草高

免五ッ、内四步引免

一三百貳石八合  
内 拾九石程

泥置

佛生寺村

草高

免四ッ五步

一貳百三拾五石  
内 三拾石程

岸崩

塚越村

百拾石程

泥置

家數

一貳拾五軒  
内 貳軒

同村

壹軒

泥押こる潰家  
泥附家

草高

免三ッ七步

一貳拾九石貳斗

西蘆原村

但、岸崩こ相成申候、

家數

安政五年三月十日



安政五年三月十日

一拾壹軒

内 五軒

貳軒

四軒

極高新開、御圖免貳ツ三步

一四百五拾六石七斗

内 百石程

三百貳拾石程

草高

一四拾石

内 三拾五石程

同

一百五石

内 五拾石程

家數

一三四

同

流失家

泥押ゝる潰家

同半潰家

利西 蘆田原 村村領

岸崩

泥置

免三ツ五歩

石 田 村

泥置

免四ツ

曾 我 村

泥置

一拾壹軒

内 貳軒

三軒

草高

一七百五拾六石

内 百八拾石程

百石程

家數

一七拾七軒

内 四軒

三軒

壹軒

拾五

貳ツ

七軒

安政五年三月十日

同

流家

泥附家

免四ツ五歩、内九歩引免

利 田 村

岸崩

泥置

同

流失家

泥押ゝる潰家

同半潰

納屋泥入等

物置藏同斷

泥置家

一三五



安政五年三月十日

二三六

草高 免三ツ貳步

一百五拾六石

日置村

内 七石程

岸崩

三拾五石程

泥置

同

免四ツ

一百七拾九石

半屋村

内 四石程

岸崩

拾貳石六斗程

泥置

草高

免四ツ、内七步引免

一七十六拾四石五斗

西大森村

内 百拾五石程

泥置

草高

免三ツ

一貳百三拾五石

三ツ塚新村

内 貳拾石程

岸崩

五拾石程

泥置

〔茶書〕  
一四石五斗程

同村并二口ニ多シ

同

免五ツ、内壹ツ貳步引免

一百八拾八石

横江村

内 三拾五石程

岸崩

極高新開、御圖免七步

一拾五石貳斗

同村領

但、岸崩ニ相成申候、

草高

免五ツ三步

一五拾石

千垣村

内 四拾石程

泥置

家數

一五拾七軒

同村

内 六軒

流失家

三軒

泥押ニ有潰家

四軒

同半潰家

安政五年三月十日

二三七



安政五年三月十日

八軒

貳ッ

壹ッ

草高

免四ッ六步、内貳步引免

一百八拾四石

蘆 峠 寺 村

内 貳拾石程

泥置

草高

免四ッ、六步

一四百九拾石

舟 橋 村

内 三拾六石五斗程

泥置

變地高新開共

〆貳千四百五拾八石八斗八升

流失家

〆拾九軒

潰家

〆貳拾壹軒

半潰家

〆二十三軒

泥付家

〆六十五軒

〔朱書〕  
〆百廿九軒

又

貳十三

流失納屋

貳十

潰納屋

八ッ

半潰納屋

十八

泥込納屋

七ッ

泥付藏

貳ッ

押潰

燒失灰納屋

〆七十八

外九軒

岩峠寺

安政五年三月十日



安政五年三月十日

二四〇

○三月十日・四月二十六日ノ兩度、常願寺川氾濫ノコトヲ併記セル史料ヲ次ニ收ム。

〔越中國 新川郡 上條組記録〕  
○私立米澤圖書館所藏本

〔表紙〕  
安政五年五月

三月十日四  
月二十六日  
ノ兩度常願  
寺川氾濫被  
害調書

三月十日四月廿六日常願寺川泥水押出白岩川筋清水堂村領に入川仕川筋御田地變地泥石  
砂置ニ相成候村々書上申帳

上 條 組

免四ツ

草高

一貳百貳拾七石

金 尾 村

内 三石高程

三月十日泥石砂置

五石高程

四月廿六日泥石砂置

八石高程

免三ツ八歩、内壹歩引免

同 一三百三拾四石

高 堂 村

内 七石五斗高程

三月十日泥石砂置

拾壹石高程

四月廿六日泥石砂置

草高

免四ツ

一貳百四拾六石

二 ツ 屋 村

内 六石六斗高程

四月廿六日泥石砂置

同

一三百七石

池 田 町 村

内 六石六斗高程

三月十日泥石砂置

貳拾四石貳斗高程

四月廿六日泥石砂置

三拾石八斗高程

同

免四ツ

一四百四拾壹石

一 田 中 村

内 壹石貳斗高程

四月廿六日泥石砂置

同

免四ツ、組高不入

一拾壹石

同 村 領

内 貳石九斗高程

四月廿六日泥石砂置

安政五年三月十日

二四一



安政五年三月十日

二四二

天保十三年畑新開高

請高

一拾七石壹斗

一田中村領

内 貳石高程

四月廿六日泥石砂置

嘉永二年田形新開請高拾三石五斗程之内出來高

請高

一拾石

同村領

内 五石四斗高程

四月廿六日泥石砂置

草高

一貳百三拾壹石

伊勢屋村

内 六石九斗高程

四月廿六日泥石砂置

四拾四石九斗高程

同 水いかへ

五拾壹石八斗高程

天保十年畑新開高

請高

一三石

同村領

内 壹石六斗高程

四月廿六日泥石砂置

草高

免三ッ

一百八拾七石

池田館村

内 九石三斗高程

三月十日泥石砂置

四拾八石四斗高程

四月廿六日泥石砂置

五拾七石七斗高程

文化十四年畑新開高

極高

一八石六斗

同村領

但、四月廿六日、皆泥石砂置相成申候、

天保二年田形新開高

極高

一七石三斗

同村領

但、三月十日・四月廿六日、兩度之皆泥石砂置之相成申候、

嘉永四年新開高

極高

一五石九斗

同村領

但、右同斷、

草高

一百八石

西光寺村

安政五年三月十日

二四三



安政五年三月十日

内 壹石三斗高程

貳拾四石九斗高程

〆貳拾六石貳斗高程

文政二年新開高

一三石三斗

但、三月十日・四月廿六日、兩度ニ皆泥石砂置相成申候、

享保十三年請高新開四百五拾石之内出來高

請高

一百拾石

内 三拾石高程

八拾石高程

〆百拾石高程

草高

一四拾五石

内 貳石高程

免四ツ八步

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

極高

同 村 領

請高

池池西 田田光 町館寺 村村領

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

石 正 村

三月十日泥石砂置

六拾五石九斗高程

〆六拾七石九斗高程

文政二年新開高

一三拾八石六斗

但、三月十日・四月廿六日、兩度皆泥石砂置相成申候、

文政元年島新開高

一貳石五斗

但、右同斷、

享保十二年請高新開百石之内出來高

一三拾石三斗

内 拾六石高程

拾四石三斗高程

〆三拾石三斗高程

草高

一貳百四石

安政五年三月十日

四月廿六日泥石砂置

極高

石 正 村 領

請高

同 村 領

請高

池石 田正 館村 領

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免三ツ七步

柳 寺 村



安政五年三月十日

内 四石壹斗高程

天保十年新開高

一六石七斗

但、三月十日・四月廿六日、兩度皆泥石砂置相成申候、

嘉永元年新開高

一七石

但、右同斷、

安政二年田形新開請高百五拾石程之内出來高

請高

一三拾五石

但、右同斷、

草高

一六百六石

内 四拾壹石高程

草高

免五ッ壹步

二四六

四月廿六日泥石砂置

極高

柳寺村領

極高

常願寺開川

請高

柳池勢田屋村領

免四ッ八步

水橋館村

四月廿六日泥石砂置

一貳百貳拾九石

内 四拾壹石高程

同

免四ッ八步

水橋中村

四月廿六日泥石砂置

一貳百四拾貳石

内 拾五石高程

三石五斗高程

七石高程

〆貳拾五石五斗高程

同

一免下三ッ八步、但高帳入

一四石五斗

内 四石高程

貳斗高程

〆四石貳斗高程

同

免四ッ八步

一貳百五拾六石

安政五年三月十日

平塚村

二四七

曲淵村村領

曲淵村

三月十日泥石砂置  
四月廿六日泥石砂置  
同 水いかへ



安政五年三月十日

内 七石高程

七石六斗高程

〆拾四石六斗高程

草高

一三百拾五石

内 拾貳石高程

拾八石高程

〆三拾石高程

同

一貳百五拾石

内 四石壹斗高程

貳拾六石三斗高程

〆三拾石四斗高程

同

一貳百拾壹石

二四八

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免四ツ五步、内三步引免

北馬場村

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免四ツ八步、内貳分引免

中馬場村

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免五ツ

金廣村

内 拾貳石高程

五拾石五斗高程

〆六拾貳石五斗高程

同

一三拾石

内 貳拾石高程

拾石高程

〆三拾石高程

草高

一四八拾六石

内 百五拾石高程

貳拾六石六斗高程

貳拾五石高程

〆百九拾壹石六斗高程

元祿三年新開高

定免

安政五年三月十日

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免五ツ

上川原村

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

免四ツ七步

清水堂村

三月十日泥石砂置

四月廿六日泥石砂置

同 水いかへ

二四九



安政五年三月十日

二五〇

一拾六石五斗

同 村 領

但、三月十日・四月廿六日、兩度皆泥石砂置相成申候、

草高

免貳ッ五步

一貳百六拾貳石五斗

下 段 村

内 拾七石高程

飛地

但、三月十日・四月廿六日、兩度皆泥石砂置相成申候、

同

免四ッ八步

一九百八拾貳石

小 出 村

内 拾五石六斗高程

四月廿六日水いかへ

草高

免四ッ五步

一五百拾石

放 土 ヶ 瀬 村

内 八石高程

四月廿六日水いかへ

新開高

定免

一貳石四斗

同 村 領

但、四月廿六日皆水いかへ相成申候、

變地高

メ千七拾石貳斗高程

内

六百八拾六石六斗

古田泥石砂置

百石五斗

同水いかへニ  
相成居申候、

貳百八拾石七斗

新開泥石砂置

貳石四斗

同水いかへニ  
相成居申候、

十一日<sup>亥</sup> 老中堀田正睦<sup>備中守〇</sup>

米國總領事「ハリス」Harrisノ再ビ江戸ニ

來リシコトヲ奏ス。

〔京都所司代通達〕<sup>〇東京帝國大學所藏本  
九條家記録所載</sup>

〇三月十一日武家傳奏へ

十二日、

一廣橋前大納言殿

亞墨利加使節、下田表に中歸致候後、病氣罷在候處、追々快方相成、去ル二日、下田表出帆  
致し、同五日、江戸表に出府いし候に付、此段無急度御達申置候様、備中守より申越候

安政五年三月十一日

二五一

「ハリス」ノ  
再出府ヲ稟  
ス



安政五年三月十一日

二五二

事、

三月

〔川路聖謨都日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

〔三月〕

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

十一日 雨

（清直子出奉行）

雲蔽斜陽去。過暄厭絮衣。明朝必容雨。翠靄滿崔巍。と申候。こも京都雨前此

々一き之○昨日御用狀到來候。井上（清直子出奉行）五日附之書狀來。官吏出府いよ一候由之。

「ハリス」再出府ノ旨ヲ奏ス

人々井上之心配察入候由申之候。ハルリス着之由也。今日傳 奏を以申上候。且

勅答之事承る。近々と斗之。昨日も其と付。岩瀬へ申遣候事有之候 幾たひの庭よ

お里たちちるむと霞をうり此東山哉 旅宿々。東山とゆきハ。のくハ申遣一たる。

〔後勤槐記〕

○廣橋光成日記 孝明天皇紀所載

三月十六日、堀田參内日限之儀、御聞繕御座候處、未御沙汰無之、兼テ申上候通、亞墨利加官吏モ、當月五日、再度參府、日合相迫候ニ付テハ、品々苦情可申出モ難計、其外何様混雜之儀、出來仕間敷トモ難申ニ付、備中守ニモ、深心配仕候間、御催促个間敷相當、恐入候得共、一刻モ早ク御沙汰御座候様仕度旨、附武士書附、先々兩内覽、

○參考

〔佐倉藩戊午年集〕

○信濃守正恒所藏本

三月十一日、雨、

一例剋 御目覺、

一四時過、繼御上下被爲 召、於御書院、都筑駿河守様（兼重、兼隆侍）・大久保大隅守様（忠良、同上）に御逢有之、引續、川路左衛門尉様・岩瀬肥後守様（御達有之）

一八時過、御役人様方へ御逢有之、

十二日、曇、

一卯中剋前 御目覺、

一五半時過、繼御上下被爲 召、於御書院、川路左衛門尉様・岩瀬肥後守様（御達有之）、引續、原彌十郎様（同斷）、

一七時過、於同所、岩瀬肥後守様（御達有之）、

十三日、曇、

一卯中剋前 御目覺、

一四半時繼御上下被爲 召、於御書院淺野和泉守様（御達有之）、

一九時過、於同所、川路左衛門尉様・岩瀬肥後守様（御達有之）、

一九半時過、於同所、岩瀬肥後守様（御達有之）、

一八時過、於同所、大久保大隅守様・都筑駿河守様（右同斷）、

一七時前、於同所、御役人様方へ御逢有之、

一七時過、縫殿被 召出、御用有之、

十五日、晴、

安政五年三月十一日

二五三

堀田正睦連  
日川路岩瀬  
等ヲ旅館ニ  
召ス



安政五年三月十一日

一例剋 御目覺、

一八時過、八丈竊御小袖繼御上下被爲 召、於溜之間廊下、永田太十郎

御通掛 御目見有之、夫とて大書院に被爲入、大久保駿河守様大書院ノ御・都筑駿河守様大書院ノ御に御逢有之、引續御掛り御役人様方、

并淺野和泉守様右同斷、

十六日、曇、

一例剋 御目覺、

一四時過、繼御上下被爲 召、於御書院、川路左衛門尉様・岩瀬肥後守様御逢有之、

一九時前、右同人様同斷、

一九時過、原彌十郎様同斷、

一八時過、兩度御役人様方同斷、

米國通辯官「ヒュスケン」Heusken 蘭國領事「クルチウス」Curtius ヲ旅館眞福寺ニ訪フ。

〔江戸町觸〕○帝國圖書館所藏本 外國事件書所載

〔朱書〕 午三月十日、町觸寫、○外傳 事件書

三月十日、町觸、○伏見宮侍 御牧家諸留

戊午三月十日、○續通 信全覽

明十一日亞墨利加通辯官和蘭領事官旅宿愛宕下眞福寺に罷越候往返道筋

米國通辯官 蘭國領事旅

宿訪問ノ件

蕃書調所方九段坂、田安御門前御堀端通、井伊掃部頭屋敷後ロカ霞關松平美濃守屋敷脇前、西尾隱岐守屋敷角方左に、眞田信濃守屋鋪脇前、新橋を渡、愛宕下眞福寺、

右之通候間、兼町觸之趣相守、通行中、都る不取締之儀無之様、嚴重に相心得、横小路

木戸有之處を立切、木戸無之場所を、竹矢來仕付、同様切、通行相濟候程合見計、往來

相通候様いとし、町役人共附添、混雜無之様厚心附可申候、

右之通、道筋并最寄町々不洩様、可觸知いとしの也、

午三月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、急度相心得、名主支配限り取寄町々にも、不洩様心附、

早々可申通候、

三月十日

〔伏見宮侍御牧家諸留 續通信全覽〕

〔延岡藩萬覺帳〕○子爵内藤 政學所藏本

三月十日、○中 略

一京極佐渡守様衆方御留守居迄手紙を以、御目付様方御小人目付を以、明十一日、亞墨利

加通辯官、九段方眞福寺に罷越候付、別紙貳通御渡有之、尤虎御門外辻番所見通に付、御

留守居壹人、御徒目付壹人、小頭壹人、外、棒突四五人、被差出候様被申渡候旨、申來候

安政五年三月十一日

二五五

米國通辯官 蘭國領事旅 宿訪問ノ件

二五四



安政五年三月十一日

段、御留守居申達候、

明十一日、亞墨利加通辯官、別紙道書之通、通行致候間、通行之節、屋敷構家來相應ニ  
差出置、見物之もの立留候ハ、混雜不致候様、相制可申事、

右壹通、

亞墨利加通辯官儀和蘭領事官旅宿ニ罷越候往返道筋

蕃書調所カ九段坂、田安御門前御堀端通り、井伊掃部頭屋敷後カ霞ケ關松平美濃守屋  
敷脇前、西尾隱岐守屋敷角カ左ニ、真田信濃守屋敷脇前、新シ橋を渡り、愛宕下真福  
寺、

右壹通

掛り名前書

御細工頭格

御徒目付組頭

田中勘左衛門

御徒目付

松本禮助

岩瀬磐之助

新見 鱈藏

小川達太郎

御小人目付

武藤 榮助

山本又之助

金田豊三郎

天笠鉢太郎

栗嶋彦八郎

高橋金之助

堀江六五郎

小澤勢十郎

鈴木卓太郎

小野益太郎

鈴木和助

清水久三郎

安政五年三月十一日



安政五年三月十一日

二五八

一右ニ付、虎御門外辻番所、

此方様御持日ニ付、辻番所詰并御持場の方、人拂建番且差引御作事方役等差配可然と、左之通大目付ニ書付相渡、諸事差出候様申談之、

但、辻番所詰等御並合有之、遠

御成之振合ニ准し取計候、尤辻番所に、茶・多々盆・茶瓶相廻候様申談、

大目・付

明十一日、亞墨利加通辯官、蕃書調所方新シ橋を渡り、愛宕下真福寺に罷越候付、虎御門外辻番所見通し相成候、依之御手當、左之通、

辻番所詰

繼肩衣

御作事奉行	壹	人
御徒目付	壹	人
同御用屋敷脇左右建番		
足輕小頭	貳	人
足輕	六	人

棒 六 本

差引人

御作事方役	壹	人
御作事小奉行	壹	人

右之通、可被得其意候、

三月十日

一右ニ付、御屋敷御手當、左之通、大目付に及口達、

一御門出入猥ニ無之様、心付可申事、

一表長屋窓障子、建寄置候様可致事、

一中御門外土手に、子供等上り不申候様判帳付差出置、制し可申事、

三月十一日、

一亞墨利加通辯官、今日、愛宕下真福寺に罷越候付、新シ橋通行いとし候、依之、今朝五時より、虎御門外辻番所に、御作事奉行楠彌五兵衛、御徒目付壹人相詰、并御作事方役、小奉行、建番足輕差出、四半時過通行相濟、

但、歸り道筋同様付、通行相濟、一旦引いとし、又候通行之節罷出候、尤真福寺に、見歩

安政五年三月十一日

二五九



安政五年三月十一日

二六〇

使足輕差出置、尤大目付の差配、夕口時通行相濟、何れも引取、

〔代官〕竹垣直道日記○維新史料編纂會所藏本

三月十日、晴、○中略

一七左衛門が、明十一日四時、通弁官、愛宕下眞福寺蘭人旅宿に相越候義申來ル、  
同十一日、時々雨、○中略

蕃書調所見廻、詰合虎五郎・善四郎、○通弁官、蘭人旅宿に相越候より、九半時退散、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

三月十一日、○中略

一亞墨利加人、愛宕下蘭人旅宿に行、

〔近衛家書類〕○東京帝國大學所藏本

三月十二日出、同廿三日着、江戸狀、

和蘭領事官義、一昨十日着、愛宕下眞福寺旅宿に御坐候、然ル處、ハヤ昨十一日、アメリカ（通譯ノ譯）使節、右旅宿へ罷越、面會イタシ候由に御座候、

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕○公許徳川侯領所藏本  
御城書抄拾遺所載

○三月十日同書飯田總藏宛

飯田 總藏 様

横山 甚左衛門

以手紙啓上仕候、阿蘭陀領事官、今日、愛宕下眞福寺に着之付、亞墨利加使節并通弁官、明十一日四時、蕃書調所出門、右領事官見舞として、眞福寺に罷越候由に御座候、此段申上候、以上、

三月十日

〔飯泉喜内書翰〕○維新史料編纂會所藏本  
伏見宮侍御牧家齋額所載

○三月二十六日鷹司家諸大夫高橋俊壽宛

○上阿蘭陀領事官、去ル十日、江戸着、愛宕下眞福寺旅宿に御座候、然ル所、翌十一日、通弁官早速馬を罷越候由、是を使節が之に使之様子之趣、○中略

三月廿六日

風 艸 拜

〔鷹司家諸大夫高橋俊壽大輔俊壽〕  
不 爭 御 主 人

机 下

佐賀藩主鍋島齊正肥前守  
後直正 藩地に於テ、藩士ノ銃陣ヲ閱ス。十四、十七日、  
マタ、同ジ。

〔鍋島直正譜略〕○内閣記録課所藏本

三月十一日、於中折調練場、御側四組・同新組銃陣御覽、

安政五年三月十一日

二六一

米國通辯官  
蘭人ヲ訪フ



安政五年三月十一日

二六二

一同十四日、御先手兩組・警固四組同斷、  
一同十七日、警固貳組・御留守居三組同斷、

〔松乃落葉〕

○維新史料編  
覽會所藏本

安政五年三月、去年被仰出置候諸組之分を以、御火術方銃陣左之通御覽被遊候、

三月十一日

彌平左衛門組・隼人組

一 陣

播磨組・市佐組

一 陣

志摩組

一 陣

同 十四日

永水組・左馬助組

一 陣

六左衛門組・主計組

一 陣

大左衛門組・阜助組

一 陣

同 十七日

周防組・縫殿組

一 陣

勘解由組・又右衛門組

一 陣

〔佐賀藩備立役伺書〕

○鍋島直正  
公傳所載

三月十日、御備立方より左之通相伺候處、其通被仰付、○佐賀藩  
海軍史

當節諸組銃陣御覽に付、左之廉々、書載之通、被仰付方には有御座間敷哉、

一、諸組陣屋、飾場所有之兼候付、御火術方内に相飾候方に可有御座、就るは御手狭之場所に付、御道筋之儀、手銃製造方内被遊御通行方には有御座間敷哉、

一、大組頭、自然當病等之節は、士組代指揮可被仰付哉、

一、手明銃頭、小組頭同斷之節、指揮當一順、於組内人柄見立、達出候様可被仰付哉、

一、是迄諸組調練之節、御歸路掛大組頭始被渡御目候付るは、當節之義も同様可被仰付哉、

一、銃陣始り、陣屋々之合圖具に相整、御棚々御差圖具に相始候様被仰付、其通可相整候得者、最前支度立込等之合圖、壹番貝・貳番貝陣屋に吹申儀に付る者、紛敷も可有御座に付、合圖具は調練場東橋上に罷出、太鼓打、貝を吹候上、御棚々御差圖具に相始候様可被仰付哉、

一、侍手明銃次男たり共、業前相勤候様可被仰付哉、

一、前々々諸組調練、水軍調練等之節、打藥・火繩等被差出來候就る者、當節之儀は、打藥竝フージーとも、料銀に從御武具方可被差出哉、

一、著服之義、手明銃迄は華兜・胴服・裁付、御歩行以下は御火術方銃陣笠・筒袖・襦袢・股引著用可被仰付哉、

一、教師之儀、御火術方傳法に於ては、乗馬致候趣に御座候得共、不馴之馬も間々有之趣に

安政五年三月十一日

二六三

鍋島齊正藩  
士ノ銃陣調  
練ヲ覽ル



付、乗馬之儀、勝手次第被仰付方には有御座間敷哉、

一、教師之儀、壹人罷出可申之處、組合に付、代り合相整候半る不相叶之處、其節陣屋を罷出候る者、代り合隙取可申に付、いづれ之立場候歟不差支所に最前方罷出候様可被仰付哉、

一、指揮方助等之儀も、右同様可被仰付哉、

一、諸組太鼓熟達之者無之、且不足等之節は、他組、扱又諸家來等之内、熟達之者相對申談相勤候様可被相達哉、

一、教師指揮方等、差懸り當病差合にゐ、同組内相勤候人無之節、詰合之組を相勤候様可被仰付哉、  
(佐賀藩海軍史)

〔鍋島直正公傳〕

略、斯くて、十五組の士卒に對し、日割を以てその銃陣を演覽あるべく仰せ出さる、是に於て、備立役より左の通と伺ひ出でたり、

○佐賀藩備立役伺書、上ニ掲ケルヲ以テ之ヲ略ス。

裁可を得て、各組に觸達し、三月十一日に小馬廻四組・同新組、火術組、十四日に先手二組・警固四組、十七日に警固二組・留守居三組の演覽あるべく、日割を定め、上下を擧つて、演習

齊正十五組ノ銃陣訓練ヲ覽ル

に忙殺せられたりしが、當日に至り、公は中折の訓練場に臨みて、日割の如くに、演覽を了せられたり、

○附 録

〔佐賀藩備立役伺書〕

○佐賀藩備立役伺書、上ニ掲ケルヲ以テ之ヲ略ス。

三月十八日、御備立方より、左之通相伺候處、其通被仰付、

先年來御取入之劍付筒之義、手入方之爲、過半諸組へ御配當御預相成居候、當節御取入の御筒も、大總之義にて手入不行届に付、諸組へ同様御預け被置方有御座間敷哉奉伺候、

〔鍋島直正公傳〕

三月十八日、蘭國より新に購入したる小銃を各組に分配し、以前に割り渡したるものと併せて、銘々に配附せしめ、研き掃除を爲さしむ、洋式の小銃を分解して、その器械を掃除するには、各組の幹事、若くは火術方に備へ置ける三股・萬力等の附屬器械を適宜に貸與せしむ、これまでは、軍用小銃は盡く武具方にてその研き掃除をなしたれど、今は士卒みな洋式銃の取扱に慣れたるを以て、各人に割り渡して之を研かしめ、以てその費用を省きたるなり、

十二日子 外交措置幕府委任ノ勅裁案ニ關シ、權大納言中山忠能・權中納言正親町三條實愛・正三位大原重徳・侍從岩倉具視等八十八人、連署シテ陳情書ヲ上リ、且、關白九條尙忠ニ迫リ、朝議ノ變改ヲ請フ。

〔權大納言中山忠能等八十八人連署願書〕

○子爵野宮定親所藏本  
野宮家文書所藏

劍付筒



安政五年三月十二日

○三月十二日武家傳奏へ

三月十二日、列參申立之書取、○伏見宮侍、御牧家諸留

三月十二日、同心之堂上方連名願書、○平家成、中記事

關東ノ言上  
堀田上京ノ  
趣旨ニ違フ

勅答案ノ文  
面刪改ヲ請フ

中山忠能等  
八十八人連  
署上書ス

同意之輩、恐多候得共、爲國家不顧萬死申上候、此度關東御返答之趣、不被爲得止御事とて奉恐察候得共、不顧多罪奉言上候、去月被 仰出候神宮御始 御代々へ被爲對、如何可有之哉、被惱 叡慮之事、實ニ重大之儀ニ候處、何とも不申上、人心居合之儀者引受候趣言上、堀田備中守爲城使上京之旨趣共、相違之廉も有之、如何ニ存候、將又、此度御返答ニ、關東へ御頼被遊候旨相見候、左候ハ、條約已下惣關東存意之通取計候節ハ、再應被 仰達方無之哉、然時々、天下之人望を塞キ、皇運武運相共ニ衰弊致候様可相成哉ト、深々歎息仕候、尙亦内亂之程難計一同憂苦之至ニ候、御返答御文面之内、御返答之被遊方無之、此上ニ於關東可有御勘考様、御頼被遊候と申處之文面御差除ニ相成候様、伏奉願度候事、

三月十二日

別紙二枚ニ連名、尤横一列ニ書之、人數八十八人、○管

別紙連名書、○伏見宮侍、御牧家諸留

(中山、權大納言)

能

正親町三條  
實愛

大原重德

信 愛 定 章 胤 功 親 愛 賢 堅 德 輔 祐 光 忠  
(大納言、權大納言)  
(正親町三條、權中納言)  
(五條、前權中納言)  
(今城、前權中納言)  
(盛田、參議、右中將)  
(野宮、參議、左中將)  
(堀河、前參議)  
(朝原、前參議)  
(舟橋、正二位)  
(西洞院、左兵衛督)  
(大原、正三位)  
(町尻、太宰大貳)  
(愛宕、正三位)  
(三善、正三位)  
(藤波、神祇大副)

安政五年三月十二日



安政五年三月十二日

資 仲 政 順 聰 熙 熙 典 光 政 慶 濶 量 恪 建  
隨 (豐岡、正三位) 二六八  
高 (五辻、正三位)  
基 (持明院、正三位)  
實 (今出川、右中將)  
泰 (倉橋、給部卿)  
良 (吉田、神祇權大副)  
長 (清岡、式部權大輔)  
雅 (飛鳥井、侍從)  
行 (石井、正三位)  
爲 (桑原、正三位)  
具 (岩倉、正三位)  
通 (久世、正三位)  
爲 (藤、正三位)  
公 (西河辻、正三位)  
實 (武者小路、正三位)

安政五年三月十二日

容 言 理 見 篤 光 賀 正 詔 隆 賢 誠 在 善 敬  
有 (六角、正三位)  
時 (平松、正三位)  
家 (花山院、左中將)  
時 (交野、從三位)  
信 (長谷、從三位)  
在 (唐橋、從三位)  
親 (堀河、從三位)  
公 (清水谷、右中將)  
隆 (船岡、右中將)  
久 (船越、中務大輔)  
隆 (豐尾、右中將)  
公 (阿野、左中將)  
實 (滋野井、左中將)  
通 (梅溪、右少將)  
基 (東園、左少將) 二六九



安政五年三月十二日

二七〇

國實香意述雄允文仲萬文季禮致言  
 定(今城、左少將)  
 保(高松、大膳權大夫)  
 公(武藏小路、侍從)  
 隆(西大路、左少將)  
 公(河島、侍從)  
 晴(土御門、右兵衛佐)  
 公(三條西、左少將)  
 基(石山、左京權大夫)  
 有(慈光寺、右馬頭)  
 時(交野、少納言)  
 有(千種、左少將)  
 輔(小倉、侍從)  
 宗(難波、侍從)  
 通(愛宕、右京權大夫)  
 雅(備前、正少將)

岩倉具視

安政五年三月十二日

二七一

賢長視隆顯彰佑度義豐愛之政訶祥  
 康(在城、少納言)  
 夏(東坊城、少納言)  
 具(岩倉、侍從)  
 康(堀川、刑部大輔)  
 泰(倉橋、左馬頭)  
 顯(勸修寺、左中辨)  
 基(石野、給部大輔)  
 經(龜波、左京大夫)  
 良(吉田、侍從)  
 弘(芝山、兵部大輔)  
 公(真辻、侍從)  
 經(中御門、右中辨)  
 實(山本、大夫)  
 隆(四條、大夫)  
 基(國、大夫)



安政五年三月十二日

二七二

和 理 治 義 邦 梁 知 任 德 業 嘉 綱  
基(持明院大夫)  
經(勸修寺大夫)  
通(梅溪大夫)  
有(六條大夫)  
長(雲里大夫)  
實(橋本大夫)  
公(姊小路大夫)  
有(千種大夫)  
賴(姊小路、大和權介)  
公(西辻大夫)  
宣(藤、主水正)  
具(岩倉大夫)

右八十八人連署、

後日、能通卿(六角)・雄光卿(三室戸)・通禧朝臣加入、(東久世)  
右申立之趣、關白殿被及言上候處、不無理趣意之思召候間、御評議之上、可被改義も被爲有候旨、關白殿被命候趣、

廣橋前亞相被申渡候事、(○平安戊午記事、見宮侍御牧家諸留)

(長谷家記 菅葉 亞米利加國人願立ニ付所存御 尋并雜誌 伏見宮侍御牧家諸留 平安戊午記事)

朝議アリ

〔非藏人日記〕

乾(○東京帝國大學所藏本)

三月十二日、戊子、陰晴、當番議奏萬里小路大納言殿、自餘參集、傳奏廣橋前大納言殿參侍、

一左大臣殿・座主宮・内大臣殿等御參、

一近習・内々・外様・公卿・殿上人衆、數十人參集、(○中略)

十三日、己丑、晴、當番議奏加勢中山大納言殿、其外參集、(久我殿・坊城殿不參)、傳奏衆參侍、(東坊城殿不參)、

一關白殿・左大臣殿・内大臣殿等御參、

〔德大寺公純日記〕

(○臨時帝室編修局所藏本)

三月十二日、陰、(○中略)

一忠能卿已下三番所斥、御番御免等八十五人連署、御直答書不同意旨被申立、有書取別注、

廣橋・裏松等、兩公被持參、了八十五人一同、殿下參入被申上置候、

一左府・座主宮・内府等參入、太閤垂命返答一件ニ付、有話談之事、書取被取替事、

一已斜出門、權亞相亭行向、其後參朝、戊刻許退出、

十三日、晴、

一辰半刻比、太閤殿・左府・内府公等被行向之間、可行向旨被示、嫌疑之間、不行向旨示、

朝臣八十餘人連署上書、且九條關白ノ邸ニ赴キ勅裁案ニ不同意ノ旨ヲ述ブ

安政五年三月十二日

二七三



了更陽明家へ被行向、仍予行向、了殿下御參間、直令參内、了申斜退出、酉斜從廣橋以使、  
只今可參朝旨被示間、參朝、了三公墨夷一件ニ付御評定可被加旨、太閤殿下垂命由也、左  
馬權頭被伺定、各諸大夫召設、武傳被申渡了、且又加勢兩卿、本役同樣可被存知旨、同上  
也、事終退朝、

一按察使存意書、被附武傳へ相屬了、殿下へ被入覽云々、  
一明日當番、正三へ參勤示了、

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本  
中山忠能履歷資料所載

三月十二日、○中略、諸臣八十餘人、不量列參、以連名一紙有申立之事、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

三月十二日、戊子、陰晴不定、○中略、

墨夷一件ニ  
就キ一同憤  
發

午剋斗、從源相公羽林、唯今可參 朝被示、直參内、墨夷一件ニ、今度關東へ御沙汰之趣、如  
何敷所依有之、一同憤發、且現任之外輩、三番所多以參集、囂々寔未曾有之事ニ、○中  
十三日、己丑、晴、午後參内、○中略、  
墨夷之事有之、晚頭退出、

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕○橋本實麗手記  
伯耆橋本實麗所藏本

三月十二日、戊子、晴、午剋斗、從源相公羽林、唯今可參 内被示、直參、御返答書取各不承  
知ニ付申立之事、頗囂々、依之現任輩、書取改作、附于武傳、○中略、  
又三番所同志ノ人々、右御返答振傳聞、被參人々八十餘人、申立書取、

同意之輩、恐多候得共、○中略、  
以上八十八人、此内現任四人、小番御免四人、是又殿下に各參入云々、傳聞、按察前黃門一  
分申立云々、誠奇代珍事ニ、

八十八人連  
署上書シ九  
條關白邸ニ  
赴ク

十三日、己丑、晴、午後參内、墨夷一件ニ、

〔野宮家文書〕○子爵野宮定毅所藏本

三月十二日、御沙汰書文牒、諸臣不感服、依之現任公卿并三番所、前官公卿散三位、殿上人  
等、有志輩多參集合談、其所意區々之處、終相和、現任二卿一通、前官公卿散三位、殿上人等

連名一通、忠能卿、家信卿、實愛卿、重胤卿、子等、書整、屬武傳廣橋、被落手、其後現任一同、  
卿、當番 之外、同伴、參關白殿、一昨日廻覽之一紙文牒如何ニ候間、所存一紙唯今武傳へ差出置候、  
猶宜御勘考候様、以諸大夫信濃小路、民部少輔申入置、退出、此後前官公卿以下各參入申同旨、定功更不  
參入、

有志輩推參

〔長谷家記〕○孝明天皇紀所載

安政五年三月十二日



安政五年三月十二日

三月十二日、午斜西洞院入來、同伴參朝、追々參集、近習十人餘之輩、兩番所合七十餘人、總計八十八人云々、承知之人、或傳聞、不期而集會云々、願書書體如何可有之哉、三番所說區々、於三番所、各一ト番所之存意書附、其上ニテ決定可然、且三番所、別々可差出哉、是亦衆議可然、先於近習衆議存意書附、

同意之輩、恐多候得共、○中略

右調文、兩番所之存意及尋問之處、於此文各無存意之旨答之樣、從大原三品各へ被示、依之

一致治定、清書予書之、(長谷信忠)畢兩番所交名承合、三番所次第ニ書之、元來附于議奏各存心之處、

傳奏之方可然、則各出頭、附于傳奏、傳奏候所狭少之間、上首人十餘、許輩面謁、其餘羣居廊下、之處、尙可及勘考落手之由、各退

去了、暫而從第一卿中山大納言、申傳、今晚傳奏、議奏一人、被參殿下、可被及內覽之間、明日御返

答承ニ可參也、三番所第一第一一同退出、于時參上殿下、當番人附于諸大夫言上、信濃小路此度關

東へ御返答之墨夷之一條、各御答御趣意歎敷存候ニ付、今日以願書附于傳奏相願之處、今

晚兩役參上可被申上之旨ニ候間、尙御勘考宜相願候、尤徒黨申上之儀ニテハ無之、天下之

御大事ト存、各存心申上之儀之旨也、此時第一五條前中納言、申入之處、委細御承知之旨、御返答承了、各

退散、于時酉半許、此交名、番所番所二分差出置、尤名字也、

殿樣御玄關日記○長谷信忠家記  
經新史別編會所藏本

三月十二日、子、陰、○中略

一御出門、已剋、橋本樣、(實照)川緒樣等へ御出之事、

一御參 內、午剋過、御退出、酉剋過、直ニ九條樣へ御參之事、今度亞墨利加一件ニ付、堀田備中守上京、彼是御往復之義有之、右御相談、左右方樣御參集御相談之由ニ付、御參之事、

菅葉○五條爲定日記  
宮内省圖書寮所藏本

三月十二日、戊子、陰、大炊御門大納言家信、源三位重德、前式部權大輔長材、祭主三位教忠、桑

原新三位爲政、新菅三位在光、(大德)大夫有義等來、皆是今度關東へ御返答之趣被示談、午半剋參

內候處、近習兩番所多人數參仕、不圖三番所同志之輩、以書取屬于武傳、申立置、

同意之輩、恐多候得共、○中略

退出掛、各同伴、參于關白殿、同志之輩申立之義書取、武傳ニ差出置候間、御採用有之候

樣、宜預御取計度旨、以諸大夫申入、交名持參、○中略

十三日、己丑、微晴、已剋比參內、面會于武傳、廣橋前大納言昨日申立置候御返答如何哉、承度旨申

入之處、關白殿より、被及言上候處、不無理趣意ニ思召候間、御評議之上、可被改義も可

被爲在由、關白殿被命之旨、後剋廣橋前大納言被申渡、未剋比退出、

六角博通雜記○子爵東園  
基愛所藏本

安政五年三月十二日



願ノ趣尤ニ  
就キ衆議ノ  
上書改ムベ  
シ

三月十三日、晴、當番畫參勤、今日前菅中納言・三室戸三位・(藤波教忠)祭主三位・(清岡長熊)治部卿・式部權大輔・堀川三位等參集之、右如何与尋所、今度關東へ御返事文面、甚歎敷、朝運御衰弱之義故、昨十二日、三番所都合八十八人當番、列參、右文面御書改之樣願度旨、傳奏廣橋亞相江願、午後ヨリ酉半許至ルト、退出掛、殿下參上、右願宜御沙汰旨屈置之与、右御返答爲伺、番々願之、第一參集之、予更ニ此義不知、洩其儀甚残念、仍今日御返事之上、可相願覺悟之處、廣橋被申傳、中山大納言被示傳、昨日列參願之趣、不無理、思召候間、猶御衆評之上、御書改ニも可相成哉之由、被仰出之、依る別段願不克、誠列參之次第重々大慶之、

〔高辻以長日記〕

○子爵高辻宜麿所藏本

三月十二日、曇、○中

一愛宕へ行処、通祐卿御用召、アメリカ一件ニ付而之由ト察、爲定卿も參、内ノ由、今日右御用召、所意書各被出矣、

御用召八十人余矣ノ由、父子孫も有之、連名又別通も有之矣、酉過各退出矣ノ由、且又殿下へ八十余ノ人、一同參入ノ由、

十三日、晴、午後曇風立、○中

高辻以長父  
子連署ニ洩  
ル

一五条ニ而例會延引矣ノ由、昨日御用書付ニ付而矣、  
一夕方愛宕三位通祐卿被來、極内々昨日之様子承候事、

右所意書上ル事、以長ハ大病後故矣、修長ハ年若故、爲定卿方も不被示諭、○中

十五日、晴、○中

午後五条へ修長ヲ遣、昨日も記置候以長も書付之趣意書、不及差出候而可宜哉尋合、即行処、書キ物ノ用向有之、息爲榮面、何も不申由之、○中

十六日、晴、午比方風立曇、申半後輕震、○中

一桑原へ已過、以長行、爲政卿面會、此度異國企惑乱、右ニ付、過日矣、一条殿へ御門流一同、異國乱ヲ企ニ付、八十余人關東へ願書ヲ被出、依之當高辻之外多分、禁城御靜謐ヲ爲守願書被出、當家以長父子一言も、御靜謐ヲ守護之寸志も不差出候而ハ甚不本意、如何之次第候哉ト尋処、ソコノ答之、

願書不願方も、多有之由之、依右聊令安心、尙又五条へも被談上被爲知、被添心様頼置、

〔川路聖謨都日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

安政五年三月十二日



安政五年三月十二日

十三日 三月 くも<sup>略</sup>中、蓮門昨夕よ<sup>御</sup>參 内之由。蓮門少々云々有之候。六日<sup>御</sup>里坊

が。御本坊に御引取。八日<sup>御</sup>逢之節。々ふそい所之月。却るわきよも。夫のため

よ逢とも出来る。と御意あけき。昨日<sup>御</sup>參 内之上。ま<sup>御</sup>用多あるへ。此宮此節

第一之 御意<sup>御</sup>應せさせら<sup>御</sup>た<sup>御</sup>る御人<sup>御</sup>の由。

主上御酒宴之節<sup>御</sup>ふと。是非被 召候事之由。

主上殊之外ある。御英武のと御好<sup>御</sup>与之風聞<sup>御</sup>ふ<sup>御</sup>は。蓮門と乍恐。御相口と申御とふるへ。

よ<sup>御</sup>れてハ以前よ<sup>御</sup>。左衛門尉の蓮門へ奉<sup>御</sup>るたるものよ。不思議<sup>御</sup>よおもふとの有ものと

ハ。存外之所に出たるも<sup>御</sup>あるへ<sup>御</sup>ら<sup>御</sup>は。々<sup>御</sup>ら<sup>御</sup>ぬ所<sup>御</sup>ある。左衛門尉のと御承知之由<sup>御</sup>あ

と。申候者も有之候。左もあるへ。先達<sup>御</sup>る蓮門へ奉<sup>御</sup>る葡萄酒又ハアメリカ蠟燭パン之

類。殊之外<sup>御</sup>は御喜ひ<sup>御</sup>あ<sup>御</sup>る。御近習之人も<sup>御</sup>あ<sup>御</sup>ら<sup>御</sup>はと云<sup>御</sup>ふと。可怪<sup>御</sup>と<sup>御</sup>。左衛門尉ふとの

名。雲此上までも聞<sup>御</sup>へたる<sup>御</sup>とい。恐入<sup>御</sup>たる<sup>御</sup>と。

〔橋本左内京都報告書〕

○春獄文  
庫所藏本

○三月十四日江戸福井藩邸中根鞞負へ

○上三月 略、十一日、二ヶ所之外開港不相成旨の結尾に、矢張關東へ御任<sup>御</sup>せの文字有之、三公始一統

不服之處、太閤大立腹、何分夫<sup>御</sup>てハ太閤丈之存意<sup>御</sup>ハ、別段關東へ可<sup>御</sup>申遣ト云事<sup>御</sup>に相成候

よし、關白殿ふハ、一旦奏聞<sup>御</sup>に相成候もの、仕直スト申す例ハ無之と申主張被<sup>御</sup>致候よし、自  
此逐々大争<sup>御</sup>に相成り、公卿八十八人<sup>御</sup>訴出、何分太閤存意通<sup>御</sup>に相成候様懇願<sup>御</sup>之趣<sup>御</sup>に御座候、  
關白も此<sup>御</sup>に被<sup>御</sup>困候哉、右書付ハ尙<sup>御</sup>又及熟評、書直し可<sup>御</sup>申旨、一統へ御申<sup>御</sup>の由、夫<sup>御</sup>て一旦の  
騒動ハ静り申候、○中  
略、

右、十四日晚、認、

○本書ノ全文ハ、三月十四日、橋本左内ニ關スル綱文ノ條下ニ收ム。參看スベシ。

〔九條家  
臣〕島田左近書翰

○子爵滋澤榮一所藏本  
井伊家秘書集録所載

○三月十八日彦根藩士長野主膳宛

態々以飛札致啓上候、先以

大守君益御安泰被<sup>御</sup>爲遊御座奉<sup>御</sup>恐悅候、當御方御惣容無<sup>御</sup>御別條被<sup>御</sup>成御座候間、左<sup>御</sup>に御承引

可<sup>御</sup>被<sup>御</sup>下候、二<sup>御</sup>に貴君彌御安康可<sup>御</sup>被<sup>御</sup>成御勤務珍重奉<sup>御</sup>賀候、擬早春長途御内使被<sup>御</sup>成御勤御苦

勞之御事、實<sup>御</sup>に （九條尉忠、關白） 殿下<sup>御</sup>に<sup>御</sup>御悅喜不淺御満足<sup>御</sup>に被<sup>御</sup>思召、厚御挨拶可<sup>御</sup>申入旨被<sup>御</sup>仰付候、付

てハ、御歸府後關東表内外之御模様、猶<sup>御</sup>又、委敷承<sup>御</sup>知仕度、内外共否御密旨共被<sup>御</sup>仰越可

被<sup>御</sup>下候、又々御歸府後當地之様子、左<sup>御</sup>に申入候、

一當三月十一日、如別紙御返答<sup>御</sup>に可<sup>御</sup>相成、

安政五年三月十二日



延議紛糾

現任堂上以下  
關白邸ニ  
赴キ意見ヲ  
陳ズ

安政五年三月十二日

二八二

宮中御評決濟ニ相成、先々御相方御安心之場ニ可相成ト存居候處、俄ニ十二日ニ相成、太鼓殿發頭(關司政通)ニ相成、大ニ模様變リニ相成、決ル此度之事御沙汰止ニ被仰出可然杯被申出、其外栗田宮・左府殿(近衛忠房)・内府殿(左衛門)、皆々鷹印之強意ニ隨從被致候大變事ニ相成、是迄之評決トハ、皆々裏をかゝ是、此上如何様之變事出來も難計、加之十二日夜堂上現任一組、其以下都合三組ニ相成、百五人當殿(九條部)ヘ被參、此度之一義是非御赦許ニ不相成候様ト之衆意被申上、其外十三日、非藏人六十人、是も夜分參殿、一同歎願同意之次第、夜分旁以一寸騷動之事ニ御座候、其外此頃(九條部)ニ追々存意書付日々被差上、實ニ此末如何可成行事ニ御座候哉、事儀御安心之場ニハ一寸モ不相成、官武之混亂ニ可相成哉、何も御賢慮可被下候、○中略

一 諸國之諸侯より堂上方へ、追々表向被申出候族も多分有之、迎も御聞濟ニハ不相成模様ニ御座候、

一 川路、栗田へ參上、先達て御咄シ申入候事之外ニ、珍說甚、多分有之、云々、尤不殘實說之事ニ候事、云々、

一 此頃ハ、日々々々御參 内三公方、其外大評定御座候得共、彌御治定被 仰出之邊ニハ不相成候、且又此六七日已前より、片倉小十郎内々上京、其外諸方之老臣追々上京、何等

之事ニ付ると申事ハ相分り不申、乍併上京ハ致居候ニ相違無之候、○中略

三月十八日

在留 龍

章

義 言 君

幕下

○參考

〔孝明天皇紀按文〕○孝明天皇紀所載

明治卅二年十二月、久我從一位附(建通)ニ云、

安政五年三月十一日之夜(建通) 富小路左馬權頭ヲ以テ、内々勅書ヲ賜フ、今度返答之事、國家ノ安危ニモ候ヘハ、御心配

之旨何ト方宜敷勤考ヲ加ヘ、書改ニ可相成様御沙汰也、予所勞引籠中ニ候ヘ共、御尤之御儀ニ候ヘハ、早々大原(重徳)三位

岩倉大夫等急々入來申入、御返答書末文之處々々相談致シ、無爲方マ、予申入候ニハ、何分多人數集リ一同列參ニテ、

傳奏并殿下ヘ參入シテ、今度ノ御返答書改之儀歎願候方可宜、定メテ多人數ニ恐レ承知ニ相成哉モ難計、若納得ニ候

ハ、至極ノ恐悅、上ニモ御安心ト存候、今晚中ニ夫々手配シテ、成丈ケ誰レ彼ヲ不撰、知モ不知モ、一同シテ多人數

程宜候間、御集會ニテハ如何哉ト申入之處、大原・岩倉大同心ニテ、是奇計也、早々從是諸家ヘ廻リ可申ト、大原・岩倉

兩人シテ被廻候ニ取極メ候、其夜(天明)其夜中ニ廻勤シテ、十二日早朝禁中ニ集リ候様ニ相成候、三番所ノ輩集リタル

ハ八十八人許ナリ、前夜申談シ、通り、傳奏ニ迫リ、殿下ヘ列參ニ及タリ、何方モ多人數ニ驚愕、竟ニ書面書改メニ相

成タリ、此後右兩人又々入來ニテ、無滞相濟旨咄アリ、予議奏御役中故名ヲ顯ハサズ、大原一人ノ考ニ致置、云々、

○附錄

安政五年三月十二日

二八三

久我建通勅  
答文改刪ニ  
就キ策ヲ大  
原岩倉等ニ  
授ク



安政五年三月十二日

二八四

〔海防秘聞集〕

○維新史料編纂會編輯

三月十七日、京地方歸坂いとし候もの、咄之由、

關東へノ勅  
裁案ニ就キ  
八十八人連  
署上書ノコト

備中守殿、去ル十四日、御暇參内之積、其前日御返答御渡り申積之処、堂上方之模様、中々大騒ぎ相成、當月十日頃迄、御返答之下案出來、堂上方廻達之処、其翌日迄、不意ニ惣公家參内、夫方八十八人連印ニ、直ニ關白殿ニ參、願書差上候付、其翌日十二日迄、彌御返答之儀被、仰出候由、右ニ又備中殿歸府延引相成候由、十二日ニ片倉小十郎京都着、加州家老も近きニ京着ニ申事、竹腰も參り候ニ申事ニ御座候、此儀、實説ニ申事ニ候得共、此節柄信用難成候、○中

京師風聞書

去ル十二日、未半刻方大中少納言其外九拾六人、急速之參内ニ付、各太刀持參御廊下ニ詰懸、傳奏衆ニ絶り、此度之御返答、此儘御差出ニ相成候哉被詰掛、猶東坊城參内、是非差留可申之勢ニ、實ニ宮中大搖動、東坊城ハ其日御不參、夫ニ付、一同下り懸ケ、九條殿下ニ推參之上、此度之御返答、彌此間廻覽之書、御用ニ相成候哉否被伺候由之処、決御用ニ相成不申との御返答被、仰出候付、去ハ、此勢ニ直ニ本能寺(堀田正勝ノ旅館)ニ押寄、一同ニ可致應接杯申候も在、又兩三人關東ニ下向之方可然之催も有之、何之之方可然杯被申上候付、殿下も殆御困リニ、何分追之沙汰被仰出候付、退散ニ相成候由、

鷹司太閤改  
心ノコト

太閤殿下御改心之一条、先日中方番夫小林某直諫申、此度ハ誠ニ國家之御大事ニ有之所、此御評定ニ御外レ被成候ハ、三十四年之御勤勞も水之泡と相成、猶更當、主上ニ、御幼少之時方御附添被遊候ニ付、何事も君之尊慮ニ爲御任被遊候処、此度之御儀、御違論被爲在、

叡慮ニ不被爲叶、此度之一条も、國家之爲太閤之論ハ不被爲任趣、  
叡慮被爲在候段薄々相伺、誠以主上御一方ニ被爲惱、宸襟候御義恐入候、左候節ハ、三十四年御勤勞之消候而已、ら、末代御不忠之御名を殘し候段、乍恐残念千萬奉存候間、奉忠諫候旨申上候処、太閤殿下至極尤ニ被思召、夫より

御改ニ相成、翌日青蓮王并右府公御招請ニ御正論之御相談ニ相成、青蓮王其十二日御評定之儀も御參内被成、夫方御里坊ニ御逗留、

〔年表續紹録〕

○内閣記録  
○所載本

天朝も、地下方打拂之建議ニ、

去ル十二日、關白殿參内有之、朝五ツ時頃方夜四ツ時頃迄、群議在、私第ニ退散被成候處、薄々關東願望、勅許も可相成との沙汰故、參内之百官、其儘朝服ニて九條殿ニ仕掛、有志之輩も、國体を失ふを咎め、若御許容も有之候也、一統佐倉之旅館ニ參會致し可申談、夫ニ承知無之候也、一統關東ニ下向可致との大議論出來、佐倉近々出立ニ可相成模様之處、煩發る佐倉侯狼狽被致候、

○公卿八十八人連署上書ノ事ニ關シ、別ニ高松保實ノ上書ナルモノアリ。水戸徳川家所藏ノ國事記其他ニ載ス。文辭奇澁、誇張多クシテ信ジ難キ點アリト雖モ、姑ク次ニ收録シテ參考ニ資ス。

○參考

〔大膳權大夫高松保實上書〕

○公卿徳川願所藏本  
○國事記所載

○三月十七日上書

一堀田備中守・川路左衛門尉等、各邪宗門を尊信之事、對國家反逆之心底有之候風聞仕候、口外唯今ハ難仕、件儀不容易有之候、既長崎表邪宗門改場繪踏等淺彼等邪宗依尊信相止候趣、是第一對國家大不忠候疑、一交易長崎表・下田表・箱館表等、第三ヶ所之所ハ無

安政五年三月十二日

二八五

幕吏ノ外交  
處置悉ク當  
テ失ス



安政五年三月十二日

二八六

勅免、唯被看候儀ハ、諸侯之有志之輩連も不快之趣候、自餘交易場を被增加候節ハ、假令被免許候共、忽諸侯忠臣之輩決る其儘ハ不差置候旨候、仍却る大亂之基疑と奉存候、

一長崎・下田・箱館等交易場制度、總る從古來被定置候通ニ、嚴格之定義を爲相守候方ニ無之候てハ、是以不宜旨ニ候、殊ニ夷賊等一寺を建立之旨相聞候、是儀不可然旨ニ候、

一兵庫表邊、畿内之交易場ハ、別る相望候儀ハ、恐多くも國體へ近付度故之茲計ニ候、深死罪ニ替候ても、此儀謹以、御諫奏申上度存候、

一京都七口之御警衛之事、何卒七ヶ國之國主へ被 仰付候様、願上候内願之候有之候、

一三家之輩、交代警衛逐勤仕度旨も、極密ニ内願之卿有之候、

一此度關東使堀田備中守<sub>ニ</sub>被賜

勅答候件、何共恐入候得共、大樹へ直ニ御申渡之方ニ無之てハ、連も 叡慮難相立奉存候、内實ハ水戸前中納言不

一方恐入心痛被致居旨ニ候、何卒三家之中老輩之卿、以

勅命被 召登候も、萬端 朝廷御都合能可相成旨、此等も保實相心得内々申上置候、口外難叶義、件大意ニ候、

一此頃内密ニ承候得ハ、關東表へ堀田備中守申遣候ニも、全く夷賊交易・居住一件、總る御閉届之御返答、此程相濟候旨、先以畏入候旨ニ、江戸表一圓申遣候旨候、此儀不埒千萬成事ニ候、自余種々惡計、次第露顯候、何共可惡逆賊ニ候、奉輕

叡慮候件々、假令於 禁中ハ、被爲看憐被遣候共、乍恐衆人難差免候模様ハ、定る四海萬民之赤心、皆可爲同様候、雖然累年治世太平之御時代續候之上ハ、可相成ハ、精々穩便平治所好ニ奉存候、亂スハ易、治ルハ難候疑、何共外夷<sub>ニ</sub>假條約候連、關東<sub>ニ</sub>も嘸々可被心配、其段ハ亦至極察考茂候事ニ候、雖然、實以 朝廷ニハ、被爲對

神祖御始、被 仰譯方不被在候儀、右外夷<sub>ニ</sub>之違約トハ、天地之輕重茂候疑ニ奉存上候、且又

神代以來之風俗ニも可相拘、穢風土候段、何共其道ヲ心掛候輩ニハ、對 三神、無申譯嘆ケ數候、此上々、關東へ及下向、深取扱穩便ニ、此大事何ト疑

關東ニ下向  
シ穩便ニ取  
扱ヒ叡慮ヲ  
立テタシ

叡慮相立候方ニ御取扱、乍不及申上度奉存候、尤兼る水戸前黃門ニ示合、一兩年以前より心を通し置候儀も候、既眼力悉的然驚入候、取早至此場候上々、却る勇強一隨而已ニハ、難相治、國家之大切天下之危急ニ奉存候、乍員外、御取扱申上度、言上候事、

三月十七日

保

實

(新嘉雜記)

〔大膳權大夫高松保實上書〕

○公府徳田園原所藏本  
新嘉雜記所載

○三月十九日議奏へ

雖不敏身體、不顧死罪、謹る奉言上候、先達來、夷賊一件ニ付、從關東變革窺出候始終ニ付、

御返答之事、天下諸侯庶民ニ至候迄、四海之人氣、既ニ以不容易及憤亂罷在候、

朝廷茂百官諸臣實ニ今々晝夜號泣曼天之章氣候、如保實迄專爲家業憂欲穢 皇國風土、往々 神代以來之風俗如何可變も、誠以恐歎仕候、雖然談判可否宜有、即攝政御事誠以

叡慮 神慮等被爲決候御議論、豈不被得圖唯深恐入痛憤仕候、蓋將又大亂之色見眼前候上々、何卒暫時天下人氣鎮候迄、保實一命ニ引替善惡共御返答御延引ニ相成候様、依以奉諫 奏候、若被 仰出候節、官民共及大事候節々實ニ恐入候、尤諸侯追々不安手配仕候趣共、誠傍觀難仕、

朝廷御大事身體究死奉言上候、爲國家御採用ニ相成候々深畏入奉存候事、

三月十九日

保

實

(國事記)

安政五年三月十二日

二八七

人心鎮マル  
迄勅答ヲ延  
ベラレタシ

議 奏 御 中



〔大膳權大夫高松保實上書〕

○國事  
○所載

外夷ノ姦謀  
恐ルベシ

賤位之身體深不堪恐懼得共、憂欲被穢  
皇國之風土、不願死罪奉嘆奏候、此度夷賊居住于 神州之一件、追々拜聽仕候儀ニ候、茲事極多如 叡慮、實ニ不可然  
奉存上候、先達來三公諸卿衆雖可被盡御議、別尙又被惱  
叡慮候御旨、毎々謹拜聽、實以保實迄夜晝夜不堪恐嘆候、乍恐不願員外言上仕候、尤去十二日、赤心言上之節ハ、同心多  
人數一列候ニ付、別意之難奏上候、既外國之珍書類所見仕候處、印度編子・外國圖誌、采覽異聞、鴉片始末杯を始、其  
書意所業決以不被爲 御由斷候、乍恐奉存上候、此度日本國ニ仕掛候交易懇切之申狀、全慮懇無疑候、外國連も惣悉  
皆同様之姦謀候、始ハ懇切國益專申立候取入、終ニ其國內ニ仕掛候居候後も、忽變心及合戰候、其國必次第ニ憂衰、  
各夷賊之陷奸姦候而已ニ候、殊甚數ハ呂宋國之實件ニ候、是ハカンタン之南、東南之海中ニ有之、其地頗廣大ニ有、古  
時ハ國王有之候所、明ノ永樂三年以來呂宋國之王遣使朝乞援、及後國亂、遂被討亡爲ニ外夷、是皆始ハ交易懇切を申立  
仕込、其後合戰終國王を捕へ、長久不指歸、仍五百萬兩ヲ以和議を頼候次第、何共逆夷姦賊無道之懇切ニ候、返々此度  
本朝へ之仕掛一圓是ニ無違事ニ候、實ニ右之次第相及候後ハ、如何休ニ嘆候る哉難復國、如何ニも惡逆ニ候、殊  
神祖御始 御代々ニ被爲對、深被爲惱 叡慮候御事、是ハ乍恐申上候迄も無之、恐入候一大事ニ奉存上候、將乍恐愚家  
先代共、靈元帝厚蒙 勅命候以來、歴々專勵厥家業候ニ付ても、皇國之風俗  
神代以來之清律を移傳、專學習仕候所、右様ニ夷賊於同居ハ、自然次第可穢 皇風被察候、何共 三神之神慮究知御不  
同意と奉恐入候、加之外夷交易之諸品、本朝之人身命壽を縮め、或も病を生ニ是非有之旨、尙又邪宗門を許候ハ、假令  
十里廿里之隔候共、邪術を用候時ハ、忽奉對 玉體誠恐多、御危難之程眼前ニ候、是等不奏ハ、可爲不忠候條、不願恐言  
上候、諸臣或ハ萬民迄、捐命無謂不憂夫、退相考之處、人心居合之程被案、唯合戰被厭候ハ、乍尤、此度外夷賊於被免住  
ニ、矢張忽兵亂眼前ニ候、加之貳百年來被任置征夷、 朝恩之程も恐懼可有之譯柄ニ候、且先頃浦賀表一件ニ付るハ、

天下一變ノ  
期

諸侯々々之氣伏如何ニ奉存候、既ニ極密々兼る顯道由緒有之候諸侯、歎意も承知心得居、候名堅口外を止候ニ付、難渡  
候得共、天下一編之期ニ至候て、即刻 朝廷御不自由不被爲在候様、兼る御心得置候事ニ候、玉體非常警衛も乍密々  
心得居候方ニ候、且夷賊ハ國守之候ニ人命國中悉討死候迄ハ、 神州之風土中へ夷狄之急居決る爲致間敷旨、勇猛之  
憤發仕、仰 朝威可奉報 國恩趣ニ有皆相心得置候、

高松大膳權大夫より早書番封有之、昨廿九日、夜通し御飛脚を以、石川貞四郎より安政迄之交通一同不殘爲差登候事、

〔大膳權大夫高松保實書翰〕

○新案雜  
○所載

○三月二十日 水戸石河貞四郎宛

高松大膳權大夫文通、廿九日、○國事  
○所載

去年十一月廿四日附、并當年正月廿一日出等兩度之貴書、何レも殊の外乍延引無相違相違、忝遂拜見候、當季暖和之  
刻相迎候處、倍 前中納言公御始御機嫌克被爲入恐悅奉賀候、於貴許彌御安全珍重存候、併兎角御眼痛之旨如何、隨  
分御自愛專一ニ存候、誠ニ御歸府後も折々書狀指出申度候得共、晝夜共取込無寸暇、夫故頼と御返書さへ延引ニ相  
成候、然レ兼る御内々御頼御談合申入置候一件共、無御捨置 老公ニ御内奏給候旨、扱々志も相屆候儀と、深々本懷  
忝存候、右内願意共何レも此節天下國家大變ニ相成掛居申候、  
朝廷連も誠ニ去月已來大亂ニ相成、如戰場ニ晝夜取亂申候、尤保實殊ニ此度忠義を顯し、堀田備中願之趣、既ニ不忠  
不義之輩ノ取扱ニ有、御開濟ニ相成候様致り、專御返答御内定ニ相成候所、八十八人忽發憤致し候る、右御返答を  
踏消し、其勢ニ乘し、關白家にも驅込候次第ニ候、尤、

禁裏ハハ毎々馳參候事、不容易大亂ニ付、既ニ老中堀田備中旅宿之本能寺へ向、右忠臣大將ハ、保實等ニ御坐候、帶劍  
各身を固メ馳向及議論候氣色ニ候所、段々議奏方より取宥メニ相成候る、漸事鎮り申候、仍則御返答も御改ニ相成  
申候、先以群臣諫奏之甲斐も有之、御開濟ニハ不相成候事ニ、彌今日堀田ニ御返答ニ相成候、仍るを爲御心得言上  
安政五年三月十二日

八十八人關  
白邸ニ赴ク



安政五年三月十二日

二九〇

公卿へ賄賂

旨、老公に別段直達書を以草々御披露之事、貴公に譯る願入申候、仍る三家方并諸大名赤心之程、今一應被 聞食  
 度、其上奏聞も候ハ、猶又可被遂 聖斷旨、被 仰渡候儀に付、老公累年御深配之場、相至候御所意之程、十分  
 御書取御申上之方可然奉存候、三家方も申るも、實ハ外に頼も無之、老公御一人を御見込申上候事、精々之御  
 趣意御申立、尤御内々御所意之程、以急便當方迄御廻し願入候、左候へハ直に  
 奏聞候事候、實ハ夷賊一件ハ、太閤も甚以不首尾に候間、太閤御間柄に候へ共、御相談不宜方に候、  
 禁中御振合も御坐候事、此度一件に付、何分賄賂を以、堀田・川路兩人共、諸向に手を入候故、不都合之事計出來申  
 候、千兩も落手候哉之方も、兩側共之有之、亦五百兩も有之、誠ニ如何敷事計に御坐候、  
 一京都表諸大名屋敷々々、皆々數千騎何となく上京致し居候趣に候、皆々手配りと存候、  
 一堀田・川路共之道中なる、危難難計由に候、  
 一内裏警衛七口之守護、國守大名七頭可有勤役之事、  
 一三家之中可有御上洛之事、  
 一邪宗門破滅之事、  
 一長崎表改所繪踏可爲如舊格事、  
 一其外數々條下官諫奏氣張居事、  
 一此書狀着次第、草々可有御憤發之事、  
 右 公用之寸暇漸々認候、前後亂候に付御推覽被下、着次第御返答申受置候事、  
 三月廿日 未刻發、  
 水戸公御密臣 石 河 貞 四 郎 殿  
 大目用内密々々

保 實

尙々、何々御音信之印に獻し度候得共、此比誠ニ以大亂に付及省略候、何卒此比御赤心之程ハ、 老公御密々下迄迄  
 御封込御差登を願入候、

奏聞即刻いとし申候之、 九條殿にも御一封御上候へハ、早々御達し可被遊候、上申候之、

(國事記)

〔國事記〕○水戸藩士豊田亮手録  
公府徳川閣所藏本

一 高松大膳殿云々驚入申候、此方にて知らぬ事にて、飛火之憂、扱々油斷不相成候、建白類之内尤之論も相見候へ共、  
 一人大将云々等本氣之論にも無之様、殊に下向云々之命ハ、全虚誕と奉存候、下向云々達る被相願、黄白等に掛り候事  
 有之哉にて、此節禁足被命候よし、極密鶴吉より響有之候由、早書ハ御開封なし、御返しより外ハ無之、何き明日府中  
 御運に可相成と文略仕候、併右様人氣立居、元弘之非を作し、至極大切之場合あんに兼候事ニ御坐候、齒の浮き候有様  
 に御坐候、

幕府、評定所一座・海防掛・大目付及長崎・下田・箱館奉行等二命ジ、日米  
 修好通商條約書板刻ノコトニ就キ、審議セシム。

〔老中達〕○外務省所藏本  
續通信全覽所載

○三月十二日評定所一座等へ

戊午三月十二日、

〔朱書〕伊賀守殿、早川庄次郎を以御下、御目付方廻る、本紙評定所へ廻す、

評定所一座  
海防掛

安政五年三月十二日

二九一

高松保實ハ  
本氣ニ非ズ  
下向ノコト  
モ虚誕



安政五年三月十二日

二九二

大目付  
筒井肥前守  
長崎下田箱館奉行  
御目付  
覺

假條約ヲ板  
刻セントス

亞米利加國之假條約爲取替相濟候ハ、速ニ諸家其外向々ハ、相達候儀有之候處、右ハ冊數も多分ニ可相成、傳寫等之誤を傳播以テ候ルハ、存外之行違等を生シ可申も難計候間、一向ニ刻板被仰付候方ニ可有之哉、左候ハ、條約前後之文ハ相除キ、第一个條カ第十三條迄ニ可然哉、早々評議致シ可被申聞候事、

〔在京〕 奥右筆組頭原彌十郎等書翰〔〇續通信〕

〇三月五日〔在府〕 奥右筆中村又兵衛等宛

戊午三月五日、

亞墨利加國之假條約爲取替相濟候上ハ、速ニ諸家其外ハ御達成候方ニ可有之、然る處、右ハ冊數も多分ニ可相成、傳寫等之誤を傳播致シ候ルハ、存外之行違を生シ可申も難計、因テハ、一向ニ刻板被仰付候方可然、川路左衛門尉・岩瀬肥後守も、同意ニ御座候間、伊賀守殿ハ御申上之上、一座其外例之向々ハ評議ニ御下ケ之方可然、尤條約ハ、前後之文ハ相

除キ、第一个條カ十三個條カニ可然旨、兩人之見込ニ御座候間、此段も御心得、評議相聞候ハ、板下之積を以、清書〔清五郎殿多端ニ候ハ、山下金助カト可然歟、猶御勘考可被成候〕爲御取掛候様御取計可被成候、此段備中守殿ハ申上候上、得其意候、早々以上、

三月五日

立田 錄 助  
原 彌 十 郎

中村 又兵衛様  
早川 庄次郎様  
佐山 八十次郎様  
佐藤 清五郎様

〔老中伺書〕

〔伯耆彌田正恒所藏本〕  
堀田正睦外國摺中書類所載

〇日米假條約刻板調査書

〔表紙〕  
〔朱書〕  
午五月十四日、寫、

亞國假條約刻板之儀志らへ

志らへ

安政五年三月十二日

二九三

日米假條約  
刻板調査書



安政五年三月十二日

二九四

評定所一座ノ意見

亞墨利加國之假條約爲取替相濟候ハ、速ニ諸家其外向々に相達候儀ニ有之候處、右者冊數も多分ニ可相成、傳寫等之誤を傳播致し候ると、在外之行違等生し可申も難計候間、一向ニ刻板被 仰付候方ニ可有之哉、左候ハ、條約前後之文を相除、第一个條より十三个條迄ニ可然哉、評議致し可申間旨相達候處、(上掲)評定所一座評議之趣と、傳寫等之誤を懸念致し、刻板被 仰付候儀ニ候得と、私ニ寫取候と、表向難取用候間、御役人之面々に、一人別ニ相渡し候と勿論、諸家等ニおゐる、其筋ニ携候者共に、悉く不相渡候ると難相成候間、在所おゐる何拾通、江戸ニあるも何程入用と申様相成、其余轉役・代替、又ニ燒失・紛失等之節、杯、都る申立次第不相渡候ると難相成筋ニ付、事簡便ニ候得と、容易ニ數多く願請、永久右之通ニある、際限も無之、且右様相成候得と、必當分ニ翫物同様取扱、遂ニ相互ニ讓受、往來端杯ニ賣買致し候次第も至り、若渡方手重ニ候得と、矢張内々ニ寫取用辨致し、刻板之詮有之間敷、其上傳寫を懸念致し候得と、今般而已ニ限り候筋も無之、品ニ寄下々迄一般爲心得候儀等有之候節と、實々取計方も無之、從來何事も書取ニ無差支濟來候事ニ付、矢張書寫ニ相渡候方可然旨ニ有之、海防懸・大目付・筒井肥前守・長崎奉行・御目付、刻板致し、夫々相渡候方、寫誤等も無之、簡便之儀ニ候得共、此節之場合、刻板等被仰付候ると、世上人口も不穩、諸藩之氣配も相拘り可申候間、當節ニ先見合、彌假條約

海防掛大目付等ノ意見

下田奉行箱館奉行ノ意見

國內一般ニ條約ヲ知悉セシムベシ

調判之期ニ至り、早々刻板被 仰付可然、且條約前後之文相除候儀と、是迄爲取替相濟條約、全文之儘諸向ニ相渡候事故、此度ニ限り、前後之文相除候ると、却る諸家疑惑をも生し可申候間、矢張全文之儘相渡候方可然旨ニ有、下田奉行・箱館奉行と、いづれも刻板被 仰付候方可然旨、夫々別紙(所見ナシ)之通申間候間、猶勘辨仕候處、今度條約爲取替相濟候上ハ、港々に異人多人數入込、商人共引合およひ候儀ニ有、追ると江戸・大坂町々にも、異人逗留致し、ミニストルをも江戸ニ被差置候筈ニ候間、外國人取扱方之規則ニ勿論、商法等之儀、御國內之者共下々ニ至迄、一般心得居不申候ると難相成、殊ニ舊來之御所置御變革之事ニ付、下々ニ至り候ると、たとへ條約之趣心得居候ると、事馴不申内と、行違生間敷と難申儀之處、更ニ不心得者も有之候ると、忽ち行違を生し可申、其上商人共取引等、條約ニ齟齬致し候取計有之節と、混雜ニ勿論、何様之弊可生も難計、右等差繼候節と、大害をも引出し候儀ニ付、何様手數相懸候とも、右條約と下々迄不洩様相示し不申候ると難相成、然るを寫本ニ相渡し、傳寫之誤を傳播致し、右を證據ニ引合およひ候様之儀も有之候ると、猶更行違生し可申、前書之通下々迄相示し候と、向々に數部不相渡候ると、行届不申、其上後年燒失・紛失等之節ニ、渡方相願候ハ、願次第不相渡候ると難相成、數無限事も候間、旁以刻板被 仰付候方ニ可有之、且又條約全文之儘相渡候方可然旨、海防懸評議之趣、尤

安政五年三月十二日

二九五



之儀も有之、是迄條約全文之儘渡し來候儀に付、諸家始役々に相渡候分と、全文之儘に無之候ると不都合に可有之候間、右と全文之儘寫本との相渡、其余御國內一般に相渡候分と、前後之文無之候るも差支無之、且追る本條約爲御取替相成候後に至り候るも、前後之文言無之候得と、其儘用ひにも相成候儀に付、(所見ナシ)旁別冊掛紙之通相除、刻板被 仰付候方に可有御座哉之事、

但、刻板之儀も、蕃書調所に被 仰付、數部摺立置、諸家其外願次第爲相渡候へ、願請候者も、手數不相懸、下々迄行渡り可申、後年焼失・紛失等なる願請候節も、申立次第同所この相渡候事に相成居候へ、差支之儀も有之間敷候間、右之趣に相違候方に可有御座哉之事、

○附 録

〔目付岩瀬忠震伺書〕○堀田正勝外傳 掛中書類所載

○五月老中へ

(表紙)

〔朱書〕

〔五月十一日、寫、〕

岩瀬肥後守 差出候書付

岩 瀬 肥 後 守

刻板ハ蕃書  
調所ニ命ズ  
ベシ

各國條約章  
程ヲ蕃書調  
所藏版トナ  
スノ件

清國・暹羅・歐羅巴・亞米利加等各國條約章程、漢文并翻譯出來候分とも、追々御參考にも可相成哉と、夫是取集所持罷在候處、當今之御時節、右等之書類不心得之もの多く候故、畢竟困陋之議論も起り、人心折合方にも拘り、詰りハ廟堂之御處置をも誹謗奉り候様之風習に相移り、恐入候儀に付、一向に右條約書類、蕃書調所御藏版に以てし、書肆に相渡し、世上に公夢に致し候様相成候へ、人心居り合方之御一廉にも相成可然哉奉存候、左候と、古賀謹一郎(増、蕃書調所頭取)へ、私より相達し、夫々爲取計候様可仕、尤同所御入用金之内を以引替置、追る御拂代を以仕理候様爲取計、別段御出方等相願候儀無之様申談可申と奉存候、依之此段奉伺候、以上、

五月

岩 瀬 肥 後 守

〔佐倉藩記録〕○相傳堀田正勝藏本

五月十八日、

但 馬 守

〔朱書〕  
廿日、同人を以下ル。

一清國其外條約板刻之儀岩瀬肥後守相伺候書付一通、  
右丹波守を以上ル、

蕃書調所頭取古賀謹一郎増○後 筑後守 下田箱館在留米國人ノ提出ニ係ル洋書

購入ノコトニ關シ、箱館奉行堀利熙織部 正ニ通牒ス。

〔蕃書調所頭取古賀謹一郎通達〕○北海道廳所藏本 異船圖書付所載

○三月十二日箱館奉行堀利熙へ

安政五年三月十二日



安政五年三月十二日

〔朱書〕  
午三月十二日、達越ス、

織部正

二九八

河津三郎太郎  
新藤鉛藏  
力石勝之助

箱館奉行衆

古賀謹一郎

下田箱館在  
留米人提出  
ノ洋書購入  
ノ件

下田・箱館表におゐて、亞米利加人より差出候書籍御伺被成候分、爲見改、當調所に相下り候間、別紙寫之通、去巳七月中、備中守殿に相伺候處、御用本に可相成分、蘭書三拾四部ハ御買上、其餘三拾三部ハ、銘々所持いとし不苦段相達御引渡可申旨、被仰渡候間、御手當銀相渡り次第、銘々所持可致書籍共、御引渡可申存候、依之御手當銀仕譯帳共貳冊相添、此段及御達候、

午二月

〔蕃書調所頭取古賀謹一郎伺書〕

○帝國圖書館所藏本  
外國事件書所藏

○安政四年七月二十三日老中堀田正睦へ

〔朱書〕

巳七月二十三日、備中守殿に、清五郎を以上ル、但、雙面三冊添、

同十二月廿二日、右帳面貳冊を御書取添、御同人庄次郎ヲ以御下、同廿四日、八十次郎を頼、庄次郎ヲ以返上、

下田箱館表に於て到來之書籍見改相濟

取調之儀相伺候書付

古賀謹一郎

下田箱館在  
留米人提出  
ノ洋書購入  
ノ件

ポイルレツツ初筆

一三拾四部

三拾五本  
拾九枚

御用本  
可相成分

エレメンテリ

一三拾三部

三拾九本  
四枚

受納御差許  
可相成分

右に、先達中、下田・箱館表に於て、亞墨利加人より到來之書籍、兩所奉行方其都度々々相伺候に付、爲見改御下ケ相成候分、教授出役之ものへ申談、爲見改候處、何れも御國禁筋之儀を勿論、差障等も相見不申、右之内、當今必用之書籍を、御用本に相成候様仕度旨、教授出役之者共申立、實以調所御藏本も未無數之儀に付、右申立之分を、相當之御手當に被下、御用本に被仰付可然哉と、凡直段積り爲致候處、別帳之通御座候間、書面ポイルレツツ初筆三拾四部を、御用本相成候に付、爲御手當銀百枚被下、其餘銘々受納不苦旨被仰渡可然哉奉存候、右申上候通被仰渡候ハ、御用本を直に調所に留置、銘々受納御差許之分を、返上候様可仕候、依之書目帳二冊添、此段奉伺候、以上、

巳七月

安政五年三月十二日

二九九



安政五年三月十二日

三〇〇

○指令

覺

下田・箱館より差出候蘭書三拾四部と、伺之通御用本に仕、三拾三部と、返上不及、銘々所持致し不苦段相達し、下田・箱館奉行に、其方より引渡候様可被致、且又御用相成分と、取調被申聞候通、爲御手當銀九拾八枚被下候間、御勘定奉行相談、右銀請取、夫々に相渡候様可被取計候、尤御用本之内二本出所相分り次第、御手當銀貳枚被下候積、可被心得候事、

本文出所不相分二本之儀と、追る書銘其外得与取調、向々相糺候様取計可申候、尤本文蘭書之儀と、下田・箱館其外より貫受候分差出候品と、一時と蕃書調所に相下ケ候儀故、混雜も致し居候間、御用本其外之儀、達相濟候ハ、自ら相分可申候、

〔箱館奉行通達〕

○異船諸書付所載

○四月蕃書調所頭取古賀謹一郎へ

〔朱書〕

四月廿八日、

蕃書調所におゐて、御買上可被成文法書御下ケ之趣、御願相濟候間、古賀謹一郎へ御挨拶振相伺申候、

織部正

新藤 鉛 藏  
力石 勝 之 助  
富田 類 右 衛 門  
間 宮 鐵 次 郎  
富 永 惣 五 郎

文法書ヲ箱館奉行所ニ下付ノ件

書面之趣致承知候、然ル處、御買上可相成書籍之内、文法書之儀と、箱館表におゐて、通辯稽古之た処、御下ケ之儀申上候處、願之通御下ケ相成候間、貴様に可談旨、伊賀守殿被仰渡候に付、此段挨拶旁及御達候間、御引渡日限御申越有之候様いとし度候、

午四月

○古賀謹一郎回答

御書面御下ケ札之趣致承知候、來ル六日、蕃書調所に於る御引渡可申候、依之此段及御答候、

午五月

棚倉藩主松井康圭周防守書ヲ幕府ニ上リ、本月三日、藩地暴風雨被害ノ状ヲ稟ス。

〔棚倉藩主松井康圭届書〕

○維新史料編纂會所藏本  
伏見宮侍御牧家諸留所藏

安政五年三月十二日

三〇一



棚倉領内暴風被害ノ旨ヲ稟ス

安政五年三月十二日  
午三月十二日、御用番に御届出ル、

在所陸奥國棚倉、去ル三日、曉寅剋比々夜酉剋比迄、暴風大雷なる、城内を始、家來住宅、并城下領分在町共、潰家破損所夥敷有之候趣、家來之者申越候間、猶委細之儀を、追御届可申上旨申來候、

三月十二日

松平周防守

〔飯泉喜内書翰〕

○維新史料編纂會所蔵本  
伏見宮侍御牧家談留所蔵

○三月二十六日齋藤高橋俊壽宛

略、上三月三日を、鹿嶋旅行、二日木下泊る、翌朝船なる下り候積之所、今曉方暴風暴雨大荒れなる、如何とも致し難く、逗留成候所、四ツ比々大雷と成候、晝後ハ又雨こふり、終日静り不申体候、夜こ入五ツ比こも候哉静り、翌朝を富士多何きつ上よも白く成り、秩父山・日光山・筑波山眞白こ成り候事こ御座候、右何きも二十里已上之処こ御座候、然ルに、上二摺別紙こ有之候通、奥州棚倉大荒れなる、潰家・破損等有之候趣、左それる、中々大荒りふる事なる、只事ならはと相聞申候、

三月廿六日

(飯泉喜内書翰)

風

艸

拜

(齋藤高橋氏御筆大願堂)  
不爭御主人

札下

〔水戸大高六郎衛門日記帳〕

○維新史料編纂會所蔵本

三月三日、

四十度

宵より雨風強、北の嵐、四ツ過より雨風いよつよ、夕方少し静くなり、夜六ツ半時々夜明迄、古今大風雨、大嵐なり、

一昨年秋の荒しも格別違無之との大風雨之、

中川壹丈五六尺水まゝ、舟留、

四日、

雨明七ツ時止、北風五ツ時迄つよ、折々照立、時々落し風吹、夜中晴天、四ツ過地震、

筑波邊山々雪見ゆる、笠間邊雪降、○中

六日、

朝より薄くもり、○中

三日之雨嵐よて、今日杯も青柳・中河内邊歩行渡り計よて舟留、○中

十五日、

朝もやふる、曇、さむい、九ツ過より快晴、

安政五年三月十二日

三〇三

水戸地方大風雨



平潟灣二難  
破船アリ

安政五年三月十二日

三〇四

當三日嵐こ、平潟入海こゑ、

仙臺様御船千五百石積貳艘、千貳百石積貳艘、九百石積壹艘、玄米壹万石余難船、死人四十七人、六人平潟へ存命こゑ上ル、

公邊御船、先進丸三百石積位之御船、是も平潟入海こ大いここのよ、尤も米ハ積不申、板を積候よ、石名坂より奥州口ハ別ゑ大荒のよこゑ、大木根返り、中折、數不知、家上大破在之、數不知と申事、

蘭國領事「クルチウス」Curtius 蕃書調所ニ米國總領事「ハリス」Harrisヲ訪

フ。十七日、マ

タ同ッ。

〔長崎奉行岡部長常下田奉行井上清直伺書〕

○長崎縣廳所藏本  
和蘭領事官參府御用留所藏

○三月七日老中へ

和蘭甲比丹出府仕候上亞米利加使節与

雙方尋問之儀こ付奉伺候書付

岡部 駿河守  
井上 信濃守

和蘭甲比丹道中差支無之候ハ、明後九日頃江戸着可相成哉、左候ハ、亞米利加使節滯

蘭國領事米  
國總領事雙  
方訪問ノ件

府中こ付、必雙方共旅館に尋問往來も可仕哉と奉存候、右と差留候次第こも至兼候間、願出候ハ、承届候様可仕哉、出府掛に申談候處、存寄無之趣こ付、此段奉伺候、以上、

午三月

○指令

覺

伺之通、可被取計候事、

〔蘭國領事參府掛大目付土岐賴旨等上申書〕

○伯耆縣田正植所藏本  
堀田正睦外國掛中書類所藏

○三月十二日老中へ

和蘭領事官并筆者蘭人共、今十二日晝九時々蕃書調所亞墨利加官吏方に罷越度旨申立候こ付、道筋之儀考、昨十一日、亞墨利加通辯官眞福寺に罷越候通、通行爲致申候、尤爲取締役々附添罷越候、依之別紙道筋書相添、此段申上候、以上、

三月十二日

土岐 丹波守 (賴旨、大目付)  
土岐 攝津守 (豐岡、勘定奉行)  
永井 玄蕃頭 (勘定、勘定奉行)  
鶯殿 民部少輔 (長崎、目付)

蘭國領事米  
國總領事訪  
問道筋ノ件

安政五年三月十二日

三〇五



安政五年三月十二日

三〇六

岡部 駿(長常、長崎奉行)  
河守  
塚越 藤助(元形、勘定吟味役)

○別紙

道筋書付

真福寺を新し橋を渡り、真田信濃守屋敷前脇通、西尾隱岐守脇前通、霞う關松平美濃守前脇通、井伊掃部頭屋敷後を御堀端通、田安御門前九段坂下り、蕃書調所、

〔代官〕竹垣直道日記○維新史料編纂會所藏本

三月十二日、晴、時々雨、

一 中山半吾々、蘭人之義申來ル、

一 四半時出宅、蕃書調所に相越、詰合善四郎・新五太郎、○九半時比、和蘭領事官并書記役

兩人來、亞人面會有之、○善四郎會所御賄席与席替之義談置、○九半時過退散、

〔飯泉喜内書翰〕○維新史料編纂會所藏本 伏見宮侍御牧家諸留所藏

○三月二十六日○調夫家高橋俊壽宛

○上略、十二日こそ、領事官、亞人之旅宿蕃書調所に參候由、駕籠を釣らせ步行候所、衣装等立派なる、是も見物人群集いゝ候趣御座候、○中

蘭國領事蕃書調所ニ「ハリス」ヲ訪フ

三月廿六日

風 艸 拜

不爭 御主人

机下

〔蘭國領事參府掛大目付土岐賴旨等上申書〕○堀田正睦外國書中書類所載

○三月十七日老中へ

和蘭領事官并筆者蘭人共、今十七日九ツ半時頃より、蕃書調所亞墨利加官吏方に、罷越度旨申立候之付、通筋之儀考、去ル十二日、同所に相越候通、通行爲致申候、尤爲取締役々附添罷越候、依之此段申上候、以上、

午三月十七日

土岐 丹波 守  
土岐 攝津 守  
永井 玄蕃 頭  
鵜殿 民部 少輔  
岡部 駿河 守  
塚越 藤 助

十三日己丑 太宰帥熾仁親王有栖川宮 外交拒絶ノ意見ヲ上ル。

安政五年三月十三日

三〇七

蘭國領事再ビ「ハリス」ヲ訪フ



安政五年三月十三日

熾仁親王建議書

熾仁親王  
行實所載

三月十三日、廣橋前大納言殿へ、以御封書被差出、宮日有橋川

今般亞夷一條、從關東言上相成、即今朝堂之儀ニ不預候得共、藩屏ノ末ヲ辱ウシテ、國家ノ大事ヲ不忍坐視、不顧恐、言上仕候事、

幕吏合衆國ノ虚喝ニ恐レ條約ヲ奏請ス

頻年、醜夷東海ニ濫入シ、誘フニ交易ノ道ヲ以テシ、次ニハ、合衆國トノ和親ヲ勸ム、聊カニテモ其請フ所ヲ拒ム時ハ、羣夷連結シ、大砲・軍艦ヲ以テ來リ侵サント云フニ誑惑セラレ、無智ノ屬吏共、利慾ニ眼闇ミ、虚喝ニ戰慄シ、皇國ノ大恥辱タルニ心付カズ、辟易・逡巡スルニ乗ジ、終ニ登營シテ謁見シ、數條ノ盟約ヲ申シ請フ、中ニモ、彼ガ甲幹ヲ日本地數ヶ處ニ在留セシメ、恣ニ横行シテ邪宗ノ制禁ヲ毀ツ等ノ數件、全ク彼ガ奸謀ニ陥リ、事、終ニ天聽ニ達シ、衆議ヲ建白シ、宸襟ヲ惱マスニ至ル、恐懼千萬、最モ不便ノ至也、抑モ、弘安・文永ノ兩度ハ、武夫共、戰爭ニ心ヲ盡シ、防禦數度ニ及ビ、神明ノ威風ヲ以テ西海ニ沈滅セシメ了ル、中ゴロ、將軍家、天下ニ命令シ、西洋ノ邪宗ハ嚴ニ禁遏セリ、今條約ヲ結ベバ、邪毒ノ病、將ニ膏肓ニ入ラントス、コレヲ拒絶スルニ非ズンバ、蕩蕩タル神國、永ク彼ガ屬下トナリ、清潔タル國土ヲ醒臭ノ穢地ト爲サンコト、鏡ニ掛ケテ見ルガ如シ、且ツ蹈繪ノ法ヲ撤スル時ハ、邪宗門、大ニ流行シ、皇國古來ノ神道ヲ廢セラレ、人倫ノ道ヲ棄テシ、國內

勅ヲ幕府ニ下シ外夷ヲ征スベシ

ノ人心、日ニ離畔シ、神怒リ、人怨ミ、天變・地妖、交モ臻ルト雖モ、屬吏等、魂魄ヲ奪ハレ、醜夷ニ信服シテ邪毒ヲ流布シ、皇國ヲ汚スコト、實ニ國ノ蠱賊、憎ムベキノ大ナル者ナリ、若シ醜夷ノ應接ニ拘ハル者共ヲ黜ケ、外寇ヲ拒擊セズンバ、西戎・北狄、漸漸ニ蟻附シ、皇國ノ膏腴ヲ啜ヒ盡シ、犬羊ト部伍ヲ爲シ、士民塗炭ニ苦マンコト、歎クベク、憂フベシ、仰ギ願ハクハ、一刻モ早ク、勅ヲ征夷府ニ賜ウテ、外賊ヲ征伐シ、四海ヲシテ無事ナラシメンコトヲ、地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ、速ニ、干城ノ諸藩ニ勅旨ヲ布告セシメ、士民心ヲ一致ニシ、努力嚴戒シテ、天威ヲ萬國ニ照耀シ、永世不易ノ洪基ヲ保護セシメンコトヲ願ヒ奉ル、

熾仁謹言、

三月十三日

(有栖川宮日記)

熾仁親王書翰

熾仁親王  
行實所載

○三月十三日武家傳奏廣橋光成等宛

今般亞夷一條、不容易事ト存候、過日ハ、條約書令一覽候ニ付、愚意千萬ニ候得共、令言上度候、乃差出候間、此段宜御沙汰頼存候也、

三月十三日

廣橋前大納言殿

熾 仁

安政五年三月十三日

亞夷一條ニ就キ意見書ヲ上ル



東坊城前大納言殿

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕

○伯耆橋本實顯所藏本

三月十日、丙戌、晴、午後參帥宮、墨夷一件ニ付、被建白之由にて、今ニ延引之間、愚意申述了、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國大學所藏本

二月廿八日、甲戌、晴、辰斜參内從帥宮依示給之、之処、内々被尋度儀有之由ニ而、於御拜道廊下令面會之処、今度墨夷條約之儀、世上風説不容易儀ニ候エ共、政事無御構事故、睨与御承知無之間被承度由之、依之條約書被爲見下、各所意御尋之趣等件々申入候処、被爲惱 叡慮之段、深御恐懼之趣、御尤事候得共、從予條約書入覽候而者不立表候間、議卿建通卿及示談候処、至極御尤之儀、可然被取計旨被答、小時從武傳被相廻候様被取計旨ニ付、其由申入了、直退出、○中略

三月十日、丙戌、晴、午後參帥宮、申入有子細、墨夷一件、

〔九條家記錄〕

○東京帝國大學所藏本

二月廿九日、

一東坊城前大納言殿

帥宮ニ意見ヲ陳ズ

昨日、帥宮様御參 内ニ有、亞墨利加一條之書付、御拜見被遊度旨被仰候ニ付、入御覽候哉、如何取計仕候哉、 思召被相伺候事、

御返答、

御時宜御窺之上、御取計ニ相成候様、被 仰入候事、

○参考

〔熾仁親王行實〕

○正睦上洛以來、朝紳の騷擾甚しきに因り、親王は痛く之を憂慮し、前月二十八日、（三思） 態度、橋本實麗（實麗ノ謬）に御所内なる御拜道廊下に於て面會し、乞うて通商條約書案を一覽し、種種尋問の上、後刻、同案を武家傳奏より回送せしめ、三月十日、（實麗ノ謬） 實梁參殿せしに因りて、刻下の狀況を聴取し、十二日、更に公卿列參の事を聞知せられて、憂國の念、愈々禁せず、當時の制、皇族は、朝議に參與するを得ざりしかども、親王は、侍臣中に於て最も信任せられし諸大夫豊島泰盛、竝に家來無席飯田忠彦と謀り、自ら一通の建白書を認めて翌十三日、武家傳奏前大納言廣橋胤保（胤保ノ謬）に呈出せられたり、

非藏人鴨脚相模等三十六人、連署シテ外交措置幕府委任ノ不可ナルヲ述べ、勅裁案ノ字句ヲ刪改センコトヲ請フ。明日、非藏人松尾出雲等十九人、マタ連署シテ同ジク之ヲ申ス。

〔非藏人鴨脚相模等願書〕

○維新史料編纂會所藏本 伏見宮侍御牧家贈留所藏

○三月十三日關白九條尙忠等へ



安政五年三月十三日

三月十三日、非藏人鳴脚相模以下歎願書、○伏見宮侍 御牧家認留

三月十三日、非藏人共歎願口上之覺、○平安成 午記事

内々奉歎願口上覺

外交措置ハ  
列侯ノ意見  
ヲ徴セラル  
ベシ

勅答案文ノ  
刪改ヲ請フ

鳴脚相模等

墨夷申立之儀、不容易儀ニ付、段々 公武御僉儀被爲在、此節御決答爲可被爲 在哉之風  
聞承知仕候ニ付、微々之私共猥ニ申上候儀、何共恐懼多罪之至奉存候得共、不堪憂苦  
候間、不願前後敢言上仕候、抑人心居合之儀、關東ニ御引請之趣ニ付、御安心被遊候与  
之御事、乍恐何共不審之至ニ奉存候間、何卒今度關東へ御決答之儀、從來之御制度御變革  
難被遊、且人心之居合方之儀、列侯之赤心被 聞食度儀、百方被 仰立度ニ奉存候、實ニ此  
度關東如御申立、御許容ニ相成候、乍恐  
皇國開闢已來之御武威、今度萎靡仕候得、異日若蕃夷上陸亂暴仕候節、勤 王事候武士  
等羨無之樣成行候へハ、此上之御大事ニ奉存上候間、何卒今度御決答御文面之内、御安心  
之三字、最末、此上ニ於關東可有御勘考樣御頼被遊候事ト之壹句、乍恐甚以歎ケ敷奉存上  
候間、此等之御文言御省被爲 在候樣、内々奉歎願候、此段宜敷御取成之程偏奉願上候、  
以上、

三月十三日

鳴脚相模

三十六人連  
署上書ス

泉 因幡  
吉 越前  
小 薩摩  
松 備後  
松 攝津  
松 大隅  
鴨 甲斐  
松 豐後  
橋 越後  
藤 山崎  
橋 安藝  
波 美濃  
松 阿波  
松 丹波  
鳴脚 大和

安政五年三月十三日



安政五年三月十三日

吉田 鴨脚 和泉 壹岐  
藤嶋 紀伊 伊勢 中  
祓川 備中 勢  
鴨脚 加賀 日向 馬  
松室 松尾 但馬 相水  
松尾 伊伯 伊豫 耆  
松室 出羽 羽  
中川 對馬 馬  
松室 常陸 陸  
吉田 遠江 江  
吉見 三河

三一四

松室 信濃  
中津 瀨紀伊  
安田 美作  
鴨脚 出雲  
泉亭 下野

右之通、

關白殿、武家傳奏廣福家、東坊城家、議奏第一久我家、非藏人奉行日野家、等、差出候事、○伏見宮傳、

昨夜願之御文面之々所被除候間、可致安心之旨、奉行西洞院殿被申渡候事、三月十四日朝、○平安夜、午記事

(平安夜午記事)

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

三月十三日、己丑、晴、當番議奏加勢中山大納言殿、(忠能)其外參集、久我殿、坊城殿不參、傳奏衆參侍、東坊城殿不參、

一關白殿・左大臣殿・内大臣殿等御參、  
一此度墨夷申立一條、自 關東、

叡慮御伺、此頃 御決答可被爲在御模樣、御文意之内、如何敷御文意茂可被爲在由、風聞有之、既昨十二日、堂上方三番所共數拾人、文意被改度、懇願有之、於同列共茂、過日已

安政五年三月十三日

三一五



安政五年三月十三日

非藏人連署  
上書シテ勅  
答案文ヲ改  
メンコトヲ  
請フ

來、何トカ及歎願度輩、數輩相見之處、昨日、堂上被及歎願由相聞、依之同列御近邊同意懇願之輩、先兩奉行衆日野殿、西洞院殿、傳奏第一廣橋殿、議奏第一久我殿、關白殿等江、同意一同同伴、趣意書取、内々令歎願之處御落手、關白殿者、依深更諸大夫芝相模守預置、明朝可言上由之間、早朝御答可相伺申答、翌早朝、正登・義邦等兩人相伺之處、慥ニ御落手之旨、諸大夫相答、

〔非藏人松尾出雲等願書〕

○伏見宮侍御牧家諸所願

○三月十四日關白九條尙忠等へ

翌十四日、非藏人松尾出雲以下差出願書、

内々奉歎願口上之覺

墨夷之儀ニ付、不容易御願、昨日、同列共不願恐願出候旨承知仕候、何卒於私共淺、不願恐同様歎願仕候間、乍恐此段偏ニ宜奉願上候、以上、

三月十四日

松尾出雲等  
十九人連署  
上書ス

松尾出雲  
松室河内  
大西伊豆  
松本近江  
鳥居南讚岐

三一六

〔非藏人日記 乾〕

○東京帝國大學所藏本

安政五年三月十三日

大西因幡  
岩橋佐渡  
松室上野  
松尾豐前  
松室石見  
大西丹波  
富田伊豆  
祓川武藏  
羽倉越中  
小野伊豫  
森野志摩  
松室筑後  
松室隱岐  
羽倉肥前

三一七



三月十四日、庚寅、雨、當番議 奏加勢正親町三條中納言殿、其外參集、久我殿、坊城殿等不參、傳奏衆參侍、東坊城殿不參、

昨日連署ニ洩レシ非藏人等上書ス

一關白殿・左大臣殿・右大臣殿・座主宮・內大臣殿・左大將殿・二條大納言殿等御參、  
一同列昨夜歎願之儀、遠方之輩及聞、今朝出頭、同意書附、如昨夜持參、御落手也、昨今申立書委願書留、且御返答書同斷、

〔德大寺公純日記〕

○臨時帝室編修局所藏本

三月十四日、晴、

一久我以狀、非藏人々夷船一件ニ付申立書被差越了、參 朝殿下申入了、(備前九條御患)

非藏人等夷船一件ニ就キ上書ス

一非藏人奉行左兵衛督被示、異船一件非藏人一同申立旨被示、奉行・殿下・兩役等へ差出旨被示了、

一番頭越前、同上申出了、(吉見正意)

〔六角博通雜記〕

○子爵東園基實所藏本

三月十三日、晴、○中略、

後聞、

今日非藏人ヨリも願差出与、遠方之分ハ、明十四日之由、都合一同之与、

〔長谷家記〕

○孝明天皇紀所載

三月十四日、今曉非藏人各申合、今度關東へ御返答之一件及歎願、一紙夫々差出之趣、西洞院入來、噂有之、彼卿奉行、書附一覽之處、大率同様也、人數凡三十六人云々、

米國總領事「ハリス」Harris 下田奉行井上清直信濃守ヲ其邸ニ訪フ。

〔米使出府取扱掛目付鶴殿長銳通達〕

○帝國圖書館所藏本 外國事件書所載

○三月十二日町奉行跡部良弼等へ

〔朱書〕 午三月十二日、向方寫取、本紙差越、

跡部 甲斐守殿

鶴殿 民部少輔

伊澤 美作守殿

明十三日、亞墨利加使節、井上信濃守宅に罷越候ニ付、定例之通御心得可被成候、依之別紙道書相添、此段御達申候、以上、

三月十二日

鶴殿 民部少輔

跡部 甲斐守殿

伊澤 美作守殿

「ハリス」井上清直訪問ノ件



安政五年三月十三日

三二〇

○別紙

亞墨利加使節井上信濃守宅に罷越候道筋

蕃書調所々、九段坂ヲ上り、三番町通り、堀田攝津守屋敷脇前、伴權左衛門屋敷角々、表六番町通り、伊勢守松屋敷角々、左に井上信濃宅へ、

〔町奉行伊澤政義通達〕

○外國事  
作書所殿

○三月十二日同役跡部良弼へ

〔朱書〕  
午三月十二日、向方へ遣し、

甲 斐 守 殿

伊 澤 美 作 守

亞墨利加使節并通辯官とも、明十三日、井上信濃守宅に罷越候旨、達書御廻有之致承知候、然ル處、通行道筋町家無之候間、飯田町町役人に取締申渡、別段町觸差出不申候、尤出役勤方等之義を、參府掛與力共々、御組頭役に申談取計候様、是又申渡候、此段及御達候、

三月十二日

〔町奉行伊澤政義問合書〕

○外國事  
作書所殿

○三月十二日米使出府取扱掛へ

「ハリス」井上清直訪問ノ件

〔朱書〕  
午三月十二日、井上信濃守宅へ達候處、翌朝下ケ札付さし越し、

土岐丹波守殿
筒井肥前守殿
土岐攝津守殿
永井玄蕃頭殿
鶴殿民部少輔殿
井上信濃守殿
塚越藤助殿

伊 澤 美 作 守

「ハリス」井上清直訪問ノ件

亞墨利加使節・通辯官共、明十三日、信濃守殿御宅に、爲年始相越候由、御支配向方内達有之候旨、組之者々申聞候、右を、如例夫々取締向等申渡候間、早々道書御達有之候様いし度、且明後十四日、猶又丹波守殿御宅に、同様相越、引續同十五日、和蘭人旅宿眞福寺に相越候哉之内沙汰有之よしを致承知候、彌右之通相違無之候ハ、是又道筋等取極次第、早々御達有之候様いし度、何分差掛り候を、夫々取締向等申渡方行届兼、甚々差支候間、以後共可成丈々前廣御達之積り、兼る御心得被置候様致度存候、此段御承知旁及御問合候、

安政五年三月十三日

三二一



安政五年三月十三日

三月十二日

下田奉行井上清直挨拶

御書面之趣承知いとし候、被御申聞候道書之義也、御目付方より取調候間、蕃書調所詰合之右支配向に申談、明十三日、使節拙宅へ罷越候道書、別紙壹通差進之候、且明後十四日、和蘭領事官宿寺へ、爲訊問、使節罷越候旨、申立有之候得共、土岐丹波守方へ罷越候日限も、未治定不致儀之有之、取極候ハ、早々可及御達候、差向候儀之付、御書面之趣も、丹波守其外へ觸廻之積、拙者方及御答候、

三月十三日

井上信濃守

〔采使出府取扱掛大目付土岐頼旨等上申書〕

○伯耆堀田正恒所藏本 堀田正睦外國掛中書類所載

○三月十三日老中へ

三月十三日、

亞墨利加使節井上信濃守宅に罷越候道筋

蕃書調所より、九段坂を上り、三番町通り、堀田攝津守屋敷脇前、伴權左衛門屋敷角より、表六番町通り、伊勢守松屋敷角より、左に井上信濃守宅、右之通相心得申候、此段申上候、以上、

「ハリス」井上清直訪問ノ道筋

三月

土岐丹波守

筒井肥前守

永井玄蕃頭

鶴殿民部少輔

井上信濃守

塚越藤助

〔高麗環雜記〕

○東京帝國大學所藏本

三月十三日、○中略、

一 亞人、下田奉行井上信濃守番町屋敷に行、

浄土宗寺院總代歸命院輝譽・安養院戒譽等、連署シテ書ヲ知恩院宮宮隆ニ上リ、日米條約調印ノ拒絶・邪教取締ノ勵行ヲ、速ニ朝廷ニ歎訴アラントトテ請フ。

〔浄土宗寺院總代歸命院輝譽等願書〕

○伯耆堀田正恒所藏本 建白書所載

○三月十三日知恩院重役へ

午三月十三日、知恩院方丈方、

安政五年三月十三日

三二三

三二二



安政五年三月十三日

乍恐以書付奉歎願候、

昨十二日、堂上方御多勢、

異人邪宗ヲ  
弘メ日本ヲ  
奪取セント  
ス  
條約締結ヲ  
拒絶スベシ  
速ニ朝廷ニ  
歎訴ヲ請フ

禁中、殿下御方様に、御列參之御様子致見聞候、右に、關東表方御申立之儀、趣意通り御聞濟之為可相成哉之付、御歎訴之由風聞承り、一同歎願仕候譯者、古來之傳達に、異國人共、本朝に好身相結候上と、追々切支丹耶蘇等之宗門相弘メ、上下万民、令歸依候謀計を以、終に此日本國奪取迄急ぎ、表向交易願立候邪心之付、古來御免之外に、右躰無之様、容易に御取用無御座候と勿論、宗門改、毎年嚴格被仰付、各寺方年々御請合書、奉差上來り候廉に、申上候迄無御座、何卒古格之通、此上邪法不弘様を御運ひ方、一同奉懇願候、此段於（陸奥）宮御方者、如何被思召候哉、皇國万代、正法興隆之御配慮、即御國恩報之儀之付、無御猶豫、御忠誠之御歎訴有御座可然筋と、一同奉懇願候、差掛候儀之付、一宗諸寺院惣代として奉願上候、以上、

午三月十三日

淨土宗寺院惣代

歸命院 輝 譽印

安養院 戒 譽印

正定院 等 譽印

稱名院 禪 譽印  
淨教院 淦 譽印  
護念院 光 譽印  
信行院 念 譽印

御（淨土宗知恩院）殿

御重役中

（如是我聞）

十四日庚寅侍從岩倉具視、時務策神州萬歲策ヲ内奏ス。

〔侍從岩倉具視上表〕○岩倉具視關係文書所載

○三月十四日内奏

外交問題ハ  
國家ノ重大  
事  
別紙一帖ヲ  
綴覽ニ供ス

臣具視、惶恐謹る奉言上候、勅答御文案之儀之付、臣等列參諫奏之處、從殿下（御旨九條御也）、不無理趣意に思召候旨、奉蒙仰、過分之御詞、不堪感激之至候、抑此度之一件、國家之重事者申迄淺無之、御處置振之如何に據り、御國威宣揚之機會とも相成可申、朝議御治定者、誠以御大事之場合と乍恐奉存候、於群臣、抽國忠被預御廟算候之付、萬々御失錯者不被爲在御事与安心仕候得共、時日遷延仕候者、禍患百出之事淺可有之歟与奉存候、速に御英斷を以て、御返答被仰出度、乍恐奉渴仰候、臣具視憂慮之餘、別紙一帖、愚論申述、其末尾に戲言を附録、奉

安政五年三月十四日

三二五

三二四



安政五年三月十四日

三二六

汚叡覽候儀者、奉恐入候得共、芹曝之微衷、被爲垂天憐、賜乙夜之御覽候ハ、臣ク一生之大幸候、不顧出位之罪、奉冒天威、不堪戰慄之至候、臣具視、惶恐謹上、

〔神州萬歲堅策〕

○岩倉具親  
係文書所載

神州萬歲堅策

- 第一 和親不可然之事 附リ七ヶ條
- 第二 徳川家長久可被 思召之事 同
- 第三 國內一致防禦之事 同
- 第四 皇都警衛并江府大坂等之事 同
- 第五 國寶融通之事 同

叡慮拔仰き奉りて、

かくてこ終天津日つきの高みくら

うおれたのら免萬代までに

列參乃おゝ海を、

くに茂思ふ君よむのれて梓弓

石龜

八十氏むせもかくして終あせ

同

外國ト和親  
スベカラズ

第一、和親不可然之事、

墨夷之一條、古今未曾有ノ大事ニ候、若シ仮條約ノ如ク於被許者、神代ノ間ハ云ハス、神武帝ヨリ幾千年ノ間、堂々タル神武ノ 皇國獨立ノ規則、當 御代ニシテ一時ニ廢毀セラレ、遂ニ異邦ノ屬ト成シ、誠ニ恐懼悲歎ノ至ニ候、抑於天地間、日ヨリ尊キハナシ、人ヲ初メ萬物ノ生育、ミナ日光ノ惠ナラズト云ナシ、

日本紀ニ云、伊弉諾尊・伊弉册尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是共生日神、號大日靈貴、此子光華明彩、照徹於六合之内、故二神喜曰、吾息雖多、未有若此靈異之兒、不宜久留此國、自當早送天授以天上之事、是時天地相去未遠、故以天柱攀於天上也、

然レハ、日ハ 皇國ノ祖先、皇太神宮ニマシマシテ、日嗣ノ 皇統世々絶スシテ、益盛シ成ル事、仰テモ猶余リアリ、萬國ミナ、此國ノ祖神ノ恩澤ヲ蒙ラサルナシ、又火食ニ至テモ、火ノ淨穢ヲ擇ハル、事、曾テ他邦ニ不聞所也、思フニ、是大世界ニ、獨リ日本ト稱シ、最尊セラル、ノ謂ニ非スヤ、依テ若シ和親同盟等於許容者、天孫神聖清淨ノ

清淨ノ神洲  
ヲ醜廢ノ城  
ト爲スヲ得  
メ

安政五年三月十四日

三二七



神州、醜虜犬羊糞土ノ域ト接シ、血ヲ飲ミ、毛ヲ茹フノ輩ニ伍ヲナシ候事、大小ノ神祇、世々之 聖主江被爲對候テノ儀ハ勿論、弘安ノ先 皇江如何可有之哉、 皇天ノ惡ミ、神明ノ罰、何レニヨランヤ、恐懼スルニ暇アラス、且當時世界ノ形勢變革ノ説ハ、墨夷ノ辯論ニシテ、古昔ノ良法ヲ廢棄ナサシメ計ナランカ、深ク信用スル時ハ、災害并ニ起ルベシ、且邪正ノ理、古今貫徹之事、ナンソ形勢變革ニ依ンヤ、彌古來制度ノ通り被爲守候事、 朝家安全、武運長久、天下泰平ト奉存候、

墨夷ノ辯論  
ハ信ズベカ  
ラズ

一右本文ニ付、墨夷仮條約ノ如ク、一ト度許サル、ニ於テハ、諸蕃追々ニ來集シテ、同様願ヘシ、其節ニ至リ、彼ヲ許シ、是ヲ不許ノ理ナシ、再ビ議論ヲ待ス、各可被許容乎、然ル時ハ、處々ニ開港、商館ヲ立、終ニ萬虜商船旅泊ノ國ト成ン、然ル時ハ、 神州ノ貴キモ貴シトスルニ足ラス、誠ニ口惜カラスヤ、是和親不可然其一也、

一右墨夷願ノ通り相成リ、衆夷追々被許容候砌ハ、吾小國開港ノ地モ乏シク、且諸蕃ノ大國大衆ヲ引受、何ヲ以テ交易ニ當ランヤ、五穀ヲ初メ、國產必用ノ諸品、 神州ニ足シメ、余分ヲ以テ取賄ンニ於テ者、十二一ニモ不可足、不奪不壓ノ夷情、猶飽キ足ラシメンニハ、國民年々困乏ニ至リ、誰カ墨夷ノタメニ是ヲ可忍哉、終ニ憤怒ノ餘リ、是非ノ論ナク、自ラ兵端ヲ開クニ至ラン事必セリ、是和親不可然其二也、

諸蕃ニ交易  
ヲ許サバ國  
產不足遂ニ  
戰トナラン

舶來品ニハ  
有益品少シ

一右墨夷ヲ始、諸夷都而彼ヨリ渡來ノ諸品、多クハ奇翫弄具ニシテ、有益ノ物稀ナリ、唯繻織而已、寒ヲ禦クノ一助ト成ヘシ、トケイヲ嘗メ、オルゴルヲ食ヒテ、命ヲ續クノ術ハ不可有、是和親不可然其三也、

一右墨夷仮條約ノ内、殊ニ難許ハ、數ヶ所ノ開港ト、十里ノ横行ト、踏繪ノ國禁ヲ除ク等ノ三事也、其故ハ、國民近年大ニ窮セリ、然ルニ、夷人姦謀ヲ回ラシ、些ノ恩ヲ施シ與エ、些ノ利ヲ加ヘ、邪法ヲ以テ之ヲ誘ヒ、之ヲ惑ス時ハ、姦商・頑民之レニ從フ事、水ノ下ニツクカ如クナラン、如此時ハ、第一民心ヲ得、第二地利ヲ知り、第三要地ニヨリ海陸力ヲ合セ、内外ヨリ戰爭ヲ發セハ、防禦術ナク、危キ事はヨリ甚キナカラン、是和親不可然其四也、

條約ヲ許サ  
バ民心利ニ  
就キ戰敗レ  
ン

墨夷打拂ノ  
機會ヲ失ス

一右墨夷可打拂機會ヲ失セシハ、嘉永年中初度渡來ノ時乎、其節四方諸國ノ諸士、生テ再ヒ本國ニ歸ルノ心ナク、身ヲ捨テ、家ヲ棄テ、死ヲ決シテ、關東ニ出タリ、就中俊傑ノ士ハ、道中威ヲホシイマ、ニシテ、宿々大ニ恐縮ス、已ニ尾州領ニシテ、炮ヲ放チ獵シ、相州ノ關所ニシテ、夜推テ之ヲ越ス、右等ハ亂妨ノ形ト雖モ、皆死地ニ入ノ人、不顧小事所カ、然ルニ、浦賀・下田等ノ所置、案ニ齟齬シテ、如斯ノ勇士モ、其志望ヲ失ヒ、其銳氣已ニ挫ケリ、故ニ諸大名、當時奮激スル意ナキ歟、猶 朝廷ノ詔令ヲ相待ン



安政五年三月十四日

三三〇

墨夷ノ和親  
セバ志氣沮  
喪セン

墨夷ノ海路  
遮斷ニ備ヘ  
糧食自給ノ  
途ヲ講ズベ  
シ

墨夷トノ談  
判ヲ延期シ  
軍備ヲ整フ  
ベシ

歟、併ナカラ、猶士農工商、其男子ハ勿論、婦女嬰兒ニ至リ、虚實ヲ不論、唯々ケトウジ  
ント而已今ニノ、シリ、偏ニ仇敵ノ如ク思フ、是則 神武ノ風習ノ然ラシムル處ナラ  
ン、若シ一ト度和親タランニハ、此風習モ失フヘシ、然レハ、則終ニ嚙臍ノ患ヒ、如何  
トモスヘカラス、是和親不可然其五也、

一又墨夷不可和親ト雖モ、唯患フルノ儀アリ、海上漕運ノ要路ヲ隔斷スルノ一事ナリ、  
吾國各其産スル所ノ物、互ニ船漕シテ今日用度ヲ相辨シ候、然ルニ、彼僅一二艘ノ軍  
艦ヲシテ、四方ノ要路ニ置キ、中ニモ兵糧ノ舟ヲ遮リ、或ハ奪ヒカスメハ、軍中糧食窮  
乏セン、夫レ人ノ天トスル處ノモノ乏キハ、誠ニ如何ントスヘキナシ、陸運スヘキモ、  
遠路ナレハ、車裂牛斃モ不少、誠ニ智者モ智ヲ施ス所ナカランカ、唯土着屯田ヲナスノ  
外ナカラン乎、能々遠慮有ヘキ義ト存候、

一次又、墨夷下田條約ニ引戻シ承服候ハ、穩ニ有ヘク候ヘモ、若シ忽チ戰爭ニ及ヒ候  
ハ、只今ノ處如何可有哉、甚心配ノ義ニ候、乍併前後申上ルノ邊、夫々法則ヲ立ラ  
レ、海防ノ御所置コレアリ候ハ、大小名共ニ狼狽ハ不可致、御安心ト奉存候得共、又  
々思フニ、辨舌ヲ以テ彼ヲスカシ、今一二年ヲ延シ、而テ内武備ヲ嚴整ニシ、外守禦ノ  
計策ヲ建テ、三五年ノ兵糧ヲタクワエンニハシカシトモ存候、此計略ハ、偏ニ使節ハ

使節應接ノ  
辭

ルリスノ應接ニアルヘシ、其義先ツ柔言ニシテ、信義ヲ以テスヘシ、假令ハ、

〔朱卷〕使節應接ノ辭、今度朝廷江伺之處、合衆國ノ統領、格別ノ懇志ヲ以テ、巨細ニ申上之  
旨、深ク御満足候、世界ノ形勢一變ノ上ハ、如何ニモ吾國數千年ノ規則ト雖モ又可改、  
但シ大變革ニ及フノ時ハ、貴國ニシテ不可限、先ツ舊好ノ唐蘭ヲ始トシ、西洋歐羅波  
各國ニ使節ヲ立、其風習ヲ察シ、其産物ヲ視、且ハ諸蕃乞フ所ノ港口ノ地、乞フ所ノ交  
易ノ物、於吾國ニ足ヤ不足ヤ、凡而後日ノ爲メトクト算計シテ各可盟約、其節ニ至而  
ハ尤唐・蘭・貴國ヲ以次第ヲ立ヘシ、是等決而妄語ニアラス、能々熟考セラルヘシ、同盟  
ノ國タラントスルニ、其國ノ形勢、風習ヲ不知スルハ有ヘカラス、且ハ信ヲ失フ所也、  
又同盟ノ國タラントスルニ、其國ノ使節ヲ受ルノミ、居ナカラニシテ答禮セサルハ禮  
ヲ失フ所也、又吾國改而合衆國ノ法ヲ立ルノ上ハ、此國ヲ許シ、彼國ヲ不許イワレナ  
シ、然ハ、諸蕃各國ノ爲メ、許否ノ論ナク、且交易諸品、甲乙ノ遺恨ナカラシメント大  
ニ算計シテ、大ニ好ヲ結ント欲ス、皆是芳志ニ從フ所也ト、

右ハ誠ノアラマシニ候得共、此類ヒニシテ説得致シ、猶此外、兼々彼レカ申所ノ齟齬  
シ、不信ナル廉ヲ以、柔服セシメ、且此義ニ相成候ハ、速ニ使節ヲ立テ、實事巨細ニ  
察見セラルヘシ、如此時者、必二年モ相掛リ其難ヲ可引延候、但シ、和戰共ニ、彼カ風

安政五年三月十四日

三三一



使節ハ朝廷  
幕府大諸侯  
小諸侯ヨリ  
各二人ヲ選  
ビ派遣スベ  
シ

安政五年三月十四日

三三二

士人心等ヲ不知ハ、所謂井蛙ノ論ニテ、無智ノ至極ト言ヘシ、且、皇國使節立ラル、時ハ、朝廷ヨリ二人、關東ヨリ大名二人、國主大名ヨリ各二人、大小名ヨリ各二人ツ、其隨從士僕ノ多少ハ、勝手タルヘシ、此人等、蘭船・墨船等ニ乘リ、兩國ノ人ヲシテ案内可被申付候、尤我國船ニ可乗ト雖、當時僅カ一二艘出來ノ處、却テ外夷ノ笑ヲ受クヘキヤ、

第二、徳川家長久可被 思召之事、

今度關東ヨリ御返答書辭、不敬ハ申迄モ無之、人心居合ノ儀ハ、如何様共引受候旨、是等如何ノ心得ニ哉、甚不得其意候得共、文義ノ事ハ、差置、神宮始 御代々江被爲對、深ク被惱 叡慮候、其御眼目、御趣意ノ處如何拜讀仕候而、右様申上候ニヤ、偏ニ輕蔑 朝家仕候次第、猶此外不審不當ノ條モ有之、始終糺問致度事ニ者候得共、今ニ至リ候テハ、ケ様ノ既往ハ、不及被論歟、唯々國內一致、且徳川家長久并ニ征夷ノ名號不空カラサラシメ、武威益盛ン成ルヘク厚キ 思召ノ趣、實事ヲ以テ心服仕候様、宜ク大義ヲ失ハサル辯舌ノ人ヲシテ、御説得被爲在候ハ、和順ニシテ、叡慮ノ旨被爲立候様拜服致シ可申哉、假令御十分ニ不至候トモ、中折ノ義ニハ可相成存候事、

國內一致徳  
川家長久征  
夷ノ實ヲ舉  
ケルヤウ幕  
府ヲ諭スベ  
シ

一右本文ニ付、今度東使御往反之次第、若シ 叡慮ヲ始メ奉リ、群臣所存ノ處、如何ト推

シ計リ兼候ニ哉、殊ニ諸國主ノ面々、夫々之縁家ニ付、内奏ノ趣有之ナト、類リニ流言仕候邊差含ミ、萬一疑心ヲ挾ミ候砌ハ、自然如何ノ所置ニ及候哉、如何ノ難題申上候哉モ難計、深心痛仕候事ニ候、

人ヲ選ビ辭  
ヲ柔ニシテ  
諭スベシ

一右御説得ノ御沙汰ニ相成候ハ、初メ被 仰出候御趣意ハ、何國迄モ被 仰立候様、其人牀ヲ被撰定、而テ彼カ罪條ハ、辭ヲ柔和ニシテ數エアケ、舌戰嚴ナラスシテ 朝威モ立、武威モ立、共ニ御同意ニ相成リ、打拂御評決可被爲在様ト存候、

三公ノ内一  
人ヲ差遣ス  
ルモ可

一右御説得ノ上、猶強情ニ申募リ候ハ、徳川家ノタメ、是非ナキ次第ヲ以テ、速ニ三家・三卿・普代之大名等江被 宣旨下、俗吏ノ面々御取除キノ様、被 仰付可然存候、一右此舉ニ乗シ、大内裏ノ昔ヲ存シ、或ハ深ク諸大名ヲ頼存候ナトハ、決テ不宜所ニ候、假令東ニ伊達、西ニ志摩津、各奮起シテ奉護朝家ヲ候モ、小事ニシテ舉用スルニ不足、今ヤ外諸藩ノ大敵ヲ引受、内チ爭亂ヲ生シ、徒ニ士民ヲ損害スル事、誠ニ可悲歎義ニ存候、

外交問題ヲ  
機トシテ朝  
權ヲ張リ或  
ハ諸侯ト結  
ブハ不可

安政五年三月十四日

三三三



安政五年三月十四日

三三四

一右二虎戰ヒ、一虎ハ倒レ、一虎ハキツ、クナラヒ、漸々戰ヒ勝チ、一方ニ歸和候ニ、疲弊ノ時ニ至リ、墨夷ヲ始メ、オソヒ來ラハ、防禦術ナク、カラ足サランカ、且ハコレ亞夷ノ奸計ニ陷シ入レラル、ノ義、無念此事ニ存候、

一右今度仮條約ノ如キ、旁々以不容易義、若シ許容セラル、時ハ、於 朝廷ハ、神州三千年ニ近キ規則、當 御代ニシテ廢セラレ、於德川家ハ、神君三百年ニ近キ制度、當將軍ニシテ敗リ候ハン事、公武共ニ重大ノ變事ニ候、宜ク深ク御熟談御評決可被爲有候儀 勿論ト存候、

第三、國內一致防禦之事、

戰爭ニ及フ時ハ、四方海岸ノ吾國、夷船何レノ地ヨリ上陸モ計リ難ク候、依而先海國ノ諸大名ヲシテ本國ニ還シ、宜ク其海岸ヲ守ラシムヘシ、各累代相傳ノ自國、殊ニ心力ヲ盡シ、等閑ノ軍ハ成スヘカラス、尤隣國互ニ援兵ヲ出シ、兵糧各互ニ扶助シテ、國々一致嚴密ニ防禦有ヘク、尤仁義ヲ以衆和可有之様 勅命ヲ下シ、台命ヲ添、可被 仰渡存候事、

一右本文ニ付、御所置有之御ハ、 皇國四方廣シト雖モ、武備充實シテ空地タル所ナシ、抑清朝アヘン戰爭ヲ承考仕候ニ、一日ニ數十里敗走セシト歟、是郡縣ノ國ナルカ故

假條約ノ締結ニ就テハ熟談評決ヲ要ス

諸侯ナシテ海岸ノ防備ヲ嚴ニセシムベシ

封建ノ制度ハ各其地方ヲ守ルニ便アリ

一時ノ敗モ恐ルニ足ラズ

也、 神州幸ヒ封建ニシテ、假令、國毎ニ將軍アルカ如シ、其主各積年住居ノ城地タルハ、死ヲ以テ守ルヘシ、其民世々相傳ノ主タレハ、爲ニ能ク力ヲ盡スヘシ、且義氣勇猛ノ風習、殊ニ背ヲ見スルヲ以テ耻辱トス、是等ヲ以テモ、必勝ノ利可有之ト存候、

一右戰爭ニ及ヒ、彼レ一國二國切取候共、初メ一タンノ事ニシテ、更ニ不足恐、親討レ子捕レ、婦妻ヲ強姪セラル、ニ至テハ、彌仇ヲ結ヒ、怨ヲ重テ、憤激ノ猛兵、勢ヒ十倍シテ、十分ノ可得勝利存候、

一右 後醍醐帝ノ時、高時權ニ誇リ、 皇都ヲ攻メ奉リ、官軍悉ク敗レタリ、然ルニ、獨リ正成、僅ニ九百有餘ノ兵ヲ以テ、千破劔ノ城ニヨリ、六十餘州ノ大軍ヲ引受、能ク防禦ノ術ヲ盡シ、籠城數月ニ及ヘリ、故ニ寄手數萬トイヘトモ攻アクミ、終ニ陣中互ニ狐疑ヲ生シ、或ハ遺恨ヲムスヒ、或ハ落テ行キ初メ、討手ニ向フ、義貞ハ鎌倉ヲ亡シ、尊氏ハ六波羅ヲ討テ、 聖運再ヒ開ケタルハ、偏ニ楠氏籠城ノ功也、軍ハ勢ノ多少ニ不寄トカ、今ヤ天地ノ間ニ於テ、皇國ヲ以テ、千破劔ノ城ニ比シ、歐羅波諸蕃ヲ以テ、六十餘州ノ兵トシ、大ニ戰ヒ、大ニ爭ヒ、海防三五年ハタモツヘシ、然ル時ハ、彼モ又盛衰アリ、又内變起ルヘシ、殊ニ主客ノ相違有テ、彼萬里ノ波濤ヲ來テ攻メ戰フ、ソノ費エ幾許カ知ヘカラス、吾國百萬ノ費エアレハ、異邦二百萬ノ費アルヘシ、元ヨリ貪

安政五年三月十四日

三三五



戰爭數年ニ  
互ラバ彼ヨ  
リ和ヲ求メ  
ン

我ハ陸戰ニ  
長ズ

四道將軍ニ  
其人ヲ選ブ  
ベシ

海岸ニ砲臺

安政五年三月十四日

三三六

利ヲ專ラトスルノ夷情、四五年モ勝敗ヲ不辨時ハ、則不算ナルヲ以テ、彼ヨリ和ヲ求  
ヘシ、已ニ英夷ノ華盛頓ヲ攻ルニ、華盛頓舉國一心同力シテ拒之、五年ヲ經テ英夷遂  
ニ其勝事ヲ不得、求和候趣也、

一右歐羅巴中ノ戰爭ノ模様承考候處、數十里ノ平地ニヨリ數十町ヲ隔テ、唯大炮ヲノミ  
打カケ候趣、大國ナルカ故ニ候歟、神州元ヨリ嶮岨ノ國ニシテ、右等ノ平地稀也、假  
令、曠野平地アリモ、邊鄙ニシテ要地ニアラス、軍艦・大炮ノ術ハ彼レニ不及トモ、陸  
戰ハ吾國ノ得ル所也、然ラハ、墨夷ノ驕兵寄來ルモ、海岸弱兵ヲ以テ計テ誘ヒ入レ、  
山谷・森林ニヨリ奇兵ヲ以テ、其兵ノ限リ、塵ニシテ多年ノ濛濛ヲ散シ候義、又難キニ  
非ス、

一右爲防禦、四道將軍ヲ可被置ノ建白モ有之由、ソノ所置如何不存候得共、可然義ニモ  
候ハ、可被行ヤ、併當時家名・家祿共ニ牛耳ノ大藩、其任ニ當ル人躰如何可有之哉、若  
列國不平ヲ懷ケハ是大患也、

一右軍事ハ、武門ノ預ル所也、毛頭不辨知事ニ候、併ナカラ、地雷火ヲ以燒キ討シ、水ヲ  
切リ落シテ溺死セシメ、或ハ夜討、朝カケ、或ハ奇兵・伏兵、或ハ反間ノ謀、其良策イカ  
程モ可有候得共、皆其時ト、其地トニヨレルカ、譬ハ、秦ノ長城ノ如ク、諸方海岸ニ土

ヲ築クベシ

衆心一和セ  
バ神助アラ  
ン

諸侯ノ兵ヲ  
出シテ皇都  
江戸大坂ヲ  
守ラシムベ  
シ

手ヲ築キ連テ、大炮ヲ防キ、大軍ヲ拒ムノ計略第一ニ候、輿人ノ言ニ、大炮ヲフセクニ  
ハ、土手ニシカシト、然レハ、勤メテ高クシ、至テアツクスヘシ、ソノ巾ハ二三間ニシ、  
其長サハ二十間アマリニシ、之ヲ互ニシ、其頂上ニ炮ヲ設ケ、其陰ニ兵ヲ置キ、且長城  
ニ反シ、海岸ニ押シ渡テ深ク堀テ作ル事、二三重ニモ有ヘシ、如斯時ハ、大軍ノ進ム事  
自由ナラス、大炮ノ重キ、引進マンニ道ナシ、但其土ヲ出ス所、則堀トナル、是一固シ  
テ兩端ヲ得ルノ計ニ不有否、殊ニ以烟水練ノ説、ミル人笑ヲ止カタカラン、  
一右如斯、衆心一ニ歸和シテ、不顧萬死、人事ノ限リ、武略ノ極リヲ盡サンニハ、何ソ又  
神風モ吹サランヤ、彌 神州ノ神タル廣大ノ威德、五大州ヲシテ仰キ尊ハシメ、再ヒ  
覬覦シ、指手ヲ出ス事ナカラシメント所希也、

第四、皇都警衛并ニ江府・大坂等之事、

無海國ノ大小名ヲシテ、三分トシ、一ヲ以 皇都ヲ衛ラシメ、一ヲ以江府ヲ援ケ、一ヲ以  
テ大坂ヲ護スヘシ、但シ海國ノ諸大名、各雖令守自國、猶一手ノ勢ハ出サシムヘシ、武臣  
制度ニ曰、高一萬石ニ五十騎、十萬石ニ五百騎也ト、其將卒諸國ヲシテ合セタランニハ、  
數百萬ヲ以テ員フヘシ、是モ尙三分ニシ、一ハ 皇都、一ハ浪華、一ハ遊兵トシテ守禦缺  
乏ノ所ヲ補益スヘシ、江府元ヨリ旗本ノ大軍アリ、依此一勢ハ除ク所也、如斯シテ、賞

安政五年三月十四日

三三七



徳川家門ノ  
大藩ヲシテ  
皇都ヲ守ラ  
シムベシ

大藩ニ命ジ  
大坂ヲ守ラ  
シムベシ

諸侯ノ二三  
男ヲ援軍ノ  
將トシテ他  
ニ差遣スベ  
シ

安政五年三月十四日

三三八

功・罰罪嚴正タルヘク存候事、

一右本文ニ付、皇都警衛、殊ニ大切ノ所也、攝州・若州ノ南北甚近シ、且姦民黨ヲ成シ、如何ナル異變差起リ候モ不可知、依テ家門ノ大藩ノ中、大將トシテ、急度守護コレ有ヘキ義ニ存候、

一右同様、關東大切ノ義、尤申迄モナシ、但シ、徳川公世々居住ノ城地、殊ニ累代恩顧ノ將士舉而數フヘカラス、又事アレハ、甲府要害ノ地モアリ、依而諸國ニ百倍シテ、自然堅固ニ可有存候、

一右同様、浪華防禦ノ所置、實ニ大切ニシテ、殊ニ天下要地ノ海岸、且山嶽ニヨルノ要害ナク、又皇都ニ近シ、宜ク大藩ニシテ、一人ノ名將被差置度義ニ存候、

一右海國諸大名一勢宛援兵ノ事、各自國海防在ル之上ハ、本文ノ如ク、武臣制度ノ通り、難致輩モ候ハ、夫々分限ニ應スヘシ、但其一勢ニ將タルノ人、其國主其嫡子ハ差置、二男或ハ三男、下ツテハ分地家老タルヘシ、右ハ兩端ノ義アリ、若シ其本國被攻敗、父子一族ヲ盡シ討死ニ及フノ節ハ、可憐爲ニ天下ノ、其國ヲ失フニ至ルカ、依而挽回ノ時、直ニ連枝ヲシテ其血脉、其國等ヲ失ハサラシメン、是其一也、又諸大名在國被申付ノ上ハ、其妻妾共ニ同シカルヘシ、然レハ、於關東、人質トスルモノナシ、依テ前文ノ

僧侶ヲ徵シ  
兵トスベシ

如ク、其子其近親ヲ以、可被召置、是其一也、

一右警衛、并ニ防禦所置ニヨリ、若軍卒足サレハ、諸寺諸山ノ僧侶ヲ採用スヘシ、又萬ヲ以數フヘシ、軍事起テハ是猶浮食ノ徒也、殊ニ墨夷ノ懇願ニ踏繪ヲ除クノ事、卽是レ法敵也、然ラハ、死力ヲ盡シテ之レヲ拒ン、山門僧徒ノ如キ、就中強剛ニ候ハン、且一向宗ハ、當時帶刀ノ僧タレハ、如何ンソカラヲ盡サ、ランヤ、但シ、邪宗ノ深ク恐ルヘキハ、天草ノ大亂ヲ以テ知ルヘシ、大坂陣打モラサレノ浪人、僅カ五六人ニ不足者、切死丹ノ法ヲ行ヒ、愚民ヲ惑シ、籠城百日ニ及ヘリ、十四頭ノ大小名、カヲ盡シテ攻アグミ、終ニ閣老板倉内膳正討死セリ、大將タル者ハナク、士タル者十人ニ不足、餘ハ悉ク是烏合ノ百姓勢スヲ尙如斯、深ク可恐事ニ存候、

一右三都會之地、平常遊手浮食ノ徒、并ニ往々窮民多シ、此等ノ輩、兵起ラハ遂ニ食スルニ物ナク、恐ラクハ盜ヲナシ、或ハ一揆ヲ起シ、或ハ流亡シテ、墨夷ニ隨順スヘシ、深以戒懼セサルヘケンヤ、依而四頭ノ小名ヲシテ都會四方ニ差置、大ニ之ヲ賑ハシ、又假屋ヲ建並ヘ、右ノ徒ヲシテ引受、男女赤子ニ至ル迄、厚ク恩惠ヲ加ヘテ撫順スヘシ、尤亂妨ノ制止殊更ニ嚴ナラシメ、平常ニ倍シテ政令正カラン事ヲ希所也、而テ任其性其力ヲ測リ、各心服セシメテ、或ハ農ニ歸シ、或ハ兵トナスヘシ、尤諸國同様心ヲ用ユ

安政五年三月十四日

三三九

窮民ヲ撫恤  
シ外夷ニ隨  
順スルヲ防  
グベシ



商民モ軍事ニ使用スベシ

戰爭ニハ多額ノ金銀ヲ要ス

金銀札ヲ造リ天下ニ通用セシムベシ

安政五年三月十四日

ヘキ事、

一右當時商民ノ製作スル所、多クハ奇玩ニシテ、軍用ニアツヘキ物稀也、若シ兵起ラハ、此徒モ又其身妻子ニ至リ、愛憐扶助シテ、各採用驅使スヘシ、且奢侈ノ諸品之ヲ禁シ、無益ニ國費ヲ費ス事ナカルヘシ、

第五、國寶融通之事、

戰爭地方ニヨリ、鳳輦、遷御、并ニ將軍甲府江移ラル、等ノ儀ヲ初メ、警衛ノ所置、防禦ノ術、大小萬事金銀ニヨラサルナシ、但小名ハ勿論、大名ト雖モ、近年追々困乏疲弊ノ極ニ至リ、殊ニ相傳ノ軍器、炮楯、猶其外當時必用稀成シ歟、新ニ制作センニ、其費エ、幾計カ不可知、速ニ數億萬ノ鑄金有之度儀ニ候得共、其功ニハ不可成、依而今ヨリ五ケ年、或ハ七ケ年ノ間ヲ限り、天下金銀札ヲシテ、通用足ラシメンハ、忽チ其功ナルヘシ、是ヲ以テ、朝廷ヲ始、關東ノ諸費ハ勿論、諸大名諸大官凡而ニ至リ、家祿・貧富ニ應シ、夫々借與スヘシ、如斯時ハ、欲スルトコロ心ニマカセ、則武備嚴整・充實ニ至ルヘク存候事、

一右本文ニ付、於唐國モ、一代數年ノ間、金ト札ト交エ用ヒ、又一代積年ノ間、札而已ヲ以テ國寶融通之先蹤モ有之趣、今ヤ國家危急存亡ノ秋ナレハ、即臨機應變ノ策ト存

新法モ戰ノタメ一時ノ計策ト知ラバ人心承伏セン

正金上納金札引換ヲ許スベシ

候、

一右被 仰出候時者、大小名及諸民ニ至ル迄、恩惠扶助セララル、ノ叡念ニシテ、則人主ノ業、誰カ仰サラシヤト存候、

一右關東而已ニテ新法被立候時者、當時天下政務御預リ被申居候儀、若シ私欲ニ當リ、國內人心ノ承伏否如何有ヘクヤニ候ヘル、必戰ノタメ一時ノ計策ニシテ、大樹公ノ大度、救世理民ノ處置、又可感賞輩モ可有之存候、

一右關東於諸役人モ舉用可仕カ、其故ハ、今度ノ如キ重大ノ儀モ、輒ク承引仕候濫觴ヲ熟考仕候ニ、二百年來ノ治平ニ馴レ、柔弱ノ士風ニ押シ移リ、唯戰爭ヲ恐レ、目前ノ安キニ付クト、金銀多産ノ亞國交易利アル等ニ依テ、惑イ候儀ト存候、

一右札金銀、正金銀ニ引替ノ義ハ、五年又七年、初メ被申渡候通、相違ナク可被渡替候、天下ノ至寶、天下ニ信ヲ不可失、但シ改正ノ上ハ、右年限ノ間、札ノ外堅ク通用制禁有之候ハ、利倍ノ道ナク、商人・百姓ニ至リ其有スル所ノ金銀自然上納仕リ、札引替ノ事可願出哉、且金銀多キノ弊、金銀札ノ弊、古來往々有之由ニ候得共、全ク仕方ノ正邪ニヨルヘキヤ、猶宜才智ノ人ヲシテ勘考被仰付候様存候、

一右大小名以下返金ノ事、十年或ハ二十年、隨分寛宥ノ可爲沙汰、但シ近頃諸國諸士ノ

安政五年三月十四日



功利ニ走ル  
ハ士風ヲ損  
ズ

幕府諸侯均  
シク用度ヲ  
減シ糧食ヲ  
儲フベシ

戲言ニケ條

金ナキハ首  
ナキニ劣ル

安政五年三月十四日

三四二

立身出世ノ輩ヲミルニ、武道練磨ノ功ニ依ルハ稀ナリ、多ハ新ニ國產有益ヲ計ルノ徒也、尤大切ノ儀ニハ候得共、困乏甚シキヨリ起テ頗ル利欲ニ走り、士風ヲ損害スル所ト存候、

一右亞國ノ驕慢無禮ニシテ、國辱ニ及ヘルヲ怒リ、奮發シテ速ニ可打拂志望ノ大小名可有之候得共、貧困ニ依テカヲ不足ヲ恨ミ患ヒ、空ク日月ヲ送ルノ徒、幾許カ不可知ト存候、如斯ナレハ、關東且諸大名以下、各節用度ヲ儉勤ノ心得ハ申スニ不及候得共、就中家作與女ヲ減少スルノ義、第一ト存候、然ハ、從テ用度モ減シ、糧食儲備シ、自然富有ニ可至ト存候事、

戲言ニケ條

一財アレハ愚ナルモサトシト仰キ尊ハレ、貧シケレハ知アルモウトシト慢リ卑シメラル、蒙昧ノ徒、只金ニヨリ賢愚尊卑モ分タサル所ナリ、唯利欲専用ノ世ニ陷ルニヤ、無祿同然ト雖モ、本願寺宗ノ盛ナル事勢ヒ不可當、凡俗通言曰、穢多モ持タ金ナキハ首ナキニオトル、又曰、軍事不起、三方アリ、一ニ貧乏、二ニ鐵炮、三ニアホフノ世トカ聞ク、又荒井白石カ言ニ、學問ノ上ニモ、三根ノ事アリ、一ニ氣根、二ニ利根、三ニ金根ノ世トカ云ヘリ、螢ニ習ヒ、雪ニ讀ムノ苦學、上古ノ事ニヤ、是皆金ニ依テ云所也、

堂上官階ノ  
ノ輩モ金ニ  
就テハ無力

諸品高價往  
古二十倍ス

關東ト談合  
シ外夷討伐  
ノ策ヲ決ス  
ベシ

安政五年三月十四日

三四三

一竊ニ案スルニ、堂上預官階ノ輩ト雖モ、金銀融通ノ事ニ於テハ、歎息悲泣ノ外ナカラシ、姓氏モ不分明ナル、愚痴モンモウノ町人ト雖モ、臨事ニ對話ノ始末、先尊卑ノ別ナキカ如ク、アタカモ貴人ニ向フニ似テ、彼レ頗ル慢辭僞言ニシテ、己レ不正ノ富ナルモ知ラス、其誇ル事タトフルニ物ナシ、然レモ、是ヲ不堪忍者、小祿ノ輩今ハ忽テ勤務不成、依テ氣色ヲ損セン事ヲオチヨソルト雖モ、内心不可忍ノ甚シキヲ悔ユ、一言齟齬アレハ、速ニ來テ算面ヲナラシ、怒聲ヲ發ル事雷ノ如シ、切齒スト雖モ如何ントモスヘキナシ、思ニ是翫具ハ差置、當世必用諸産ノ高價ナル事、往古二十倍シテ祿尙同シキカ致ス所歟、數十萬石ヲ領シ、數千人ノ士ヲ扶持ストイヘモ、大小名尙都會富饒ノ町人ヲ撫順スル事賓主ノ如ク、上ハ家老カクニ取立、下ハ留守居カクト稱シ、饗應善美ヲ盡スノ由、皆是依金ノナス所ナリ、

前文五ケ條ノ如キ、愚昧ノ計策、衆皆知ル所、九牛カ一毛ヲ舉用セララルルニ不足ト雖モ、假令ハ、此類ヒヲ推シテ、大改正ノ法則ヲ立ラレ、宜ク關東ト被仰合、打拂ヒ御決定コレ有リ、片時モ急速ニ、夫々所置可有之様、頗ル短文ニシテソノ意貫徹シ、一ト度讀之者ヲシテ恩惠愛憐ノ深キ、偏ニ 叡慮ニ起ルト仰キ尊ハシメ、有志ノ士ハ申ニ及ハズ、墨夷ノ邪教ニ惑溺スル徒モ、猶奮發セシメ、早ク戰場ニ赴ン事ヲ希フヘク、宜ク其人ヲシテ筆ヲトラ



安政五年三月十四日

三四四

シメラレ度候事、

御代萬歳ヲ祈リ、石龜ノシダンダ踏シメテ、申タテ候處也、

愚策勿論之處、表題頗謾辭候得共、唯石龜ノ二字ニヨリ、萬ト云ヒ、堅ト云フ、

〔岩倉公實記〕

是ヨリ先キ、具視朝議ノ優柔不斷ニ流ルルヲ見テ、國家ノ禍難益ス深キニ趨ランコトヲ憂  
慨シ、時務策一篇ヲ草シテ、神州萬歳策ト題シ、之ヲ當路ニ上ツラント欲ス、而シテ未タ果  
タサス、列參諫奏ノ後(三月十四日ニ當ル)二日ニ及ヒテ、之ヲ少將内侍今城重子ニ囑シテ、御前ニ内奏ス、

○岩倉公實記所載ノ神州萬歳策ハ、上ニ掲ゲタルモノト、其ノ文辭大ニ異ナルアリ。或ハ後人ノ潤色ニヨルカ。  
參考ノタメ次ニ之ヲ併載ス。

○參 考

〔神州萬歳策〕○岩倉公實記所載

墨國條約之一條ハ重大之事件にして、其得失利害を考究せずして、關東伺之儘ニ勅許するに於ては、神武天皇より  
二千有餘年、堂々たる大日本國の御體裁も、當御宇に至リ汚辱を受テ、終ニハ蠻夷の屬國同様ニ相成可申歟と悲歎  
ニ堪ヘズ、抑宇宙の間ニ於テ、至貴なるものは太陽若くは人、人間を始め、萬物の生育は、皆太陽の惠澤ヲ蒙  
らざるハなし、太陽ハ吾々天照大神の御神靈ニシテ、海外萬國と雖も、太陽の照す所を、皆大神の恩光ニ浴するもの  
なれど、坤輿の上ニ於テ、獨ニ大日本國の國號を有するも、誠ニ故あるなり、而るに、今や墨國の爲に強迫せられて、修

好通商の條約を結ばんとするは、予々親を勝て物を補するに應ずる如きものにして、親の威權を失ふに均し、  
皇大神始め奉々、列聖在天の神靈に對せられ、御不孝ハ勿論、就中弘安の先皇に對せられ御申譯も無く、恐れなから  
寂慮を惱まさせらるる御事を推察し奉れば、臣子たる身ニ於ては、一日も寢食を安んずること能はず、文武の道に  
疎きも、報效の事は謀らざる可からば、夫れ現今世界の形勢一變の説を、關東の役人も喋々と之を唱ふるも、此説は  
已ハ天保年間より萌芽し、達識の學者々、皇國の苟安を見て、竊ニ之を憂歎せり、而るに關東の役人は、始めて墨國  
の軍船・大砲を見て驚愕し、漫ニ世界の形勢一變を名として、鎖國の制度を變革し、彼れの要求を容れ、修好通商の  
條約を取結んとす、誠ニ無謀無策の甚しきものにして、因循苟安の極と謂ふて可なり、若し修好通商の利害を考  
究せずして、彼々威勢に畏怖して條約を取結ひ、甲より乙と次第に萬國と交通の道を開くは、大日本國固有の美風  
良俗は、一時ノ頽廢して不測の災害并ひ臻るへし、誠ニ寒心戰栗に堪ゆ可多しや、願くは朝廷に於て前途の御國是  
を確定させられ、御國體ニ基つき、百年の利害を御洞見取りて、墨國の處置を御決議せられ、大日本國をして永  
く富嶽の安きに置き給はんふとを、偏に渴望の至に堪へず、

第一 墨夷和親貿易然るをくらさるの事

一墨國の要求一度許容せらるるに於ては、諸蕃追々風を開きて渡來し、墨國同様に情願を申立つ可し、其節に至り、彼  
を許し此を許さざるの道理なきを以て、悉皆之を許容せざる可からず、今日の如く、全國の軍備廢弛の時に當り、諸  
國の港を以て、戎蠻輻湊の域と成さは、終始彼々我々柔弱を見透され、何事も附帯ても恫喝さるる而已にして、實  
に遺憾千萬なるへし、遂には大日本の國號も、地は墜つるの禍患を招くに至らん、和親通商も其始を慎まされ、利  
益も弊害に變じて、惟彼々鼻息を窺ふの卑怯ハ陥らん、是れ今日和親貿易然る可くらさるの一なり、

一墨國情願の通許容せられ、尋て魯國・英國と次第情願申立、而る後に其貿易は何物を以て之に當る可きや、目下御  
國の物産繁殖と謂ふに非ず、實に意外の困難起るふと有らん、夷情元より奪とすんは鑿々す、吾々有用の物品を以

安政五年三月十四日

三四五

具視今城重  
子ニ囑シ時  
務策ヲ内奏  
ス



て之を斃足せしめん歟、物價従ふて騰貴し、御國民は年々に困窮し、憤懣の餘り是非の論なく蠻商輻湊の地立入り、彼ら商館を焼き、彼ら官吏を殺し、其極は彼の政府と舌戦を始め、夫より兵器を以て曲直を争ふに至るへし、斯く軍備廢弛し、物産匱乏の時、當りては、開港・開市は禍患多し、是れ今日和親貿易然る可からざるの二なり。

一墨國始め諸蠻より船載の物品は、從來蘭國貿易の物品に照して之を考ふるも、奇玩・珍弄多くして有用の品は稀なるへし、御國の物産未だ繁殖せざるの時なれば、我々有用の金銀銅を以て、彼ら奇玩・珍弄を購ふに至る、金銀銅は大抵彼ら手に落つ可し、如何に珍物なるも、時辰器を嘗め、自鳴琴を舐りて、飢渴を凌ぎ、生命を保つべしと能はざるへし、只醫藥と毛織は有用の品なるも、之を購ふ者は少くして、奇玩・珍弄を購ふ者は多からむ、之を要するに奢侈を長し、御國の疲弊を招くに過ぎず、是れ今日和親貿易然る可からざるの三なり。

一墨國條約中、數箇所の開港と、十里四方の遊歩と、踏繪を廢するとの三件は、尤許容す可からざれば、近年細民の困窮甚く、廉耻地を拂へり、此時に於て戎蠻些の恩恵を施し、些の利益を與へ、之れより加ふるに邪教を以て誘惑せば、無智の細民は異人を慕ふと父母の如く、第一人心を收め、第二地利を知り、第三要港を占め、一朝異國と争端を開くは、内外相應して御國の危険是より甚しきはなし、是れ今日和親貿易然る可からざるの四なり。

一墨國條約の中、日本人は對する罪人を、彼の國法を以て罰するの箇條は、尤許容す可からず、下田條約の儘ならば姑く宥恕するに足るも、數箇所の港を開き、商館を建連らせ、異人輻湊するに於ては、我々商估も多人數入り込むに依り、異人と口論もあはるべく、喧嘩もあはるべく、又盜賊・騙詐に出逢ふも、あはる可し、日本人如何程に恥辱を被むり如何程に禍難を受くるも、異人は於ては輕き罪に申付多し、我より其不當を論するも、彼は自國の刑律なる旨を主張せし如何ともす可からず、御國の者は切商扼腕して之を憤懣する而已なり、是れ今日和親貿易然る可からざるの五なり。

一墨夷打拂ふ可きの機會は、嘉永癸丑の時に在り、當時は士氣怠惰とは申なから、或は諸大名の内に、憤然として報國

の勇氣を鼓舞し、關東の沿海を警備せしもの有り、一旦戰爭に決せし、怠惰の士氣を以て、忽ち振起せしむるの機會を生じ、各進死を榮とし、退生を恥とするの念慮を起し、全國の人心を一新するに至る可きなり、然るに甲寅の歲に及びて下田の開港となり、處置案外に出づるを以て、銳氣頓に挫き、爾來柳營より軍備充實の世話あるも、諸大名は矢張等閑し附し、海防は依然として舊の如くに因循し歸せり、乍併田夫野人婦女兒童に至るまで、異人を指して毛唐人と呼び、之を惡むと猛獸の如し、是れ積年の風習然らむる所なり、此風習の消滅せざる間、於て、眞實の義勇の氣を養成し、御國固有の威武を擴張するふと努め、内には戰爭す可きの實力を蓄へ、而して外は當る可きの計略を運らさば、縱令和親貿易の條約を結ぶも、彼ら侮謔を受くるふと無かる可し、今や戰爭す可きの實力あり、而るに和親貿易の條約を結ばんとするは、膝を屈して憐みを乞ふと同一の舉動し、恥辱はより大なるはなし、甲寅の歲に一跌し、今又一跌する時は、全國の士氣一層萎靡不振に陥り、他日臍を嚙むの悔あるは火を賭る可し、是れ今日和親貿易然る可からざるの六なり。

一墨夷打拂はざる可からざれば、然れども茲に顧慮すべきもの一つあり、海路運漕を遮斷せらるるの憂是れなり、御國の物産、米・麥・鹽・酒を始め、日用の必需品は、東西南北ともに、船舶の便に頼りて運漕せざるは莫し、今や寛永以前の如き堅牢なる三本橋の大船なし、若し一朝戰爭始まらば、諸蠻聯盟して數十艘の軍船を以て、四方の航便を遮斷し、諸國の要港を扼さば、兵糧の運漕に差支へ如何ともす可からざれば、陸運に依らん、路遠多れと車摧多し、馬倒れ、牛疲れ、人勞し、日に數千石を運輸するふと甚た六ヶ敷なり、是に至て勇者も勇を振ふ能はず、智者も智を施すふとを得ず、空く手を束れて敗を取るより外に詮方なかる可し、此等の顧慮を打忘れて、漠然と墨夷打拂ふへしと論するは、識者の取らざる所なり、去迎、彼ら軍船・大砲に畏怖して、目下彼に抗敵すること能はずと、卑怯の心より先づ條約を結び、無理に平和を保たんと欲するも、亦識者の取らざる所なり、然らば如何して可ならんかと云ふに、此際に於ては非常の英斷を以て、諸大名に國力相應し軍船を製造す可しとの嚴命を降し、又諸國の船持には堅牢なる運漕船



の製造を懇々と諭達し、柳營も率先して軍船製造を始むるふとを爲し、上下戮力して海上の防備を張るふと尤急務とす、是故に墨國の情願に任うせ、條約を結ひて眼前の危急のみを逃るるの拙計を取る時は、軍船・運送船の世話は兎角に等閑し流れて、口には能く之を言ふて手には之を行はざるの惡習を陥り、海上の防備は幾十年を経るも整頓するの期なうらむ、是は普通の人情にして、尤注意を要す可き所なり、是れ今日和親貿易然る可うらざるの七なり、一墨國と應接して、下田條約の儘に据置くを以て、今日の得策とす、此應接に及び、彼に於て承伏せば無事平穩なるも、彼れも一旦和親貿易の條約を結ばんふとを要求せし上ハ、容易に承伏せざるへし、因て事理に明かにして、大體を知る人を撰ひ、蘇張の辨舌を振ふて彼れを賺うし、今より四五年を延くの計を施すへし、其内に御國內の武備も擴張し、彼れ侮謾を受ざる様畫策運籌するを以て肝要とす、此四五年を延くの計を行ふには、「ハルリス」と應接の如何に之れ有るへし、其應接振の大要を左に掲げん、

合衆國の大統領格別の誠意を以て、特に使節を遣はされ、其陳述する所の口狀、我々皇帝に奏聞するに深く御満足に思召され、宜く御挨拶をせらる、抑世界の形勢一大變革の時運に向ひしふとは、貴諭に依て始めて御承知相成す、如何にも我々國二百餘年の制度も斷然改革し、古來萬國に交通せし制度に復せざるを得ず、此改革を行ふ上は、獨り貴國のみに限らず、他の國々も於ても、修好通商の約を立てむとす、是故に古來遠航の故事に倣ひ、我々國より使節を貴國に派し、先づ大統領格別の誠意を謝さむと爲、次に其便船を以て、歐羅巴諸國も巡廻し、各國の制度・文物を觀て、風俗を知り食物・器什を檢し、而して我々國の物産にして、各國の需に應ずべき品柄あるや否を考究し、後來有無相通して、永く信義を失はざるの注意を施さんとす、而る後に貴國及び舊好の漢國・和蘭と、我々國渡來の順序に依り條約を結ひ、親睦を厚ふし貿易を行さんとす、今や貴國の需に應じ、直に條約を結さんとするも、其條約を結ぶべき貴國の風俗を始め、諸制度を知らずして、輕卒に交誼を修めんと、或は我國の禮とする所の事も、却て貴國の無禮と視做す事あるへし、是れ親睦を破り信義を失ふの基なり、又貴國の使節を迎へ、坐なうら忠告を受きて、敢て

答禮を行きざるは是れ恭敬を缺くものなり、是故に我國より速に使節を貴國に派遣せんとす、願くは貴國より堅牢の大船一艘を貸し渡さんことを、今や海外萬里の旅行を催ふし、貴國始め歐羅巴州の國々を巡視するふとを得るも、皆貴國の芳志に浴する所なり、修好通商條約の如きは、我が使節歸朝の上之を商議せんとし、今姑く貴國の待さんふとを望む、

右は誠に要領にして、此外類を推し理に據り、諄々と溫和に應接し、猶墨國の應答言語中に、前後矛盾し不信義の廉々あらば之を辯詰し、彼をして軍船・大砲の鬼面を脱き、下田條約の儘に据置くことを承伏せしむる様に仕掛くるふと肝要なり、

一墨國と應接し、我々言に承服の上は、速に使節發遣の事を彼の使節に達して、朝廷より正使一名、隨從四五名、柳營より副使一名、隨從四五名、三家・家門、國主大名より、各隨從二三名發遣仰附られ、諸蠻の形情を視察せしむへし、此使節の巡廻は、少くとも三ヶ年以上の年月を要し、國々の模様は書取を以て蘭船に托して、朝廷と柳營に言上せしむ可し、使節の船は、我國の船を用ふるは御國禮上宜しく願はしき事なれども、大船もなく慙に千石船などを用ひ、萬里の波濤を凌かんとするも運轉に拙く、諸蠻の笑を招き、却て御國辱と成るへし、残念なうらも墨國より、大船を借受す、蘭人に案内者を申付くるより外に詮方なし、此使節巡廻の間に於て、軍備を躊躇せずして著手し、預め戰爭の用意を爲すを以て專要とす、而して使節歸朝せし、是に於て公武相揃ふて大評定を開き、和戰を決せられ然るへし、彼を知り己を知るの後に於て、外國の處置を熟圖するに非ざらざれども、恐らくは井蛙の陋見に陷るの譏を免れざらん、此使節發遣は、内に軍備擴張の期を得て、外に諸蠻の形情を知るの便を受す、全國の人心を一新し、士氣を振作するには必要の舉なるも、非常の御英斷を以て、關東に御沙汰あるに非ざらざれども、決して行われざるへし、屹と朝議を定められんこと渴仰懇望の至に堪へず、

一前條の應接に及ぶも、墨國の使節強情を張り、是非とも條約を結ばんふとを申募り、再三再四應接の末、彼より傲慢



無禮の働をなさは、最早一戦して拒絶するより外に術はなし、此時に至らば軍備の整はざるを名として、其恥辱を忍ぶるに、斷然と攘夷の大詔を天下に宣布し、全國死力を盡くして墨船を撃攘し、其來襲を防禦すべし、此大詔は、御國の興亡に關係する大切のものなれば、御人撰の上、草案執筆を仰附られ、文辭簡短にして御趣意貫徹し、一たび拜讀せし、確乎たる叡慮に感泣し、志士仁人は申す迄もなく、蘭學の徒も身を殺し國に報ゆるの赤心を顯はし、上下一致國民の力ならん限りは、外敵を打拂ふの大憤發を爲さしめんと肝要なり、此の如く全國義勇の氣象を振ひ起さば、至誠神明を感格し、神風の冥助もあらんべし、日本の國號も海外に輝き、諸蠻も睥睨の念慮を收め、侮謾の舉動を休め、禮讓を盡して講和を乞ふに至るべし、是時に於て和を講ずるも講せざるも、我れ主たるに依り、彼も強ふること能はず、是れ義兵を以て敵を屈するものにして、所謂危中に安を求め、死中に活を得るの計策なり、

第二 徳川家長久を思召さるゝの事

一 今度關東より御返答の書辭、傲慢無禮なるは申すまでもなく、人心居合方の儀は、如何様にも關東にて御引請遊はさる云々と申上り、如何の心得なるや、甚さ其意を解せず、嚮に佐倉侍從上京の事を言上する書面に、列侯諸藩に至る迄、人心居合候様遊とされ度に付、右御所置振等叡慮御伺として云々とあるを見れども、關東に於て、人心居合を深く願慮せしは瞭然とあり、而るに御引請遊はさる杯と言上するは、自家撞著の言なり、其書辭の不都合は差置き、先第一に神宮始め御代々を對させられ、叡慮を惱ませらる云々との、御眼目の御趣意を、何と拜見し、右様の御返答申上りや不審の至なり、抑當御宇の初、弘化三年以來、神州の瑕瑾なき様にとの御沙汰數度おらせられたるも、神宮始め御代々を對せられ云々との御趣意に外ならざりて、誠に肝要の所なるに、之を輕々に拜見せしは、朝廷を蔑如し奉るの甚きものなり、此等の廉は、屹度御詰問遊とされし事なれども、既往は咎むるも徒に紛紜を生ずるに過ぎずして詮なき事なれども、其反省自新を聽るべし、國內一致を緊要とし、徳川家長久、征夷の職掌を曠ふせしめずして、御國威擴張の叡慮御貫徹の場合に相成る様、専ら御仕向遊され然る可し、

一 東使と議傳兩役の應答振を傳承するに、叡慮を始め親王群臣の所存如何と會得致し兼補とるや、頗る猜疑を起し居る様子なり、國主大名の面々、群臣の内に縁家あるに依り、内奏の趣も之れある杯と、流言の折柄なるを以て、朝議の確乎とるを見ては、或は他の入説なるべしと臆測し、不快の念を起す故に、此後如何の難題を申上り、又如何の取扱に及ぶや測り難し、預め之を避くるの計を講究するも肝要ならん、今日墨國と云ふ大敵を眼前に引受なうら、國內に紛紜を引起すは、誠に憂ふべきの至りなれども、努めて東使の猜疑を氷解せしめ、不快の念を散せしむる様御仕向遊はさるを以て目下の急務とす、

一 東使を御前に召させられ、懇々と叡慮の趣を仰せ含められ、勅答書を奉りて歸府せし、引續き忠純・達辯の堂上を御任選の上、關東へ差遣はされ、深厚の叡慮を奉戴し、征夷の職掌を盡くし申すべく様、猶又御説諭おらせられなは、譬ひ御満足の場合に至らざるも、折半位の熟談は相調ひ申すべし、

一 御説諭の御沙汰に御治定の上は、勅使仰附らるゝ人體に、兼而の御趣意を屹度貫徹する様仰せ含めさせられ、何つく迄も君臣合體・公武一和の旨趣を以て、舌戰嚴ならざりて論鋒鈍らす許々と説諭し、朝家の御威光を嚙さば、又武家の面目を失はしめず、全國の力を戮はせて外侮を防禦する様、誠心を以て協議せしむべし、

一 御説諭の勅使は、二名御人選にて、表面大樹の安否御尋として差遣はされ、便宜老中に面會して御説諭の御趣意を傳へ、朝命を奉するは、即ち徳川家長久・武運繁昌の根本とるの道理を懇々と説き示し、何くまでも朝廷に於ては御隔心なきことを了解せしむ可し、萬一協議不調に屬するも、表面安否の御尋なれども、名義上後日の害とは相成申さば、萬全の計略なるべし、

一 御説諭の上、老中に於て猶強情申募り、朝命を奉せされども、徳川家の爲め是非なき次第、勅書を以て、直より大樹へ懇々と外侮を防禦するの策略を聞召さるべきの御沙汰おらせられ、同時に三家・三卿始め諸大名へ、宣旨を以て、大樹を輔佐し、神州の瑕瑾を遺さざる様、墨國處分の議を建つ可きの御沙汰おらせられ然るべし、併し是は萬已むを得



さるの計策なり、

一前條の擧るも、猥に大内裡の昔を顧戀し、或は陰に國主大名に依頼する等は決して宜からば、譬へ東國に伊達・上杉・佐竹、北國に前田、西國に島津・毛利・鍋島、黒田・細川、四國に山内・蜂須賀等奮起し朝家を守護し奉るも、朝廷に於て確乎とる御見識立てされば、徒らに内訌を激成し、其中には、所謂取て代るへしとの大望を抱くもの無しとせず、實に大事の前の小事にして深謀遠慮すへし、今や外には諸蠻の大敵を引受、内には兄弟吞噬の欲を逞ふせし、百姓を奢め貨財を耗し、悲歎の苦境に陥らん、二虎相闘へば、一虎は斃れ、一虎は傷つきの理にして、一旦戦ひ勝て事落著するも、國內疲弊し、此隙に乗じて墨國始め諸蠻來寇せし、防禦の力乏く、手を束縛て彼の蹂躪を受くるのみ、是れ則ち墨夷の術計中と陷るものにして無念千萬なれば、何つく迄も徳川家を主として、諸大名を以て之を輔佐せしむるを今日と於ては得策とす、

一東使伺の墨國條約は重大の事件なれど、人心居合は關東に於て御引受遊とさる杯と言ふ如き、漫然とる御返答を御信用遊ばされ、輕卒に勅許せらるゝ時は、天下の議論は是より紛々として、遂には朝廷に於ては、神武帝以來三千年近き獨立の國體も、當御宇に至りて始めて缺端緒を開きさせられ、徳川家に於ては、神君以來三百年凜然とる武職を、當將軍家に至りて汚辱し、公武共に天下後世に對させられ、何と御申譯せらる可きや、實に恐懼の至りなり、仰き願くは朝廷に於ても、徳川家に於ても、各深謀遠慮を運らさせられ、非常の大英斷を以て、天下の人心を振起し、神州の瑕瑾を遺さざる様百年の長計を建て、墨國の御處置せらるゝ様渴望と堪へず、

第三 國內一致外侮防禦を講すへきの事

一御國は四方沿海の地にして、諸蠻と開戦に及ぶときは、異船何れの浦々より發砲挑戰するや測り難し、先づ海邊の國々の諸大名は、各本國に歸住せしめて、海岸の守備を講究せしむへし、各果代相承の封土なれど、心力を盡すは勿論なり、然れとも之を放任する時は、或は甲國の守備乙國の方略に劣る等の恐れなるとせず、依て勅諭を以て隣國

相互に守備の方略を討議して其根軸を固め、有事の日に當りては、甲乙相互に援助して戦機を誤らざる様御説諭せられ、大樹よりも台旨を以て、勅諭を奉り武門の職掌を盡し、御國を護衛し、人民を塗炭の苦に陥らめざる様の心掛を命し、毎年一度は關東より監察を出して、諸國の軍備を吟味して、其調否を朝廷に言上せしむへし、一諸大名前件實行の上は、御國の四方武備充實して、窺ふ可きの隙乘すへきの虚ならしむるふと肝要とるへし、抑清朝鴉片烟の亂を聞くに、一日數十里敗走すと、是れ郡縣の國よして士氣衰頹するゝ故なり、御國は封建の國なるを以て、國毎に將軍あるゝ如し、而して其主とるものハ、累代相承の封土なれど、士卒は死を以て守るへく、民は多年治澤に浴し、父祖墳墓の地なれど、亦死を以て防くへし、上下の恩義恰も素綯の如きなり、且御國の人民は、古來義勇に富み、其背を見せて走るは深く恥辱となすゝ故に、一時戦争に敗れて一國二國と侵略せらるゝも、親は殺され、子は捕はれ、妻は好せられ、娘は奪はれ、此慘禍に逢へば、怨結て解せず、見るに就夢聞くに就夢、憤怒の心益激發し、平日臆病の者も、白刃を持って敵の首に加へむとするの勇氣を生し、遂に一を以て十に當るの勢と成り、此に至り始めて十分の勝利を得て、前きに侵略せられとる一國二國も、手に唾して取返し申すへし、兎角全國を以て死地に置くを肝要とす、

一後醍醐帝の御時、北條高時は皇都を攻め奉り、官軍悉く敗れり、楠正成は、僅に九百餘の兵を以て千窟城に據り、六十州の大軍を引受、能く防戦の術を盡くし、籠城數月に及へり、是に至りて北條の軍勢攻めたくみ、遂に陣中互に狐疑を生し、人心一和せず、始め討手に向ひし新田義貞も、鎌倉を伐ち亡し、足利高氏も六波羅を打ち破り、皇運再び開き、中興の御大業を建て給ひしは、偏に楠正成籠城の功に由れり、今や皇國を以て千窟城に擬し、墨夷始め諸蠻を以て六十州の兵に擬し、大に戦ひ大に争ふと雖、全國一心海陸共に能く防禦の術を盡きは、三五年間は諸蠻の大敵と抵抗するを得へし、然る時は諸蠻に於ても、國勢に隆否國情に嚮背はれど、又内變の起るふと無しと謂ひ難し、且主客の相違も有り、彼れと萬里の波濤を凌て來り攻め、軍費幾千萬なるを知らば、我に於て百萬の費はれど、彼に於



て三百萬の費あるは必定なり、元來夷情は利を貪るふと專一とするに由り、四五年を経て猶勝敗を決せざる時は、彼も於ても利益なきを知り、自ら兵を戦めて和を乞ふに至るへし、既に其的例あり、英吉利の亞墨利加に於るる如き是れなり、墨は舉國一心同力して英と拒戦し、五ヶ年を経て英勝つふと能はざるを知り、遂に和を講じて墨は獨立せり、是れ戦争は耐忍を以て專要とするの證據にして、外寇を防禦するには、全國の人民をして千窟城の想を抱かすめ、億兆一心に歸するを以て肝要とす、

一軍隊の事は武門の專職にして、長袖の者の輕卒に喙を容るへき所に非すと雖、蟻螂車前の怒に堪へずして更に喋々せんとす、歐羅巴・亞墨利加の軍事は、軍船火器の術に精しくして、我々軍用にも其術を取るを專要とす、然れども劍戟の接戦は我々所長なれど、決して等閑にすべからば、海陸の二兵は彼我の所長を交へて編成し、歩戦の法、騎戦の法、伏兵の法を始め諸法を練磨し、火攻め・水攻め・夜討ち・朝掛多、其他奇正互變種々の策略を以て、臨機應變海陸の戦をなす、勇武を振ふは勿論にして、海岸の要所要所には、秦の長城の如き堅固なる砲墩を築造し、軍船と相互に海陸應援して、外寇を防禦するふと肝要なり、兎も角平常に於て海陸二兵を準備訓練し、一朝非常の變あらば、疾雷耳を掩ふ能はざる如く、大小銃の烟を飛ばし、劍戟の光を散らし、日本の武威を示さんこと頗る本懐の至りなり、是は畢竟如水練の説にして、軍學者之を聞くと必ず噴飯すへし、

第四 三都伊勢警衛の事

一京都は、南に攝津、北に若狭と、何れも海に接し、異船入津の便利あり、警衛尤大切なり、一朝戦争起らば姦民、非常な僥倖とし、如何なる異圖を企つやも知るへからば、徳川懿親の大名に主將を命せられ、警衛軍隊の總管として、京都に本營を構へ住居せしめられ然るへし、

一江戸は京都同様なるも、徳川累代の城濠あり、譜代恩顧の士卒何十萬を以て數ふへし、又甲府要害の地方近方に控へて、京都より百倍するの堅固なり、將軍自ら軍隊を指揮し、警衛は自由なるべきを以て、別に主將を置くに及ばざるへし、

るへし、

一大坂は京都に接近し、無比の要地、殊に諸國の船舶輻湊する所にして、一朝事あれば、京都は唇亡て齒寒きの恐れあり、宜く大祿の大名より名望あるものを任選して、警衛軍隊の主將仰附られ、京都の總管と、車の兩輪の如く、相援助して非常に備ふへし、

一伊勢は神宮の御鎮座まします所にして、至重至貴の要地にして海岸に接し、一朝事あれば禍患計られず、徳川懿親の大名に警衛軍隊の主將仰附られ然るへし、

一全國の大名を三分し、其一を京都及び大阪の警衛軍隊とし、其二を伊勢の警衛軍隊とし、其三を江戸の援軍に充つ可し、軍隊は常備と非常とに編成し、緩急相應して防衛の任を盡さしむへし、御國は元來海濱に接する國々多くして山國は少きゆへ、山國の諸大名々、海濱に接する國々の援軍に充て、平常より其組合を定め置くを、

一京都・大坂・伊勢の常備軍隊の將は、當主の嫡庶子の内、又ハ一門家老に限るへし、是は不幸にして敵軍の爲に本國を攻め取られ、父子一族討死する時、其忠節を憫み、京都・大坂・伊勢の常備軍隊に將さる血統の遺族をして、封土を回復せしむるふと命せし、散亂の士卒も新に其主人の血統たる一將を得るふとを悦びて、各相來り集りて恢復を計り、主従一致して復讐の念慮を熾んならしめ、義勇を鼓勵して再び戦争に従事すへし、

一諸大名の兵數に不足ある時は、諸寺諸山の僧侶を徵集して軍隊を編成すへし、全國の僧侶は數十萬の多きに及ぶを以て、平常に軍事の心掛多を爲さしめ置るは、有事の時ば國家の用に供するに足るへし、墨國の條約中にも踏繪を廢するの一事あり、僧侶の爲にも法敵なれど、念珠鉦鼓に換ゆるに戎器を以てし、死力を盡して退治せざる可からば、天草の亂は大阪陣に打漏されの浪人切支丹の宗教に依り、愚民を煽動し島原に籠城し、十四名の大名攻圍百餘日に及び、板倉内膳正討死せり、切支丹の宗教人心を固結せしむるハ此の如く恐るへし、此恐るへき宗教を奉ずる外敵を打拂ふは、僧侶さるもの、情願する所ならん、依て諸寺諸山の僧侶に懇々と説諭して、法敵退治の爲め、觀經



念佛の餘暇に軍法を練習し、非常準備に僧軍編成の心掛を爲さむへし、

第五 國貨融通の事

一非常の大變革を行ひ、御國威擴張の基を建つるも、金貨通貨の力を假るに非らざれど何事も爲すべしと能はざるなり、目下流通の金高を、一千萬兩と聞ゆり、今や軍船始め運漕船の製造より、兵糧器械の用意を爲すに當り、僅に一千萬兩の通貨にては、連も引足り申さざるべしと明瞭にして、殊に近年に至り、大小名とも會計疲弊の餘を承り、軍政の更張は尤困難なるべしと思考す、依て急に數千萬兩の通貨を増鑄して、大小名の疲弊を救助せされど、軍政の更張は決して望む可からば、去連數千萬兩の通貨を増鑄するべしとは一朝一夕の業に非ず、已むを得ず一時の權道を以て金銀札を製造して、天下に流通せしむるの經畫を爲すべし、金銀札製造の上は、朝廷始め柳營の費用を辨し、大小名も家格・祿高に應じ、夫々御貸下下相成、從前の藩國限りの銀札・錢札・米札を禁止し、金銀札を以て一般に流通せしめ、全國の會計をして潤澤ならしめ、各地とも軍備整頓は意の如くなるに至らん、

一後醍醐帝の御時に、金札製造の御例あり、又唐土にも金札と正貨と交用し、或は金札のみを通用せし先蹤あり、今や國事多端の際なれど、太政官符を以て金銀札製造の事を仰出され、遍く天下をして、一時全國の疲弊を救済し給ふの聖意を知らしめんべしとを要す、關東の諸役人に於ても、此新法は異議なく施行すべし、其譯柄は墨國要求の條約の如き大事件にして、輒く承諾せんとする内情を推量すれば、彼々軍船・大砲に恐怖する而已に非らずして、金銀に富める墨國と貿易を行へば、運上の利益莫大なりとの事に垂涎し、柳營の會計に餘潤を得んとするべし故ならん、通貨を増殖することは元より好む所なれど、金銀札製造の新法は決して故障を申立てざるべし、是は普通の人情より推量する所なり、惟々非常の御英斷を以て、速に仰出されんべしとを渴望す、

一發行の金銀札は、三十年又は五十年を期して、金銀の眞貨と引換らるべしを要す、信義は天下の至寶なれど、必ず其引換の期を愆る可からば、一たび信義を失へば、天下の人心歸服せず、因て金銀札通用の期間に、佐渡なり、生野なり、

怠慢なく金銀を掘り出し、眞貨を鑄造して三都の地に蓄藏し、預め其引替の用意を天下に示して、信義を立つるべしとを知らしむべし、金銀札を頒行し、人民に於て之を賤しめ、流通を妨碍せしめ、其通用の期間も、斷然と金銀の眞貨を用を嚴禁して、金銀札と引替を出願をへしと觸達すべし、左すれば富商豪農は、金銀貨を蓄藏するも利倍の道なきを以て、石瓦と同様の想を起し、必ず金銀札と引替を出願すべし、是れ又一時の權道にして已むを得ざるの方略なり、但通用の貨幣を製造するも、其多寡に依り大に利弊ありて、其流通高を定むるは、至て六ヶ敷ものなりとの古賢の説を兼て承り居るに依り、卓識博聞の士に勤考仰附られ、金銀札の製造高を定めさせられて然るべし、

一大小名へ御貸下下金の銀札返上も、其祿高に應じて割合を附り、十年又十五年位の年賦と定め、隨分寛宥の御沙汰然るべし、近頃諸國士卒の立身出世を聞見するに、文武の道を以て拔擢せらるるもの至て稀にして、收斂營利の功を以てするもの多し、理財は家を齊へ、國を治むるの道に於て、至て大切の事なるも、近來は其道に外つれて講究するべし故に、貪利の風盛んにして、誠に歎息の事少からば、金銀札返上の期間短きときは、從來の疲弊の爲に、有司無理算段をなし、從て收斂の新法を起して、領分の農商は苛税用金等に苦むべし、是に至ては、折角の軍費御貸下も、民心離叛の種を蒔くと均しき觀を呈して、却て非常の變に臨んで危険の恐れられれば、返上の期を定むるは尤注意を要す、

一諸國の軍備に手を著くる上は、物産の繁殖を謀るも亦急務とす、新田を開墾し、山林を植足し、或は魚鹽の利を興し、其土地土地の模様依り之を經營し、會計の根軸を確立せしむべし、是も太政官符を以て大小名に御沙汰あるべし、尤其費用は更に金銀札を御貸下下相成り、其返上は其興す所の事柄に就て之々年限と割合の高を定むべし、何分兵足り食足るの國土と成させされど、諸蠻の大敵に當るべしとは難かるべし、

一金銀札を製造し、全國の會計に利潤を望むも、太平打續上下驕奢の風を成すを以て、太政官符にて節儉を専らにする様御戒諭せられされど、通貨増殖の爲に、却て士風の遊惰前日に倍徒するの恐あり、因て金銀札製造仰出さ



ると同時に、此御戒諭も通く天下に知らしむへい、

附 戯言二則

一財にれた愚者と智者と仰き尊はれ、財無夢れと智者と侮り卑しめらる、蒙昧の徒は惟財のみ是れ寶として、  
智愚尊卑の差別をも辨へされとも、強て之を恥とせず、惟利慾のみの世の中に推し移り行くふ、そなたで夢れ、無祿  
なれとも本願寺の盛むなる事を勢ひ當る可うらひ、左すれば俗言にも穢多も持つと云ひ、金の無きは首なきに劣  
るとも云ふ、又軍備の興らざるは三つのほう有り、一に貧乏、二に饑饉、三にあばうの世と聞く、新井白石の言に  
も、學問の上に三根あり、一は氣根、二は利根、三は金根の世と云へり、螢に習ひ雪に讀むの苦學は、上古淳朴の世  
の事にや、是も或は金銀を羨むの詞なるへい、

一堂上官階に預る輩も、金銀融通の事に於ては歎息の外餘念なからむ、姓氏も知れぬ無下に賤き町人と融通の對談に  
は、宮大臣に向ふく如くに取扱ひ、彼徒は却て慢言豪語を放ち、己れの賤き身分も顧みずして富有に誇るふと喩ふ  
るに物なり、左れと小祿の輩は忽ち日々の勤務に差支ふるが故に、彼の徒が氣色を損せん事のみを恐れて、之を忍  
ふは内心誠に悔しうるへい、若し一言の違約半日の延滞されと、忽ち催促に來りて齒牙を鳴らし、怒聲を發して罵  
るふと雷の如し、此時に於ては、如何に切齒するも無き袖は振れぬが故に、平身低頭して其不都合を詫ふるのみ、箇  
様に今日の活計に困難し、他家より融通して漸くに衣食するは何故そと思ふに、世間の奢侈増長するに従ひ、日用  
必需の物品も昔日に十倍するの高價にして、家々の祿高は昔日に同じきが故ならむ、是は小祿の堂上々今日の有様  
なり、又數十萬石の大祿を領する諸大名に至ても、猶借金爲に豪富の町人を用人格・留守居格杯ともてはやし、珍  
客を取扱ふく如くに響應して卑劣なる振舞を爲すも、豪奢の餘毒に起るとは申し乍ら、會計の困難を救せんが爲め  
之を恥とせざるなり、是等は何れも金銀通貨の光より致す所ならん、  
右五章は愚昧の建策にして、一つも採用を仰くに足るもの無しと雖、憂憤の餘り御代萬歳を祈り、石龜のシダンダ踏

み立て申述る所なり、

近習・内々・外様三番ノ朝臣、相議り、誠忠ヲ抽テ輕舉ヲ慎ムベキヲ約  
ス。

〔菅葉〕

○五條爲定日記  
宮内省圖書寮所藏本

三月十四日、庚寅、陰、自夕景雨、武者小路三位實建（左衛門）・左衛門佐光昭等來、未刻許自大炊御門

大納言書札到來、被面會度義有之候間、只今可參朝旨被示、即剋參 内候處、内々番所番

頭衆被申合候義有之由、被爲見一紙、予亦同意候間、彼卿・予兩人、中山大納言に面會、兩

番所如此條々申合候段申述之處、至極尤之儀に被存候、尙又近習衆も同様被申合之由被

答、其後當番所番頭衆招寄示談之上、相番同心之人にも觸出了、

一今度不計列參赤心被言上候上と、兎も角も有之間敷儀に候得共、猶又爾後誠忠一致之

事、

一任血氣、龜忽之義無之様、御心得可有之事、

一若又、爾後何故赤心之儀、被申上度條々有之候者、一應番頭に御届可有之事、

一此後申合之儀、不可有口外之事、

嘉永六年十二月卅日、被申渡之義も有之候に付、右之通内々番頭衆被申合候、夫

安政五年三月十四日

三五九

内々外様近  
習ノ人々申  
合ヲ爲ス

五條爲定ノ  
廻文



安政五年三月十四日

三六〇

付、近習・當番所等も同様申合候、仍申入候、此上、如何様之成行に相成候も難計、時宜に寄、御一分關東方御下向申來候共、無御違背程之御決心候哉、自然御變心有之候様之御方、此後之申合に相除可申候間、否無御腹藏承度候、早々御回覽可返給候也、

三月十四日

爲 定

酉剋許退出、

○五條爲定ノ廻文ハ、伏見宮侍御牧家諸留ニモ、マタ之ヲ載ス。

幕府、箱館ニ大黃栽培及製法所ヲ創ム。是日、水戸藩醫佐藤民之助ヲ雇傭シ、該地ニ赴キ其事ニ當ラシム。

〔老中達〕

○公爵徳川順順所藏本  
御城書海防部所藏

○三月十四日水戸藩醫佐藤民之助へ

三月十四日、一松平伊賀守方常阿彌を以、相渡候書付寫、  
○御城書海防部

水戸殿御城附に、  
○御城書海防部

水戸殿醫師

佐藤民之助

佐藤民之助  
ニ雇ヲ命ジ  
箱館ニ赴キ  
大黃栽培製  
法ニ當ラシ  
ム

右箱館表に、大黃、手廣に培養爲致、製法所取建候付、民之助儀御雇被仰付、大黃培養并製法等取扱之爲、彼地に被差遣候間、其段御申付被成候様可申上候、尤御扶持方御手當等之儀に、箱館奉行より可相達候間可談候、  
(御城書抄書拾遺)

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕

○公爵徳川順順所藏本  
御城書抄書拾遺所藏

○三月十四日同藩太田誠左衛門宛

太田誠左衛門様

横山甚左衛門

以手紙啓上仕候、松平伊賀守殿より常阿彌を以、相渡候御書付壹通、(正二收ム)則指出申候、以上、

三月十四日

〔松字日記〕

○水戸藩士西野宣明日記  
子爵澁澤榮一所藏本

三月十九日、天氣晴和、例刻出仕、○中

佐藤民之助來訪、一昨日、奉書登以御城付横山甚太郎城之所、函館へ罷越、大黃等藥草類培養被仰

付、爲御手當卅五兩、五入口、被下置之由也、水戸殿醫師より肩書有之、不審之事也、

米國總領事「ハリス」Harris 蘭國領事「クルチウス」Curtius ヲ旅館眞福寺

ニ訪フ。十五日、米國通譯官「ヒュスケン」、  
マタ「クルチウス」ヲ訪フ。

安政五年三月十四日

三六一



安政五年三月十四日

三六二

〔蘭國領事參府掛目付鵜殿長銳達〕

外○帝國圖書館所藏本  
外國事件書所載

○三月十二日町奉行跡部良弼等へ

明後十四日、アメリカ使節、和蘭領事官旅宿へ罷越申候、道筋之儀を、昨十一日、亞墨利加通辯官、同所へ罷越候通り、有之候、依之御達申候、以上、

三月十二日

鵜殿民部少輔

跡部 甲斐守殿

伊澤 美作守殿

〔蘭國領事參府掛目付鵜殿長銳上申書〕

○伯爵堀田正恒所藏本  
堀田正隆外國掛中書類所載

○三月十三日老中へ

明十四日、亞墨利加使節・通辯官共、和蘭領事官旅宿に罷越候間、去ル十一日、通辯官罷越候節之通り、通行筋屋敷々々、家來相應に差出置、見物之者立留候へ、混雜不致候様、相制し可申旨、御門々・屋敷々々申達置候、此段申上置候、以上、

三月十三日

鵜殿民部少輔

〔江戸町觸〕

○外國事  
件書類所載

〔未考〕  
安政五年三月十三日、町觸寫、事外國

三月十三日、江戸町觸、○伏見宮侍  
御牧家諸留

明十四日亞墨利加使節通辯官和蘭領事官旅宿愛宕下眞福寺に罷越候往返道筋

蕃書調所々九段坂、田安御門前堀端通、井伊掃部頭屋鋪後口々霞ヶ關松平美濃守屋鋪脇

前、西尾隱岐守屋鋪角々左に、眞田信濃守屋敷脇前、新シ橋を渡、愛宕下眞福寺、

右之通候間、兼る町觸之趣相守、通行中、都る不取締之儀無之様、嚴重に相心得、横小路

本戸有之處を立切、木戸無之場所を、竹矢來仕付、同様へ切、通行相濟候程合見計、往來

相通候様を、町役人附添、混雜無之様厚心付可申候、

右之通、道筋并最寄町々不洩様、可觸知也此也、

三月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、急度相心得、名支配限最寄町々にも不洩様心附、早々

可申通候、

三月十三日

〔伏見宮侍御牧家諸  
留〕續通信全覽

〔蘭國領事參府掛大目付土岐賴旨等上申書〕

○堀田正隆外國  
掛中書類所載

○三月老中へ

亞墨利加使節和蘭領事官旅宿に罷越候往返道筋

安政五年三月十四日

三六三

〔ハリス〕等  
蘭國領事訪  
問ノ道筋

〔ハリス〕等

〔ハリス〕等  
蘭國領事訪  
問ニ就キ道  
中取締ノ件

〔ハリス〕蘭  
國領事訪問  
ノ旨ヲ告グ



蘭國領事訪  
問ノ道筋ヲ  
上申ス

安政五年三月十四日

三六四

蕃書調所より九段坂を上り、田安御門、半藏御門前御堀端通り、井伊掃部頭屋敷後より、霞ヶ関松平美濃守屋敷脇前、西尾隱岐守屋敷角左に、真田信濃守屋敷脇前、新し橋を渡り、愛宕下真福寺、

右之通相心得申候、此段申上候、以上、

三月

土岐丹波守  
筒井肥前守  
永井玄蕃頭  
鵜殿民部少輔  
井上信濃守  
塚越藤助

米國通辯官  
蘭國領事訪  
問ノ旨ヲ上  
申ス

〔下田奉行井上清直上申書〕

○堀田正睦外國  
掛中書類所載

○三月十五日老中松平忠固へ

亞墨利加使節儀、差向候用事有之、今朝五半時、和蘭國領事館旅宿に、通辯官差遣度旨申立候之付、承届申候、此段奉申上度如斯御座候、以上、

三月十五日

松 伊賀守様

井上信濃守

〔下田奉行井上清直通達〕

○外國事  
件書所載

○三月十四日町奉行へ

〔朱書〕  
午三月十五日、向方寫取本紙差越、

〔朱書〕  
當番  
亞人掛へ、

町 奉行 衆

井上信濃守

亞墨利加使節儀、用向有之、明十五日朝五半時、和蘭領事官旅宿に、通辯官差遣度旨申立候之付、承届申候、依之此段及御達候、

三月十四日

〔高麗環雜記〕

○東京帝國  
大學所藏本

三月十五日、○中略、

一 亞人通弁官計、愛宕下蘭人旅宿に行、

福井藩士橋本左内

綱紀○景岳○變名桃  
井亮太郎・桃井伊織

宮・公卿間ニ遊説ノ顛末及京都ノ情勢

安政五年三月十四日

三六五

米國通辯官  
蘭國領事訪  
問ノコトヲ  
告グ



ヲ在府ノ同藩士中根靱負

師質〇雪江ニ報ズ。二十四日、マ

〔福井藩士橋本左内書翰〕〇春獄文庫所藏本

〇三月十四日江戸福井藩邸中根靱負宛

太閣正論トナリ關白却テ因循論トナル有志一同切齒憤懣

以三日半急便申達候、春暖之節、君侯益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、隨て愈御清健御精勤御座候條奉拜賀候、然者去月廿九日兩人差立候後、此都之御模様風雲變態正邪換處、〔鷹司致通〕太閣様は逐々御特立正論被爲成、却て關白殿下因循之御論と相成、種々姑息曖昧之御處置御座候て、有志一等切齒憤懣罷在候、〔將軍御問題〕扱西印一件も色々紛々の論起り、只今ては關東有志中も、

天朝之御手を奉假、成就爲致度申居候族も逐々出來仕候位、爲此

御所方〔稱慶寺〕橋君并君公も、閣老同様因循模稜ては無之哉、西洋沈酔はあらぬか杯申

説も相發、小拙〔近藤〕不限、徒監了介及淵藏迄も大に憤激仕居候、右等之勢故、兼る御謙遜之箇

條こそ相背候へ共、情實不分明て是行々幕府之御爲も不相成、且君公之汚名、橋君

へ冤を奉爲蒙候條心外〔良典〕存附、御承知之三國大學に面會仕、同人充分之盡力て、鷹家大

夫小林筑前守と申人〔良典〕引合せ吳候故、兼て御心配之一條并南紀之意味合、關東有司同心

相成候次第等、粗陳述候處、頗雲霧消散仕、右兩人極密太閣様へ言上致吳候運〔鷹司家諸大夫小林良典二面談ス〕相成候

慶永ヨリ三國大學へ致書センコトヲ請フ

處、小拙申丈ての證無之、大に迷惑仕候得共、先大學専ら之周旋て、御直書有之同然て取扱吳、迅速〔稱慶寺〕右西城之一條、太閣様御心配被下可達

叡聞次第相定申候、依此右周旋之處、大學迄君公厚御謝辭御直筆て可被仰下候、

尤大學此節爲

神州粉骨致候心得御坐候間、此等之處逐一御披露可被下候、委細之義も、今便て盡兼

申候、勿々不取敢得貴意候、以上、

三月十四日

景

岳

雪 江 様

南紀ハ九條家へ取入ル

時下御自愛奉祈上候、本文之趣、上も一ハ喜、一ハ恐之御景境と奉拜察候、乍去南紀ハ九條家へ取入、又其々荷擔之公卿方も有之候故、左様相成候てハ、天下之勢不可如何に相成候故、無據發憤仕候義御坐候、兼々御謙退之御美德を奉害候義も、此事之成功を以て御乗除可被成下候、夫とも貴君も如何と被思召候ハも、今度之一義は小拙一人引罪、

君公に申開可仕候、決て叨奉汚太閣之清聽候て、御家風之美を損候こと無御坐候、呶々及陳述候ハ、畢竟悦〔稱慶寺〕餘り候故御坐候、御一笑可被下候、以上、

小林之心配も固不容易、此義も御直書中、厚御謝し可被下候、尙一々は申上兼候、御推察、

安政五年三月十四日

三六七

京都幹旋ハ左内一人罪ヲ負ハン



安政五年三月十四日

三六八

皇朝崇奉ノ  
意燦然

本紙申上候通、此事ハ大學不容易盡力ニ御坐候間、吳々厚御謝可被下候、御文體ハ君  
公思召次第、乍去隨分、

皇朝御崇奉之意燦然之方宜、且、鷹殿下へ御依頼之趣相見候様、御認取可被下候、其表カ  
も三日半にて御指立ニ相成候様致度候、此都之嫌疑益甚御坐候間、其邊能御注意、慥なる  
先柄御擇、嚴封にて御差出可被下候、

堤五市郎ヲ  
上京セシム  
ルモ可

又ハ堤五市郎位急飛脚にて御遣し(正敷)こるも宜、乍去是非三日半、遅くトモ四日迄ニ不着し  
て、萬一閣老引取候後ニ相成候は、所謂六日菖蒲ニ御座候、尙委細は近々御國より以  
飛脚可申達候、以上、

御謝辭之處ハ、小林茂最トシ、三國カ厚御陳述御坐候様心願ニ候、吳々急速周旋之處、深  
御謝可被下候、以上、

三白、御直書も貴君御添書も、御下書一枚ヅ、小拙迄御廻し可被下候、其方カも萬屋甚  
兵衛方へ御頼被遣候と如何、

左内ノ起草  
セル慶永ヨ  
リ鷹司太閤  
ハノ書翰案

先日來家臣伊織(備左衛門)カ申談候通、西城之儀ハ、實ハ幕府之急務要策ト存居候、乍去以德川之家  
事、奉汚太閤清聽候は恐入候義故、是迄は指控居候得共、近頃風聞承候へ、紀州カも執柄

英明ノ一橋  
慶喜繼嗣ヲ  
ラズンバ列  
藩失望セン

家へ先入有之由、當今非常之御時節、右等之義ニ依り、萬一英明之一橋卿差置、此選外人ニ  
歸し候ハ、列藩失望ハ不及申、乍恐  
皇國之御爲ニ不相成、於我等も奉對

天朝申譯無之次第ニ可運致ト存附候故、不顧小嫌、拙存並事情等爲及陳述候處、其許カ小  
林筑州へ被談、筑州殿格別之厚意にて早速心配被致吳、殊ニ

太閤ノ幹旋  
ヲ切望ス

殿下御合ニ相成候御沙汰御坐候條、爲天下致大悅候、今後ハ何分  
殿下之御盡力奉仰候外なく候間、右紀州之先入を解候ハ勿論、所要一橋卿西城御養君ニ被  
成候様、われら年來懇願之趣、無落御披露厚頼入候、此頃外夷御所置一條云々ニ付て、此

一策速ニ不相立候は、衆論無所定、難有  
叡慮も疎外ハ達間布哉ト苦心致居候、尙小林筑州殿へも段々御勞心之條、厚御申謝頼入

候、  
一寸内々御案文拵候、此等にて可然候、太閤殿下トカ、又は殿下トカ兩様之内可然候、

三國ハ大和  
魂ノ男

此御狀ニ貴君御添被成下、三國迄御遣し奉願候、三國は誠に大和魂其處御合、御書取可被  
遣候、御文面御趣意此様な處可宜候、尙又篤と御勘考思召次第、隨分

皇朝崇奉之思召、御手強之方宜御坐候、

安政五年三月十四日

三六九



過日薩州之譯も有之候間、些障り候處御思慮可被下候、依て如此御草稿致試候也、

〔橋本左内京都報告書〕

○春藏文庫所藏本

○三月十四日中根鞞負へ

第一號 近藤了介持參、

前月廿九日以横山此都之景況申上候後、種々轉變、苦心之至、筆頭之難盡奉存候、其經過大略如左、

左内三條實萬ニ調ス

一ニケ所ノ開港問題ハ末ナリ戰爭ノ覺悟ナラバ速ニ其手ヲ講セラレベシ

延議和戰イツレナリヤ左内三條實萬ヲ辯難ス

一三十日朝三條殿に罷出候處、直様御目見被仰付、依例御懇話、内密種々御相談等御座候上、別紙列候赤心御尋之書付、並三ヶ條御糾問之書付、御示被遊候之付、此等之義一通りハ御尤之御座候へ共、過日來段々御意も有之、賤臣も言上仕候通、方今と相成候てハ、中々一ヶ所二ヶ所開港之有無にて、天下之安危ハ難決、自然愈戰鬪之御覺悟之被爲在候へ共、今日も斷然 叡慮被仰出、速小兵械・糧食・玉藥・陣營等の豫備無之候てハ不相濟、別して急速之勇邁英果之總元帥可被命候、乍恐

主上公卿も今日之如く優悠不決にてハ神州之沈淪益甚、結句因循ト申條、關東之方規格有之候様奉存候、右戰和之二字、延議ハ何之向候哉、尊慮ハ如何御座候哉、列候之赤心、達

天聽候へ共、天下無事之治り候御見込小御座候哉と、手強辯難仕候處、内府君御迷惑之御

將軍繼嗣及後見職

東西同シク因循ニ陥ル

人臣ニシテ天下ノ大計ヲ沮ムハ痛憤ノ至三條實萬ヲ激勵ス

三條實萬ノ辯解

様子ニ奉伺候、其節種々御嘆息相發、畢竟過日來相咄候通、西城邊之一策、並後見を被立候事共「當今之至計、和戰共此ニ歸し候は、既ふ先夜も互に反覆論究候」義にて、随分骨も折試候へ共、兎角執政邊勇斷立兼、「實ふ東も西も同様の」因循ニ陥り、甚心痛之義候、内實ハ此間も兩殿下に罷越、種々論辯致候義候、既先日相咄候通、陽明家方も奏聞相成、其上此節左府も格別其邊心配致し被居候、唯々指支候者ハ一兩人ニ極り候事被仰候故、

天慮曖昧にて亡國之災惹出候は、此無據義にて、臣子包憤ケ所も御座候へ共、假令太閤こそせよ、關白様こそせよ、爲人臣天下の大計沮格仕候るハ、痛憤之極ニ御座候、去れば天下之至計ハ、尊慮こそ益此一件ト、今日迄御確持御座候上ハ、賤臣最早可申上ヶ條無御座、誠以御聰明絶倫ト奉感服候外なく、此上は何卒乍恐今一層爲 神州御援激被遊、三公之任御果し被遊候爲ふ今一層御辨難被遊、方此時天下之至計ありながら不被行は、居其官者の恥辱と申す處、篤と勘考、かの孟子の言責ある者不得其言ハ去ト申處、反覆御熟玩被成下候様、爲天下爲尊公奉懇願候、其上にてハ和戰之二字如何御座候哉、此又大眼目之處ニ御座候、此も先達方御見込御違ひ不被遊候哉、此節ハ書生輩紛々申立候故、萬一御見當違ひ候も不被計と奉存候ト言上仕候處、夫ハ過日も逐々申入候通、同志之内杯ニハ于今劇論之方有之候得共、於此方ハ備中申通にて屹度後患無之トモ不存候得共、英主良將擇用ニ相成候



戰ニ至ラズ  
外夷懾伏ノ  
手段アラシ  
疲弊遊惰ノ  
民ヲ以テ戰  
ヲ催スハ危  
シ

關東ノ嫌疑  
甚シ

關東方ノ京  
都ニ對スル  
思惑

安政五年三月十四日

三七二

ハト、戰ニ不至して自ら外夷懾服可致手段も可有之哉、「内地之改革、御主人之御見込通（松平慶志）も相成、御主人君抔天下之大政も御預り被成候ハト、時勢挽回之途ハ、夫々可生被存候、當今疲弊遊惰之人民を以て、倉皇戰を催候義懸念ニ候、此處ハ最初ハ此方之見込ニて、即初對面之節、其許も近時之景勢被說出候ニ付、心中打明し候通、決て轉換無之、扱不相變及劇論候、此上ハ此方も今一際覺悟致、過日其許被申候内姦を防不申しては萬事掣肘云々、大に適意申候、此處今一際工夫可致、尙又同志へも相談、又々面會も可致と被仰候故、此節甚嫌疑強相成候間、格別御疑惑も無御座節ハ度々御目見不宜、關東方御家を頻ニ探索仕、賤臣を土州の御家來ト心得居候趣も相聞申候間、賤臣カ言上仕度節は可願出ト申上引退、此頃關東之方探索仕候ニ、何分京師之固陋ニは困居、今トなり鎌倉時代ヲ如何程申居候ても、無詮事ト申居候、事ズミノ見詰ハ如何ト相尋候へハ、何分過日列候存御尋被仰出候御返答、關東より來り候迄ハ見詰ト申候るも無之條申居、岩瀬・平山 大同小異又列候中ニは心得違之者有之、阿州・土州・尾州種々手筋を以る此表へ内達致候由、爲之廷議も大ニ六ヶ敷相成候ト申居候、此等之處、後ニ相調候へト、傳奏東坊城殿・關白殿抔内廊之模様御漏し有之候より、關東へも相知れ候鹽梅、  
上巳 近衛左府公・三條内府公御兩人朝之御參内ふて、七時前之御退出のよし、御參内ハ、其外折々御

鷹司太閤ハ  
不評判九條  
關白ハ議論  
二途ニ出テ  
公卿疑惑ス

久我建通九  
條關白ト論  
判ス

建通辭表ヲ  
提出ス

座候、此日  
ニ不限、

此頃太閤殿ハ殊之外不評判、貴賤共惡申居候處、關白殿も何やら關東方へ被對候ては平穩を被仰、御所方へ被對候てハ、英烈を被吐、公卿方大ニ疑惑之よし、此義を議曹衆（奈也）にて御心配有之候折柄、鷹司の大夫小林筑前守と申者、我主君之事ニ付、久我殿へ罷出、太閤のみならず殿下（九條侍忠）も御兩心有之ニ相違なし、此邊推て御穿鑿御坐候ハト奸獮相見可申旨、内密ニて數條申達候ニ付、久我殿、四日夕々同夜八時頃迄御論判御坐候處、存外優柔の論のミ勝、此迄素面ニて強勢被申張候時と大相違、依て從來御口舌貳ツニ成、諸人疑惑を抱候間、何分御手強なる御趣意の事故、一方ニ御片付衆心を一ニ被成候様願度と申され候處、其ニ此方深意有之事ニて、不出來旨御斷之由、其ニてハ此迄議奏へ被仰聞候次第詐僞ニ候哉、貴君も關東方ニ御坐候哉抔極口罵られ候處、何分一定之論出不申、依此久我殿始て、殿下も御異存有之、不足頼事御承知ニ相成申候由、依て五日曉御内願御差出に相成候と申事、

御内願之御趣意ハ、私義病氣ニて退役相願候處、格別之特旨を蒙恩榮難忘、今日迄勤來候へ共、當今之義ハ、天下の御大事ニて、私才力ニ不能、且病痾も爾々不仕候故、役義御辭退申上度候、乍去退休して安逸を欲候ニは無御坐候、假令閑散之身と相成候ても、報

安政五年三月十四日

三七三



國赤心ハ金石カモ堅存込居候趣のよし、此結句にては有趣意事ニ相違なしと申延議ニ相成、其通被仰付候譯にも不參、于今遷引致有之、右御願面御同役にも御相談無之御指出之よし、徳大寺殿へ朝五時頃被仰遣候故、其にてハ不相濟ト申、被驅付候處、只今既ハ指出申候云々にて、大失望のよし、

此方後、延上之模様奸物は太閤のミならず、兩殿下・兩傳奏なりと申、公卿方騒立申候、

三月六日粟田に罷越、青蓮院宮様に嘆願仕、何分延議相決候様相願候積にて罷越候處、過日來御里坊へ被爲成、未ダ遷御無之旨申居、依て一封相認密疏仕候、其趣意ハ當今之事、實ニ不容易御事柄、既ハ過日來「御寵臣迄、主人存込並乍恐も賤臣見込之義言上仕候處、爲皇國厚心配仕候條、御満悦之趣被仰下、誠以身ハ餘感激仕候、(伊丹藏)藏人内密之義ハ御目見相願候疑、又ハ書取にてと申聞候譯も御座候故、奉恐入候得共御左右の侍史迄、内々書取奉指上候、乍恐近來延議遷延仕候義、無據御事柄トハ申條、畢竟公關の御隔絶ハ正邪之爭と相成居候様奉存候、此儘にて彼此日數も遅延仕候ハと、忽内亂可生、左様相成候ハ、御國內之奸雄、窺隙の動候者も可有御座候、夫等ハ益關東之事惡様御聞込候ハと、實ハ外患ハ内變共可相成歟ニ奉愚考候、

主上ニ御聰明、宮様ニ御相談も不絶被爲在候御儀ニ御座候へば、兼て御懇命蒙居候

公卿等太閤  
關白兩傳奏  
ヲ奸物ト稱  
シ驟然タリ  
左内青蓮院  
宮ニ密疏ヲ  
上ル

延議遷延セ  
ハ内亂生セ

川路ヲ召シ  
關東ノ意見  
ヲ聽キ折衷  
案ヲ決シ御  
慮トシテ御  
發表アルベ  
シ

青蓮院宮ノ  
定見

諸大名ノ縉  
紳家ニ阿附  
スルハ眞忠  
ニ非ズ

徳川家ノタ  
メニ扶援盡  
力ヲ請フ

川路・左内々御呼出ニ相成、東方之見込と御所之思召と御打合ニ相成、矯枉爲直削此填彼候様、極内御決定被遊、延議ニ不拘 叡慮にて右御斟酌之處、斷然御降勅とも相成候ハと、天下之人心忽相定可申、諸大名の内通も相止、却て天下清肅可仕候、乍去川左之義自然御疑も被爲在、先日罷出候御様の御咄振ニあるハ、彼も赤心ハ打明し申間敷奉存上候、且又、乍恐 宮様ニ御定見被爲在不申候ハ、彼も屈服仕退考候ハ盡力ハ申間布、御定見之處ハ過日之御論にてハ、三百年來之徳川故、其厚義ハ於朝廷堅御忘不被遊、依て和戰治亂共賢明之副將無之してハ不叶よしト奉伺候、愈其處にて御主張も被爲在候ハと、誠以難有仕合ニ奉存候、諸諸大名近來縉紳家へ手筋を求瞞弄致候様相聞申候、此似忠非眞忠ト奉存候、其故ハ 天朝を崇奉可奉義ハ天下一統之義にて、主人杯ニ兼ル 王室之義ハ格別ニ存罷在候へ共、今日之事柄ニ到候ハと、眼前之幕府へ不盡力して、却て内々言上仕候ハ、畢竟賣忠獻佞之手段ト奉存候、此等浮薄之者之爲ニ御動搖御座候てハ、 朝廷之御威光ニも拘リ可申哉ト心痛仕候、此邊ハ南北朝の節確證も有之事ニ御座候ハ、彼朝北夕南重畫を中黒ニ仕候様の人々を御頼被成候ト、乍恐 皇室傾危之基にも可相成、幸ヒ

主上始徳川家御扶援之御見込ニ被爲在候ハと、益々衆目を醒候程此處へ御盡力奉希上候、云々、大意認取、伊丹藏人に相渡、此書ハ遺留を恐候故、直ニ御返し奉願 後手ヲ入申候、歸掛候處、忽還御之御沙汰故、又暫



左内青蓮院  
宮ニ謁ス  
九條關白態  
度一變青蓮  
院宮ノ參内  
ヲ抑留ス

安政五年三月十四日

三七六

時控居候所へ藏人を急召參り、藏人出勤仕、小拙申上候廉々、且自分了簡等言上仕候處、暫小拙ニ控居候様の事ニて無程退出、扱廷議甚御困難ニ相成申候、其譯ハ九條關白景況一轉、依之宮様御相談の處、殊ノ外御忌被成、傳奏方内々移を以て宮之御參内指留申候、疾風の如御供揃被仰出、御本坊へ御引取之由、近衛家も同様、三條へハ未だ何之沙汰も無之よし、依之指當り事務ハ御論不被遊御考之よし、西城之義ハ、宮も格別之御心配ニて、既ハ一兩日已來ハ其處の御奏聞ニ相成、今兩三日も立候ハセ、

九條關白ハ  
南紀黨

主上も其手段御始可被遊之處、爲奸人被離間候ハ口惜と、只今殊之外御憤怒被爲在候、川左之義ハ可相者旨被仰候、多分今後ハ通商ト相成可申、萬事關東へ御任セに可相成哉、扱一橋西城之義、陽明家・轉法輪家・宮杯ハ御決心候へ共、關白ハ南紀之よし、何れ紀方指込候哉ト奉存候、乍併宮之御參内、表向御指留ニハ無之、  
主上ニテ御承知不被爲在御事故、何れ近日ニテ御參内可被爲在、其節ハ尙又近衛家へ御相談被遊、此一義丈ハ是非爲途可申と申居、依て關東方にも諸大名方手筋相廻り候儀も、尙又心得居、至極尤なる事と被仰候、

右十三日認、

第二號

十四日 前文引續、

將軍繼嗣決  
定ハ當今ノ  
上策

三條實萬ト  
青蓮院宮ノ  
關係

尾州ト土州

岩瀨・原・平山等ハ、何分當今之上策ハ西城ニ有之、此義ニ何分天朝之手を假候ても致度趣申合候よし、乍去川路丈ハ存不相分故、充分ニ話兼候、堀田ト決心も有之候間、後ニ承候へ共、西丸ニ致度、左スレハ關東の御爲宜と申、傳奏迄相咄候よし、バ關東の御爲宜と申、傳奏迄相咄候よし、バ關東の御爲宜と申、傳奏迄相咄候よし、り言上可致も難計、關東へ歸候ト奄官・宮妾之爲、此事被障碍候て、下參届ト申居候、此事一兩人慥ニ内密探得候者も御座候間、此等も御含被下、且川路には餘程緊しく御説得被下、殊ハ天下の安危利害之上カ、明々白々ニ御申無之候ては、同人納得仕間布と申、引取申候、此節三條公之御様子相尋候處、伊丹申候ニハ至極方正ニて物慣れ候御方、宮様トハ御肉縁も有之、從來御知己ニ候、此節之御咄合も屢々ニ有、過日來宮御里坊ニ被爲入候間ハ、四五度も御出御座候、乍併公ハ書生論ハ不足取、何分不戦トモ無難ニ取治候事可有之云々の御説、宮様ハ戦を恐れ候るニ因循ニ陷候との御説、此丈ハ御折合ニ不相成候等の咄御座候、

七日、關東方ニて平山謙次郎杯殊之外尾州を罵居、其譯ハ彼公西丸之望有之、京師へ阿附唐様ガ書ク候丈、書ニテ天下ノ政事ハ不出來ト申居、尾州ハ三萬石ノ成上リ、取り廻ハ米庵風之と申事之鹽梅、土州内通之義ハ、色々手段を以る外より辯解爲致、尙又此日了介ガ爲聞取候處、土州ハ流石英邁丈有之、少しも惡事内通ハ無之、却る關東之御爲被思居候鹽梅と申

安政五年三月十四日

三七七



安政五年三月十四日

三七八

居候、依之大に  
安心仕候、

左内青蓮院  
宮ヲ訪フ是  
日川路マタ  
宮ト對談ス

八日、栗田々今晚明早朝之内可來旨、被仰越候故、午時野道々大津迄行、歸途罷出候處、門前々馬鎗有之、此ハ果して川左也、心中々得計ト悅、夫々伊丹へ忍入候處、今日ハ未だ退出不致旨々付、稍久待居候、面會ノ上扱第一々川左如何申候哉と相尋候處、今日宮々川左可被召思召之處、彼々推掛參上申候、依て宮被咄候ハ、今日ハ此方も萬事打捨、我も宮様ハ奉行々々ト、言放被成候、役前を忘れ話致度、扱捨身之軀々て預ル事々は無之候得共、此宮ハ近衛寺元々て第一の旦那々候、其旦那々被相頼候一事有之々依て、我の才智を假て事成就致度如何、無伏藏可申吳歟ト御問被成候所、奉畏候、私力之所及ハ可申上候ト御請申上ケ、夫ハ何事々御座候哉ト申、夫ハ外々無之、大樹御病身虛弱々相違無之、依て西丸養君立度旨御臺御方々御頼、外諸侯々も申參り候よし、依て何とぞ我々頼度候、此事を備中へも談可吳か、此方之考々てと、當今天下之勢を振、諸侯之疲弊を救、夷狄の禍を遠け候爲々て第一の上策と存込、近衛申も尤と存候、我は如何存候哉と御詰問、川御請々御尤至極、宮去らハ我ト備中と心配可致吳、川夫は參不申、宮何故々、カ私共君之病身を嫌、明君を擇立候ト、丁度廢立を行ひ候々當り、皇國之大道々背き申候、此一義私共手々てハ首ハ落候ても出來不申ト御答申上候、ミ夫ハ隨分尤なり、去バ徳川と亡びても、皇國ハ滅びても、我の首ハ落さぬ

繼嗣問題ニ  
就キ川路ノ  
幹旋ヲ望ム

川路繼嗣問  
題ノ幹旋ヲ  
謝絶ス

繼嗣問題ニ  
就キ降勅ア  
ラバ如何

繼嗣ハ一橋  
慶喜ヲ可ト  
ス

對外措置ハ  
和ノ外ニ法  
ナシ

見込か、カ夫ハ左々非らず、廢立を計候臣有之時ハ、皇國は忽滅亡可申、廢立を謀らぬ臣多き時ハ、御萬安ト奉存候、ミ夫ハ隨分開るたり、左あれば我等ハ今日之富貴之爲々、明君ハ不用と見へるな、カ左様に無御座、私共も天下大計急務此々止ルと存、同志者一統種々肝膽を碎居候へ共、右之廢立々當り候事ハ不得行勢、御垂察奉仰希と申候、ミ至極尤なり、去れば勅詔々出候ハ々如何、カ難有奉存候、ミ乍去其次第ハ如何、我之智慧を假度者也、カ其ハ御使が大事々て關東役人共々於ても、叡慮難有奉拜戴不申しては、却て害とも相成可申、其思召を熟く被移候御方御人撰之上は、御至當不過之ト申、ミ左あれば廣橋は不叶、東坊城ハ如何、カ不足々御座候、ミ議奏ハ如何、カ不足々御座候、ミ三條内府ハ如何、ミ彼御方ハ長く傳奏御勤々て御行誼御才辯一統奉感服候、此ならば十分々御座候、ミ夫ハよけれど此ハ大臣故、關東へ勅使々ハ餘程六ヶ敷、併尙又勘考可申候、扱積は出來たれど玉が未なし、其玉ハ誰々ぞ、カ稍久考居、關東宗室中一橋々過る者なし、是非此々限候と申上候處、ミ此方も大抵左様に存し候ト御話被成候、ミ其は扱置和戰之兩字何を取候々哉と被仰候處、カ和を取候、ミ其に見詰有之候哉、カ見詰無之候、ミ十年位ハ亂々ハ成間布哉、カ稍久考候て、今年々も來年々も知れ不申、ミ去ハ何故和の字々候哉、カ其外々致方なし、若打拂之命等降候ハ々、私共一等東へ向歸ハ申間布候と御答申上候よし、其外之義は略之、

安政五年三月十四日

三七九



右川路罷出候時ハ、全く宮様迄御模様探索之様ニ御考被成候よし、偕右川路之説大ニ害を惹出申候、

近衛忠照ノ  
參内ヲ抑留  
ス  
三公ハ關白  
ノ内命位ニ  
テ差控ハ致  
サズ

昨日、即七近衛家へ關白殿方御參内御指留ニ相成、續て三條家へも可及筈之處、傳奏兩人、内府公之方嚴を憚、御使命受不申、其事内府御聞に入り、八日夜俄御參内ニ相成、此節ハ公卿一統へ勅問迄降居候折柄、三公之者參内御指留は不審之至、近衛も御參内可有之旨御申越に相成候よし、近衛殿も同様之御考にて、直接御參内ニ相成、三公は關白内命位にて指扣ハ不致旨被仰立候よし、關白・傳奏共大ニ迷惑被致、昨日近衛へ申達候ハ、聊間違も可有之杯被申居候よし、

關白ノ案ニ  
係ル關東へ  
ノ勅答見合  
セトナル

此日、此御返事一人にて被成候爲ニ、正論家御違之策有之候ならん、關東への御返事、關白殿にて相定候人心折合之義御請合之上は、何とも可被成様無之に付、關東へ御任セテ相成候間、尙又御勘考可被爲在旨ニ相定候處、右三公激論の騷動にて、御返答見合に相成、

九條家諸大  
夫宇郷重國  
ノ諫諍

此節、九條家の大夫宇郷大舍人頭ト申者、大ニ憤激致し、頻ニ諫諍申、何分三條公杯正論の御方を遠られ候てハ不宜、此頃世上にては、九條様ヲ可奉害ナド取沙汰も紛々有之候、吳々爲國家御思慮被有之度ト申し、涕泣して諫候趣、逐一承及申候、

三條實萬近  
衛忠照朝議

九日、前條之御返事奏聞ニ相成候處、左府・内府へも相談候哉と御尋御座候處、兩人へは未ニ御座候、夫は不相濟、國三公始御役人方參内被仰出候處、三條・近衛兩家過日の愠にて不快引、依て勅使ト

ニ出席セズ  
鷹司輔照ニ  
條齊敬催促  
ニ赴ク

家之重事、三公不存しては不相成トの叡慮なり、  
清華へ攝家三公之勅使と申  
事ハ、百年來無之ト申沙汰、即關東へ御返事御相談ニ相成、了て近衛家へも御兩方御出ニ相成候よし、其夕三條殿御參内ニ相成、逐々御論辯、西城惣體の事御建言有之、且一概ハ關東へ御任セト申のゝるハ不宜ト御申に相成候處、一統其ニ左袒之よし、此夜廷議決兼殆徹曉ト申事ニ御座候、

朝議決セズ  
夜ヲ徹ス  
青蓮院宮ニ  
參内ヲ命ズ

十日、粟田宮にも、過日は御參内暫御見合申上候得共、今日ハ叡慮も被爲在候間御參内有之候様、尤格別御手強なる義ハ御申無之様ニト、傳奏々申達ニ相成候處、宮様御立腹、此間ハ止、今ハ動、一は一非何れを取候て可然哉、又座主の宮ハ天下の御無事を祈ル譯ニ候へば、夷狄之事ハ申上ぬト云事は出來不申、天下太平之御祈禱も可申身に取、夷狄之害程可嘆ハ無之候、若此邊關白未々了解無之義ニ候ハと、參内ハ御斷申上候ト被仰候故、傳奏頻ニ御詫申上、漸御鎮定被成、即日御參内御座候、

三國大學小  
林良典太閤  
ヲ諫ム

此頃、三國大學・小林筑前守兩人同腹にて、頻ニ太閤を奉諫、何分叡慮ニ御背不被成様トト切申上候處、大ニ御氷釋、依て青蓮院様へ小林方以伊丹嘆願申上、鷹殿へ御出之上御説得相願候處、段々之御咄ニ相成、詰り川路之申ス如く、和候ても亂之恐有之ならば、不如不和、左あれば叡慮ニ可奉隨と一決ニ相成候よし、此方後ハ至極優柔不斷家、鷹右府も段々御覺悟相立、大ニ手強の論ニ相成、畢竟關白一人・傳奏東坊一人のニ關東方と云事ニ相成申候、關白

關東方ハ九  
條關白ト傳